プラトン全集 7

テアゲス

北嶋美雪訳

カルミデス

山野耕治訳

ラケス
リュシス

生島幹三訳

岩波書店

目次

テアゲス……………………北嶋美雪訳……一
カルミデス…………………山野耕治訳……三五
ラケス………………………生島幹三訳……一〇七
リュシス……………………生島幹三訳……一六七

解説
　テアゲス（二二五）　カルミデス（二三九）　ラケス（二五三）　リュシス（二六一）

索引

凡例

一、本全集は底本として、バーネット版プラトン全集(J. Burnet, *Platonis Opera*, 5 vols., Oxford Classical Texts)を用い、これと異なる読みをした箇所は注によって示す。

二、訳文上欄の数字とBCDEは、ステファヌス版全集(H. Stephanus, *Platonis opera quae extant omnia*, 1578)のページ数と各ページ内のABCDEの段落づけとの対応——おおよその——を示す(ただしAは省略した)。引用は、このページ数と段落により示される(例えば『パイドロス』253C)。

三、各対話篇における章分けは、一八世紀以降フィッシャー(J. F. Fischer)の校本に由来すると見られる一般に慣用のものに従う。ただし対話篇により章別の一定していないものもあり、この場合は適宜区別を設けた。

四、対話篇名につけられている副題(ないものもある)は、ローマ時代のプラトン全集(トラシュロス)以来の、あるいはさらに古い伝承によるものである。所伝によって異同のある場合は、適切と判断されるものを選んでつけた。

五、ギリシア語の片かな表記は、ΦΧΘとΠΚΤとを同じように「プ」「ク」「ト」とし、母音の長短は普通名詞においてのみ区別し(例、ソピアー)、固有名詞においては区別しない(例、ソークラテースでなく、ソクラテス)。

六、〔 〕の括弧は訳者による文意の補足を示す。

七、略記号　DK=H. Diels u. W. Kranz, *Die Fragmente der Vorsokratiker*.　Diog. L.=Diogenes Laertios.　古注=*Scholia Platonica* (ed. W. C. Greene).

八、本全集における対話篇の収録順と各巻への配分は、右のトラシュロス編全集における九つの四部作集(tetralogia)の順序と括り方に従っている。

テアゲス

——知恵について——

北嶋美雪訳

登場人物

デモドコス
ソクラテス
テアゲス

121

一

デモドコス　やあ、ソクラテス、もしお暇なら、あなたと内々にぜひお話ししたいと思っていたことがあるのだが。いや、たとえ用事があっても、格別重大なことでなければ、やはりどうかわたしのために暇をつくってくれたまえ。

ソクラテス　ええ、どっちみちちょうど暇ですし、それにほかならぬあなたのためとあれば、いくらでも。さあ、何なりとお話しになりたければご遠慮なく。

デモドコス　それではどうだろう、ここで道をそれて、解放の神ゼウスの柱廊(1)へ行くことにしては？

ソクラテス　そのほうがよいと思われるのなら。

B **デモドコス**　では行くとしよう。ソクラテス、すべて生まれ出るものは、大地から生えるものも、動物とりわけ人間も、同じ習いらしいね。つまり植物の場合も、われわれ耕作を行なう者にとって、植付け前のあらゆる段取りや植付けの作業そのものは、きわめて容易なことだ。ところがその植えつけられた作物が生長してくると、C それからはその作物についての面倒で厄介きわまりない世話がいろいろ生じてくる。人間の場合も、どうやらそうらしい。わたしとしては、わたし自身の身近な経験をもとにして、ほかのことにまで推測を下すわけなのだが。

というのはじっさい、わたしにとって、ここにいるこの息子を、もうけるというべきか、つくるというべきか、

どちらの言い方がよいにせよ、とにかくそれは世にもたやすいことだった。ところがその養育となると、これはもう厄介きわまりなく、この子のことで心配が絶えないのだ。むろんほかにもいろいろあげうるわけだが、わけても現在この子にとりついている願望が、わたしには頭痛の種でねえ。それはけっして卑しい性質のものではないのだが、危険なものだからだ。なにしろこの子は、ソクラテス、彼の言うところによれば、〈知者〉になりたいというのだからねえ。

D

わたしの考えでは、彼と同じ年頃で、同区民[2]の者たちのなかに、町（アテナイ）に出かけて来て、ここで覚えてきたある種の議論で、彼の心をかき乱す者たちがいるのだと思う。それでそういう連中をうらやんで、このところずっとわたしを困らせているのだ、――わたしがとうぜん彼のことを心配して、ソフィストたちのうちで誰か彼を知者（知恵ある者）にしてくれる者には金を支払うべきだと要求してね。

122

ところでわたしとしては金銭のことは大して問題ではないのだが、この子はやっきになって、小さからぬ危険に向かって突進していると考えられてならないのだよ。これまでのところはたしかに、おだやかに言って聞かせて彼を引きとめてはきた。しかしもはやこれ以上そうすることはできないので、ひょっとして彼がわたしに隠れてこっそり誰かと交際して、堕落させられるようなことがないために、彼の言う通りにしてやるのが上策かと思うのだ。

1　アテナイのアゴラ（『ゴルギアス』447A注1参照）附近にあったもの。

2　デモドコス、テアゲスの父子はアナギュルゥス区（アッティカの区の一つ）の住民。127E参照。

そこでいまわたしは、まさにこういう用件で、すなわち世間からソフィスト（知者）と目されているあの連中の一人にこの子を弟子入りさせるためにやって来たのだ。だからあなたはわれわれにとってちょうど都合よく姿を見せてくれたわけだ。こういうことを実行しようとする矢先、あなたこそ相談相手として願ってもないひとだとわたしは思うからね。

B　さあ、わたしのお話ししたことから判断して、もし何か忠告してくれることがあれば、遠慮なくしてくれてよいのだし、またそうしてくれなければいけないよ。

二

ソクラテス　しかしたしかに、デモドコス、「忠告は神聖なもの[1]」と言いますよ。だからいやしくも、どんな忠告にせよ神聖なものがありうるとすれば、いまあなたが忠告を求めておられるものこそ、それであるはずです。というのは人間の身で相談にあずかりうることがらで、自分自身のであれ、自分の身内の者のであれ、教育に関する問題ほど神聖な問題はありませんからね。

C　そこでまず、われわれが相談しようとしていることがらはいったいどういうことがらだと思うのか、わたしとあなたの間で意見の統一をはかっておきましょう。それはひょっとしてわたしとあなたの間でその問題の受け取り方がくい違っていて、そして後になって話し合いがはるかに進んだ時点で、気がついてみると、笑止千万にも、忠告をするわたしと、忠告を求めているあなたとでは、まるっきり別々のことを考えていた、などということがないためです。

デモドコス　たしかにあなたの言っていることは正しいと思うよ、ソクラテス。そしてわれわれはそのとおりにしなければならない。

ソクラテス　ええ、たしかにわたしの言っていることは正しいですとも。しかし全面的に正しいとは言えないのです。というのは多少改めるべき点がありますから。つまり、この若者もまた、彼が願っているとわれわれが

D

思っていることを願ってはいないのであって、それとは違うことを願っているのではあるまいか、そうだとしたら、われわれは何か別の問題について相談することになるわけで、ここでまたしても、さっきよりさらに一段と滑稽な者となるのではあるまいか、という気がするものですからね。

デモドコス　たしかにあなたの言うとおりにするのが最善のやり方のようだ。だから一番よいのは、この若者自身からはじめることであって、彼が願っているのはほんとうは何なのか、彼から聞きただすことだと、わたしには思われます。

三

ソクラテス　ではどうか言ってください、この若者のうるわしい名前は何というのです？　われわれは彼をどう呼んだらよいのですか？

1　諺的表現。「忠告は神聖」(ἱερὸν συμβουλή) という諺の意味は古くから注釈家により各人各様に解釈され、説明されている。

デモドコス　テアゲスというのがこの子の名前だよ、ソクラテス。
ソクラテス　じつに美しい、そして神聖なものに似合わしい名前を[1]、デモドコス、あなたのご子息につけられましたね。

E

それではわれわれに言ってくれたまえ、テアゲス、君は知者になりたいと言い、ここにおられる君のお父さんに、誰か君を知者にしてくれるはずのひとに弟子入りさせてくれるようにお願いしているのかね？
テアゲス　はい。
ソクラテス　では〈知者〉と君が呼ぶのは、何であれ彼らがわきまえていることについて、知識のある人々かね、それとも無知な人々かね？
テアゲス　むろん知識のある人々です。
ソクラテス　それではどうなの？　君のお父さんは当地の他の誰もが、すなわちひとかどの立派な父親の息子ならば誰もが受けている教育、たとえば読み書き、琴の演奏、相撲その他の競技を君に教えて、教育をほどこしてはくれなかったのかね？
テアゲス　いいえ、ちゃんとしてくれました。
ソクラテス　それでいて君にはまだなお何らかの知識が不足していると思うのかね、——その知識についての配慮を君のお父さんは君のためにとうぜんしてくれるべきなのだと？

123

テアゲス　ええ、思いますとも。
ソクラテス　何なのかね、その知識は？　君の気持に添ってあげられるように、どうかわれわれにも言ってく

れたまえ。

テアゲス　父だって知ってはいるのです、ソクラテス、——私自身繰り返し彼に話しているのですからね——、それなのに、私が何をのぞんでいるかまるで知らないかのように、わざとさっきのようなことをあなたに言っているのです。げんに、別のあれと同じようなことをこの私にも言って攻め立て、私を誰にもつかせたがらないのですからね。

B

ソクラテス　しかし前に君がこのひとに話したことは、いわば証人なしに言われたことだ。いまこそさあ、このぼくを証人に立て、そしてぼくの面前で、君が切望しているその〈知恵〉とは何なのか言明したまえ。

さて、いいかね、もし人々がそれによって船の舵を取る、そうした知恵を君がのぞんでいるものとし、そうしてそういう君にたまたまぼくがこういう質問をしたものと仮定してみたまえ。

「テアゲス、いかなる知恵が君に不足しているためかね、君がお父さんをこう言って非難するのは？　君がそのおかげで知者になりうるかもしれない、そういう人たちに父上は君を弟子入りさせたがらない、といって」ぼくの質問に君はどう答えるだろうかしら？　その知恵は何であると……？　舵取り術ではないだろうか？

テアゲス　そうです。

C

ソクラテス　ではもしも、それによって戦車(2)を馭する、そうした知恵に秀(ひい)でた知者になりたいと君はのぞむが

1　シュタルバウムによると、テアゲス Θεάγης とはアッティカ語で「神をおそれ畏(かしこ)む者」(θεοσεβής) の意味であったとされる。「神に捧げられた者」(θεο-άγης) とする説もある。

2　戦闘用の馬車を指す。123D参照。

ゆえに、お父さんを非難するのだとしたら、そして今度もまたぼくが、その知恵とは何か、とたずねるとしたら、何だと君は答えるだろうか？ 馭者の術ではあるまいか？

テアゲス　そうです。

ソクラテス　では、それをしも君がいま切望している知恵、それは名前のないものかね、それとも名前をもっているかね？

テアゲス　むろん名前をもっていると思います。

四

ソクラテス　それでは君はそれ自体は知っているが、それの名前は知らないのかね、それとも名前も知っているのかね？

テアゲス　むろん名前も知っています。

ソクラテス　では何かね？ 言いたまえ。

D

テアゲス　〈知恵〉としか言いようがないでしょう、ソクラテス、それ以外の何か別の名でそれを呼ぶことができるでしょうか？

ソクラテス　それでは聞くが、馭者の術もまた知恵かね？ それともそれは無知だと君は思うかね？

テアゲス　いいえ、けっしてそうは思いません。

ソクラテス　すると知恵かね？

テアゲス　はい。

ソクラテス　その知恵をどういうことに使うのかね？　われわれはその知恵によって、軛（くびき）につけた馬〔すなわち二頭または四頭立ての馬車〕の馭し方を知るのではないかね？

テアゲス　そうです。

ソクラテス　では舵取り術もまた知恵ではないかね？

テアゲス　そう思います。

ソクラテス　それは、それによって船をどう制馭すべきかを知るものではないかね？

テアゲス　ええ、そのとおりです。

E

ソクラテス　しかしすると君が切望している知恵、それは何なのかね？　それによって何を制馭・支配するすべを知るものなのかね？

テアゲス　それは人間を制馭・支配するすべを知るものだと私は思います。

ソクラテス　まさか病気の人間を、というのではあるまいね？

テアゲス　いいえ、けっして。

ソクラテス　そういうことをするのは医術だからね。そうだろう？

テアゲス　そうです。

ソクラテス　それなら合唱舞踏隊の歌手たちをどう支配すべきかを知るものかね？

テアゲス　いいえ。

ソクラテス　そういうことをするのは、音楽だからね。
テアゲス　ええ、まったくそうです。
ソクラテス　しかしそれなら、それは体育の練習をしている人間を支配するすべを知るものかね？
テアゲス　いいえ。
ソクラテス　そういうことをするのは、体育術だからね。
テアゲス　はい。
ソクラテス　するとそれは何をしている人間を支配するすべを知るものなのだね？　以上の論議でぼくが君のためにしてきたとおりに、一所懸命言うように努めたまえ。
テアゲス　それは国家社会のうちにある人間を支配するすべを知るものだと、私は思います。
ソクラテス　国家社会のうちには病気の人間だってまたいるのではないかね？
テアゲス　ええ、いることはいますが、しかし私が言っているのは、ただ単にそういう人たちだけではなく、国家社会のうちにあるすべての人間を、ということです。
ソクラテス　はたしてぼくは、君が言っているのはどのような技術のことか、わかっていることになるだろうか？　というのは、君が言っているのは作物の刈入れや取入れをする人たちとか、植付けや、種蒔きや、脱穀をする人たちをいかに支配すべきかを知る技術のことではないと、ぼくには思われるからだ。これは農耕の技術だからね、――それによってこれらの人々をわれわれが支配するのは。そうだろう？
テアゲス　そうです。

B

ソクラテス　かといってまた、思うに、鋸でひいたり、錐で孔をあけたり、鉋をかけたり、轆轤(ろくろ)を回したりする仕事をする人たちを総じて、どう支配すべきかを知る技術、そういう技術のことを君は言っているのでもあるまい。じじつこういうことをするのは大工の技術ではないかね？

テアゲス　そうです。

ソクラテス　いや、きっと、すべてそのようなことをする人たちのほか、農夫自身も、大工も、あらゆる専門の職人も素人も、女たちも男たちも支配するのに必要な技術、それがおそらく君の言う〈知恵〉なのだろう。

テアゲス　まさにそれなのですよ、ソクラテス、さっきから私が言おうとしているのは。

五

C

ソクラテス　それでは言ってもらえないだろうか？　アガメムノンをアルゴスで殺害したアイギストスが支配していたのは、君の言うような人々、つまり職人も素人も、男も女も、すべてかね、それともそれ以外の誰か別の人々かね？

テアゲス　いいえ、そのような人々です。

ソクラテス　ではどうだね、アイアコスの息子のペレウス(1)がプティアで支配していたのも、やはりそのような

1　神話、伝説上の人物。アイギナの王子であったが、兄弟殺しのかどで父アイアコスから国外に追放され、プティアの地に来たって、この国の王エウリュティオンによって罪の浄めをうけ、その娘アンティゴネと結婚。のち狩猟中に誤ってエウリュティオンを殺し、ふたたびこの地を追われることになる。

人々ではないかね？

テアゲス　そうです。

ソクラテス　それにまたキュプセロスの子のペリアンドロス[1]がコリントスの支配者だった話を君は聞いたことがあるかね？

テアゲス　ええ、あります。

ソクラテス　彼が自分の国で支配していたのも、同じくそういう人々ではないかね？

D

テアゲス　はい。

ソクラテス　では、かの、最近マケドニアの支配者となった、ペルディッカスの子のアルケラオス[2]はどうかね？　彼が支配しているのもやはりそういう人々だと思わないかね？

テアゲス　ええ、そう思います。

ソクラテス　それにまた、かつてこの国の支配者だった、ペイシストラトスの子のヒッピアス[3]が支配したのはどういう人々だったと思う？　やはりそういう人々ではないかね？

テアゲス　たしかにそうです。

ソクラテス　さてそれでは、バキスやシビュラや、われわれのところのアンピリュトス[4]にはどういう呼び名が与えられているか、ぼくに言ってもらえないだろうか？

テアゲス　ほかでもない託宣師という名です、ソクラテス。

E

ソクラテス　君の答えは正しいよ。ではさあ、ヒッピアスやペリアンドロスのような人たちについても、そう

いうふうに答えるように努めてくれたまえ。この人たちは同じ支配のゆえに、どういう呼び名で呼ばれているかね？

テアゲス　独裁君主という呼び名だと思います。それ以外にないでしょう？

ソクラテス　そうすると、その国のうちにいるすべての人間を支配しようとのぞむ者はみな、この人たちが行なったのと同じ支配、つまり独裁支配をのぞみ、独裁君主たらんことをのぞんでいるのではないかね？

テアゲス　そのようです。

ソクラテス　それでは君がのぞむと言っているのもこういう支配なのではないかね？

テアゲス　私が答えてきたことからすると、どうやらそうらしいです。

1　コリントスの独裁君主(前六二五頃—五八五年頃在位)。七賢人の一人に数えられることもあるが、プラトンでは除かれている(『プロタゴラス』343A)。ヘロドトスによると、「最初は父王キュプセロスより穏健であったが、ミレトスの独裁君主トラシュブゥロスと使節を通じて交わるようになってからは、キュプセロスをはるかにしのいで残虐無比となった」と言われる。くわしくはヘロドトス『歴史』第五巻(九二の六)参照。

2　マケドニアの王(前四一三—三九九年在位)。陰謀、暗殺など数々の悪行を重ねてマケドニアの王位を手に入れたと言われる。『ゴルギアス』470D, 471A～D, 479Aほか参照。

3　アテナイの独裁君主(前五二七—五一〇年在位)。初めは穏健な支配者であったのが、ペルシアの侵出により四囲の状況が緊迫するにつれて、彼の独裁支配は苛酷さの度を増したと言われている。なお『ヒッパルコス』229B参照。

4　バキスは前六、七世紀頃のボイオティアないしエウボイア地方にゆかりがあったと思われる予言者の名であるが、のちには神がかりになって託宣を告げる託宣師を総称する一般名詞として使われるようになった。シビュラはイオニアのエリュトライの巫女。ヘラクレイトスFr. 92(DK)、『パイドロス』244Bほかにその名が見られるが、バキスと同様、のちに神巫を総称する名となった。アンピリュトスはアッティカのアカルナニアの予言者。

ソクラテス　何ともひどい男だね、君は！　してみると、われわれの独裁君主となることをのぞみながら、君はお父さんを、独裁者を養成する誰か先生のもとへ君を遣ろうとされなかったといって、前から非難していたわけなのかね？

またあなたも、デモドコス、この子が何をのぞんでいるか前から知っていながら、また彼をそこに遣れば、彼がのぞんでいる知恵の専門家にしてやれたかもしれない所がちゃんとありながら、それでいて彼のためにそのことを渋って、そこへ彼を遣ろうとはしないで、恥ずかしいとは思いませんか？

B

デモドコス　けれどもいまや、ほら、わたしの眼の前で彼はあなたを責めたのですから、あなたとわたしは一致協力して、誰のもとに彼を遣ればよいか、また誰につけば彼は賢い独裁君主になれるか、相談しましょうか？

ソクラテス　ええ、それはもう絶対に、ソクラテス、ぜひとも相談することにしよう。このことについては慎重な相談が必要だとわたしには思えるからね。

六

ソクラテス　まあ、しばらくおいておきなさい。ね、あなた。それよりもまず彼から徹底的に聞きただしましょう。

デモドコス　それなら聞きたまえ。

ソクラテス　ではエウリピデスの応援を仰ぐことにしてはどんなものだろう、テアゲス？　エウリピデスはたしかこんなふうに言っているね——

僭主は知者たちとの交わりによって知恵あり(1)

そこでもし誰かがエウリピデスに、こうたずねるとしたら、どうだろう、――「エウリピデス、何に精通した

C 知者との交わりによって、僭主(独裁君主)は知恵がある、とあなたは言うのか?」と。たとえば仮にエウリピデスがこう言ったとする――

農夫は知者との交わりによって知恵あり

そしてわれわれが、「何に通じている知者との?」と彼にたずねるとしたら、彼はわれわれに何と答えるであろうか? むろん、農事に通じている知者との、という以外にあるまいね?

テアゲス ええ、それ以外にありません。

ソクラテス ではこういう場合はどうかね? もし彼がこう言ったのだとしたら――

料理人は知者との交わりによって知恵あり

そしてわれわれはこれに対して、「何に通じている知者とのか?」とたずねるとしたら? 彼はわれわれに何と答えるだろうか? 料理法に通じている知者との、と言うのではないかね?

テアゲス はい。

ソクラテス ではまたどうかね? もし彼が――

---

1 この詩句は『国家』VIII. 568Bでも同じくエウリピデスのものとして引用されているが、これは古注に照らして、プラトンの誤りであるとして、シュタルバウムはソポクレスの現存しない悲劇『ロクリスのアイアス』の中の文句だとしている。

相撲取りは知者との交わりによって知恵あり

D

ている知者との、と彼は答えるのではないだろうか？

と言い、これに対してわれわれが、「何に通じている知者とのか？」とたずねるとしたら？　相撲の技法に通じ

テアゲス　そうです。

ソクラテス　しかるに彼はこう言ったのだから――

僭主は知者との交わりによって知恵あり

これに対してわれわれが、「何に通じている知者のことをあなたは言っているのか、エウリピデス？」とたずね

るとしたら、彼は何と答えるだろうか？　それはどのようなものだと言うだろう？

テアゲス　私にはぜんぜんわかりません。

ソクラテス　では何ならぼくが君に言ってあげようか？

テアゲス　もしさしつかえなければ。

ソクラテス　それはまさに、アナクレオン(1)によれば、カリクリテ(2)が通暁していたと言われているところのもの

さ。それとも君はあの詩を知らないかね？

テアゲス　知っていますとも。

E

ソクラテス　するとどうだね？　君もまた何かそのような交際を、すなわちキュアネの娘、カリクリテと同じ

技能をもっていて、あの詩人によると彼女がそうだったと言われるように、「独裁支配に関すること一切をわき

まえている」者と、交際して教わることをのぞむのかね？　そしてそれは、とりも直さず、君もまたわれわれと

この国の独裁君主となるためなのかね？

テアゲス　さっきから、ソクラテス、あなたは私をあざけり、からかっていらっしゃる。

ソクラテス　どうして？　君はそれによってすべての国民を支配しうるような、そのような知恵をのぞんでいる、と言っているのではないかね？　しかるにそういうことをする場合に、君は独裁君主でなくて何であろう？

テアゲス　たしかに考えてみると、私は独裁君主になることをこいねがっているのかもしれません、できることなら万人の、それがだめならできるだけ多くの人たちの上に君臨する独裁君主に。そしてこれは思うにあなたにしたところで、また他の人々だって誰でもみな、ねがうことでしょう、――おそらくはさらに神になりたいとさえね。しかし、私がのぞんでいると言っていたのは、そのことではありませんでした。

ソクラテス　それならいったいぜんたい君がのぞんでいるのは何なのかね？　国民を支配したいと君は言っているのではないのかね？

テアゲス　でもけっして力ずくでではありませんし、また独裁君主たちのようなやり方でもありません。そうではなくて、相手の合意を得て支配することです、――この国のなかの有数の人々がそうしたようなやり方で。

1　イオニアのテオス生まれの抒情詩人（前五七〇年頃の生まれ）。後年サモス島の王ポリュクラテスに招かれ、その宮廷に長年を過ごした。恋と酒の詩が多い。なおここに言及されている「詩」については不明。

2　アウソニアの王リパロスの娘であるキュアネの娘（ソクラテスの次の言葉参照）。この母娘は政治支配の手腕にすぐれていたことで知られている（ディオドロス『歴史』第五巻（七）参照）。

ソクラテス　君の言おうとしているのはテミストクレスや、ペリクレスや、キモン[1]や、その他すべて、国家社会のこと(政治)にかけて有能であった人たちがしたような仕方で、ということかね？

テアゲス　そうなのです、ほんとうに、私の言おうとしているのはそういう人たちのことです。

七

ソクラテス　それでは、仮に、君が馬術に通暁した知者になりたいとのぞんでいるのだとしたら、どうだろうか？　誰のところに行けば、乗馬の名手になれると思うかしらん？　むろん馬術師のところだろう？

B

テアゲス　それは、誓って、そうにきまっています。

ソクラテス　するとそれはまた、その道の練達の士であって、馬を所持し、かつ自分のにせよ他人のにせよ、数多くの馬をいつも扱っている人たち、まさにそういう人たちのところへ行くわけだろうね？

テアゲス　むろんそうでしょう。

ソクラテス　では、もし君が槍投げに通暁した知者になりたいと思うのだとしたら、どうだろう？　槍投げの師匠で、槍を所持し、かつ他人のにせよ、自分のにせよ、数多くの槍をいつも扱っている人たち、そういう人たちのもとに行くことによって、君はその道の知者になれると思わないだろうか？

C

テアゲス　そう思いますとも。

ソクラテス　ではどうか言ってくれたまえ。君ののぞみは国家社会のこと(政治)にかけて知者になることであってみれば、そうした政治の専門家(政治家)、すなわち自分自身が政治に堪能であるばかりでなく、自国のほか

他国をも数多くいつも手がけていて、ギリシア諸国ともギリシア以外の国々とも交渉がある、そういう政治の専門家以外の人たちのところへ行くことによって、君はその道の知者になれると思うかね？　それとも君は、そういう人たち自身とではなく、誰かほかの人々と交際することによって、まさに彼らがそれの専門家たるゆえんのものにおける知者になりうると考えるのかね？

D

テアゲス　ソクラテス、私はあなたのお説だと言われていることがあるのです。(2) それは、いま言われたような政治家の息子たちは靴屋の息子たち以上に少しもすぐれてはいない、という説です。そして私は、私に理解できるかぎりのことから判断して、あなたのお説はきわめて正しいと思います。ですからこれら政治家たちのうちの誰かが、自分の息子を少しも裨益（ひえき）することはないのに、この私には彼の知恵を授けてくれるだろう――いやしくも彼が、誰にせよ世のほかの人を、そのようなことがらに関して何か裨益しうるとしたらですが――と、もし私が考えるとしたら、私はまったくの愚か者ということになりましょう。

八

ソクラテス　それでは、世にもすぐれた子よ、もし君がこういう立場におかれたら、君は君自身をどうしたら

1　テミストクレス（前五二八頃―四六二年頃）、ペリクレス（前四九五頃―四二九年）、キモン（前五一二頃―四四九年）はいずれもアテナイの有名な政治家。

2　すぐれた政治家は彼らのもつ知恵と徳を自分の息子たちに教えうるか、というテーマは、ソクラテスが、あるいはソクラテスを介してプラトンが、繰り返し提出し、問題としているものである。『メノン』93C sqq.、『プロタゴラス』319E sqq.、『アルキビアデス I』118C sqq. など参照。

E

よいだろうか？——つまり、もし君に息子ができて、その子がいまと同じような問題で君を困らせ、そしてすぐれた画家になりたいと主張し、父親である君を、彼のために、まさにそういうことのためにお金を使おうとしてくれないといって非難する一方、ほかならぬそういう営みの専門家である画家たちをないがしろにし、彼らから学ぼうとしないような場合には？　あるいは彼が笛吹きになりたいと欲するとして、笛吹きたちに対して同じ態度をとるとしたら？　また竪琴弾きに対しても同様だとしたら？　そういう場合に君は彼をどうしたらよいか、また彼がそれらの人たちから学ぼうとしなかったら、彼をほかのどこへ遣ったらよいか、わかるかね？

テアゲス　神かけて、ぜんぜんわかりません。

127

ソクラテス　するといま君は、お父さんに対して君自身がこれとまったく同じことをしていながら、いぶかり、君のお父さんが君をどうしたらよいか、どこへ君を遣ればよいか、途方に暮れているといって非難するのかね？げんに、われわれは、アテナイ人で国家社会のことにかけてひとかどの立派な人物のうち、だれでも君のすきなひとに——その人はただで君を弟子にしてくれるはずだが——君を師事させてあげるつもりでいるのにね。そしてそうすれば君は金銭を無駄に使わずにすむわけだし、また同時に、他の誰かにつくよりははるかに大きな称讃を大衆の間で博することになるはずだがね。

テアゲス　するとどうなのです、ソクラテス？　あなたもまた、そのひとかどの立派な人物のなかにはいるのではありませんか？　じっさい、もしあなたが私を弟子にしてやろうという気になってくださるなら、私はそれに満足し、ほかに誰も求めはしませんからね。

B

ソクラテス　というと、それはどういう意味かね、テアゲス？

九

デモドコス　ソクラテス、たしかにこの子の言うことは間違っていないよ。と同時に、このわたしをあなたは喜ばせてくれることだろうね、――もしこの子があなたにつくのを喜び、またあなたもこの子を弟子にする気になってくれるとしたら、わたしとしてはそれ以上の仕合せはあるまいと思うだろうからね。

まあそれにしても、どれほど熱烈にわたしがそれを欲しているか、口にするのも恥ずかしいくらいだ。しかし君たち両人にこのわたしからお願いする、――あなたは、この子を弟子にとる気になってもらいたい。それからお前は、ソクラテス以外の他の誰にも師事することを求めてはならぬ……。そうしてくれれば、君たちは多くの不安な気づかいから、わたしを解放してくれることになるだろうよ。げんに、たったいまも、わたしはこの子が堕落させられるかもしれないような誰か他の人に出会いはしまいかと、この子のことが心配でならないのだからね。

テアゲス　それならいまやもう、お父さん、私のことならご心配にはおよびませんよ、私を弟子にとることを受け入れてくださるように、この方を説得することがおできになりさえすれば。

デモドコス　お前の言うことはしごくもっともだ。だが、ソクラテス、これからあとわたしの話す言葉はもはやあなたに向かって言われねばなるまい。まことにわたしとしては、もしあなたがここにいるこのテアゲスを快く迎え入れてくれて、あなたに可能なかぎりの親切を彼につくしてくれるならば、わたしの一身も、わたしのものでこれ以上大事なものはありえないと思うものも、要するにあなたが要求するものは何もかも提供する、ま

あ手っとりばやく言えば、覚悟ができているのだ。

一〇

ソクラテス　デモドコス、あなたのその熱意のほどは、あながち不思議とは思いません、あなたのご子息が特にこのわたしから裨益されうると、もしもほんとうにあなたが考えておられるとしたら……。なぜといって分別ある者なら、自分の息子のために、どうすれば彼ができるだけすぐれた人間になるかということほど真剣になりうることは何もありえないということは、わたしにもわかっているからです。

けれどもあなたがどうしてそう考えられるにいたったか、つまりあなたのご子息がすぐれた市民になるということのために、このわたしがあなた自身以上に役に立つはずだとどうして考えられるようになったのか、それにまたこの子があなた自身よりもむしろわたしのほうが役に立つはずだとどうして思うようになったのか、この点になると、まったく不思議でなりません。

E

それはまず第一にあなたはわたしより年長だからです。それにあなたはすでにこれまでアテナイ人のもとにおける最高の官職にいろいろついてこられたし、またアナギュルゥス区(1)の区民からとりわけ尊敬されているばかりでなく、全市民からも他の誰にも負けないくらい尊敬を集めておられる。それに引きかえこのわたしのうちに、そのようなことの何ひとつとして、あなたがたのどちらも認めはしないでしょう。

さらにまた、もしこのテアゲスが政治家につくことを軽蔑し、若者たちを教育することができると標榜する別のある種の人たちを求めているのなら、ここにはケオスのプロディコスでも、レオンティノイのゴルギアスでも、

アクラガスのポロスでも、そのほかにも大勢います。[2] そしてこの人たちの知恵たるや、諸国におもむいて、若者たちのうちで最も生まれもよく最も裕福な者たち――彼らは市民たちのうち誰でもすきな人とただで交際することができるわけですが――そういう若者たちに、そんな連中と交際するのはやめにして自分たちに師事するようにと説得し、おまけにその報酬として莫大な額の金銭まで支払わせ、かてて加えて感謝の念までおこさせるほどのものなのです。あなたの息子さんにしても、あなた自身にしても、わたしなどよりはこういう人たちのなかから誰か選んでしかるべきだったでしょうに。B なぜならそういう祝福された、うるわしい学問はわたしはちょっとも知ってはいないのであって――知りたいものとねがってはいるのですが――、これはたしか始終言っていることですが、ただひとつほんのちっぽけな学問、すなわち恋に関するそれは別として、わたしはほとんど何も知らないと言ってよいのですから。[3] ただしわたしのわきまえているこの学問に関するかぎり、わたしは過去の人間たると、現在生きている人間たるとを問わず、その誰にも引けをとらないと自認するものです。

テアゲス　ほら、おわかりでしょう、お父さん？　ソクラテスに私といっしょに過そうとする気があるとは、

1　121D注2参照。

2　プロディコスはケオス島出身のソフィスト。ゴルギアスと同時代人。ゴルギアス(前四八〇年頃の生まれ)はシケリア(シシリー)島のレオンティノイ出身の高名なソフィストで弁論家。前四二七年外交使節としてアテナイに来訪。ポロスはシケリア島アクラガス(アグリゲントゥム)出身の弁論家。
　前二者に関して、いまこの前後で言われているのとほぼ同じようなことが『ソクラテスの弁明』19E～20Aに語られている。そのほか『メノン』70B sqq., 95B sqq., 96D、『ヒッピアス(大)』282B～D、『ゴルギアス』の随所、『国家』X. 600C～Dなど参照。

3　『饗宴』177D参照。

ぜんぜん思えないのですよ[1]——私のほうはこのひとがその気になってくださるなら、喜んでそうするつもりでいるのですけれども——、いや、彼はいまのようなことを言って、われわれをからかっているのです。というのは私は私と同年輩の者や少し年上の人たちのことをちゃんと知っていますからね、——すなわち、彼らは、このひとにつく前には何の値打ちもない人間だったのに、このひとにつきはじめたらまたたく間に、それ以前には彼らのほうが劣っていたような人たちの誰と較べても、もっとすぐれた人間であることを立証したのです。

C

ソクラテス そうすると君は、デモドコスの子よ、それがどういうことか、わかっているのかね?

テアゲス ええ、それはもうゼウスに誓って、わかっていますとも、——あなたさえその気になってくだされば、私だってあの人たちとまったく同じような人間になれるということは。

一一

ソクラテス いや、ちがうね、君、それがどういうことなのか君は気がついてはいないね。だが、ぼくが君に話してあげよう——

D

ぼくには、子供の時からはじまって、神の定めによっていつもぼくにつき従っている、何かダイモーンからの合図といったものが、あるのだよ。それはひとつの声であって、それが現われる時はいつも、ぼくが何かをしようとしていると、それをしないようにとぼくに合図をするのであって、何かをなせと勧めることはどんな場合にもないのだ[2]。また友人の誰かがぼくに助言を求めていて、この声が現われるような場合もこれと同じことで、それはさし止めるのであって、何かを行なうことを許さないのだ。

E それではこのことの証人を何人かあなたがたのためにあげるとしましょう。あのカルミデス(3)をご存知ですね、美しく成人した、グラウコンの子のことです。彼はある時たまたま、ネメア競技(4)に出場のため徒競走の練習をするつもりで、わたしに助言を求めていました。そして彼が、練習をするつもりです、と切り出すやいなや、あの声が起こりました。それでわたしは彼を思いとどまらせようとして、こう言ったのです、「君がしゃべっている間に、ダイモーンからの合図のあの声がぼくに現われたのだ。さあ、練習は止めにしたまえ」と。――「おそらくその声は」と彼は答えた、「私は優勝しないということをあなたに告げているのでしょう。でも私としては、たとえ優勝の見込みはないにしても、その期間ともかく練習にはげめば、自分のためにはなるはずです」。――

129 そう言って、練習にかかったのでした。それでその練習の結果彼の身にどういうことが起こったか、本人に聞いてみるだけのことはあります。

また何なら、ティマルコスの兄弟のクレイトマコスに、ティマルコスがいままさに死罪につこうという時に(5)

---

1 この箇所のテクスト(128B8)はベッカーに従って ἔτι を省き、τι [ἔτι] と読む。

2 『ソクラテスの弁明』31C～D参照。

3 プラトンの母方の叔父。『カルミデス』の登場人物の一人で、美貌を謳われる青年として描かれ(154A～B)、クセノポンによるとソクラテスに勧められて政界入りをすることになったと言われている(『ソクラテスの思い出』第三巻(七の一)参照)。のち、前四〇四年、ペロポネソス戦争後アテナイに樹立された、いわゆる「三〇人の独裁政府」の首領の一人となった。

4 ネメアはペロポネソス半島のアルゴスとコリントスの間の地で、ここでゼウスを祭る大祭であるネメア競技祭が二年ごとに開催された。ネメア競技祭はオリュンピア、デルポイ、イストモスの競技祭と並んで全ギリシア的規模で行なわれた四大大祭の一つ。体育競技や馬車競走、なかんずく「スタディオン」と呼ばれる徒競走の優勝が争われた。『リュシス』205Cおよびその箇所の注参照。

5 129A3は、スイエに従って τοῦ δαιμονίου を削除する。

──ティマルコスと、それから彼を亡命者としてかくまった走者のエウアトロスもですが[1]──彼に何と言ったか、たずねてみられるがよろしい。きっとクレイトマコスはあなたがたに、ティマルコスは自分にこう言ったと言うでしょうよ。

テアゲス 何と、ですか？

ソクラテス 「クレイトマコス、じっさいぼくはいままさに死におもむこうとしているが、これはソクラテスの言葉に耳をかそうとしなかったからなのだ」と彼は言ったのです。

B

ではいったいなぜティマルコスがそんなことを言ったのか？ それをわたしが話してお聞かせしましょう。ティマルコスとピレモニデスの子のピレモンが、ヘロスカマンドロスの子ニキアス殺害[2]のために、酒宴の席から立ち上った時、このたくらみを知っていたのは彼ら二人だけだったわけですが、その一方のティマルコスは立ち上ると、わたしに向かって言いました、「何をおっしゃりたいのです？ ソクラテス」、と彼は言うのでした、「あなたがたは飲んでいてください。私は出かけて行かねばならない所がありますが。でも、ひょっとしたら、しばらくして戻ってくるかもしれません」と。──するとあの声がしたので、彼に言いました、「断じて席を立ってはいけないよ。あのいつものダイモーンからの合図がぼくに現われたからだ」。──すると彼はとどまりました。そしてしばらくしてからふたたび行きかけ、わたしにこう言いました、「それでは行きます、ソクラテス」。

C

──再度あの声がしました。そこでふたたび彼を無理やり押しとどめました。三度目に、わたしに気づかれまいとして、もはやわたしにひとことも言わずに立ち上り、わたしが注意をそらせた隙をうかがって、わたしの目をのがれおおせたのです。このようにして彼は出かけて行き、またそのせいで死罪へとおもむくことになった所業

をやってのけたのでした。

まさにこういうわけで彼は彼の兄弟に、いまさっきわたしがあなたがたにお話ししたあの言葉を言ったのです——自分はいま死罪につこうとしているが、それはこのわたしの忠告に従おうとしなかったためだ、と。

さらにまた、シケリアで起きたことに関しても、わたしが遠征軍の潰滅について語ったことを、あなたがたは二人ともいろいろな人から聞かれることでしょう。たしかに過去のことは、それを知っている人たちから聞くこともできます。しかしこのダイモーンからの合図にしかるべき意味があるのかどうか、ためしてみることが現にいまできるのです。

D すなわち、美しいサニオン[4]が出征しようとする矢先、その合図がわたしに現われたわけですが、現在彼はトラシュロス[5]といっしょに、エペソスやイオニアに肉迫攻撃をかけるべく、遠征中の身です。したがってわたしにし

1 ティマルコス、クレイトマコス、エウアトロスのいずれの人物に関してもまったく不明。「亡命者をかくまった者は死罪とする」という罰則に関しては『法律』XII. 955B参照。

2 ピレモン、ニキアスについても不詳。

3 前四一五—四一三年のシケリア遠征のこと。アテナイ軍をはじめとするギリシア勢は、全軍潰滅という史上最大と言われる惨敗を喫した。トゥキュディデス『歴史』第六、七巻参照。

4 不詳。

5 アテナイの海軍指揮官。ペロポネソス戦中、前四一一年、民主派に与みしてトラシュブゥロスと共にサモス島において、貴族派の掌握した四〇〇人審議会に対して海軍を謀叛せしめ、以後ヘレスポントスやイオニアの制圧に力を尽くす。前四〇九年、コロポンの奪還には功を奏したものの、エペソスでは敗退した。さらに数年後四〇六年、アルギヌゥサイ沖海戦ののち、戦死者の死体遺棄の罪に問われて他の指揮官と共にアテナイ人の手によって処刑されるという悲劇的な末路をたどる。

(129) てみれば彼が戦死しはすまいか、あるいは少なくとも死の瀬戸際まで追いやられるのではあるまいかと思いやられ、ひいては全遠征軍のことが心配でなりません。

二

E さて以上のようなことをすっかり君に話したのは、このダイモーンの合図のこのような力は、ぼくといっしょに過す人たちとの交わりにまで全面的に作用が及ぶからだ。じっさいそれは多くの人たちに対して反対するのであって、これらの人たちにとっては、ぼくといっしょに過すことによって裨益されるということはないので、したがってぼくはこういう人たちといっしょに過すことはできないわけなのだ。しかし他方、ぼくと交わりを結ぶことをそれが妨げない者たちも、たくさんいるにはいる。とはいえその場合でも、その交わりによって彼らが裨益されるというようなことは少しもないのである。

しかし、このダイモーンの合図の力がぼくとの交わりを助けるような人たちもいるのであって、君もまた気づいている[1]ような人たちがそれだ。すなわち彼らはたちまち急速な進歩を遂げるのだ。しかもそれら進歩を遂げる 130 者たちのなかにはまた、ぼくから裨益されたところのものが確実で、かつ永続的なものであることを示す者たちも若干はいる。が、大方は、ぼくといっしょにいる間は驚くべき進歩を遂げるものの、ぼくから離れてしまうとまた元の木阿彌で、他の誰とも少しも変りばえがしなくなるのだ。

そういうふうになった者に、アリステイデスの子のリュシマコスの、そのまた息子のアリステイデス[2]がある。つまり彼は、ぼくといっしょに過すことによって、わずかな間に絶大な進歩を遂げたのだったが、その後出征し

なければならないことになり、船出して行った。ところが帰還してくると、メレシアスの息子で、同名のトゥキュディデスの孫のトゥキュディデスが、ぼくといっしょにいるところにばったり出くわしたわけだ。トゥキュディデスはというと、彼は前日、ある議論で、ぼくと口論していたのだ。そこでアリステイデスはぼくの顔を見ると、挨拶をし、二、三ほかのことを話したあとで、こう言った、

B

「ところでトゥキュディデスは、聞くところによると、ソクラテス、あなたに対してどうも少々尊大ぶって、まるで自分がひとかどの人物であるかのように腹を立てているそうですね」

「そう、それはそのとおりだね」とぼくは答えた。

「何ですって？　あなたにつく前は、どんなに情けない人間だったか、彼はわかっていないのですか？」、とアリステイデスは言った。

「まったくのところ、どうもそうらしい」とぼくは答えた。

C

「しかし、かくいう私自身も」と彼は言った、「じっさい滑稽な有様ではありますがね、ソクラテス」

「いったい、どうして？」と、ぼくはたずねた。

1　128C参照。

2　アリステイデスは、前五世紀初頭、ペルシア戦争当時に活躍したアテナイの有名な民主派の政治家で将軍であったアリステイデス（『メノン』94A、『ゴルギアス』526Bで言及されている）の孫。またトゥキュディデスは、ペリクレスの政敵である貴族派のトゥキュディデス（『メノン』94C～Dに現われる）の孫。この両人と、それぞれの父親であるリュシマコスおよびメレシアスは、すべて『ラケス』に登場する人物である（179A参照）。
なおいまのこの箇所の記述に関しては、『テアイテトス』151A参照。

「それはこういうわけなのです」と彼は答えた、「航海に出る前は、どんな人とでも私は議論を戦わすことができましたし、また議論において自分が何びとにも引けをとらないことを示すこともできました。それで最も学識のすぐれた人々との交わりを積極的に求めさえしました。ところがいまでは逆に、相手が教育のある人だと感づくともう、これを避ける始末。それほどまでに私は自分の卑小さを恥ずかしく思っているからです」

「しかしその力は突然、君から失われたのかね、それとも徐々にかね？」とぼくは聞いた。

「徐々にです」と彼は答えた。

D

「ではその力が君にそなわった時には、何かをぼくから学ぶという仕方でそなわったのかね、それとも何かそれとは異なった仕方でかね？」とぼくはたずねた。

「それをお話ししましょう」と彼は言った、「ソクラテス、それはまことに信じがたいことですが、しかしほんとうのことです。じっさい私は、あなた自身もご承知のとおり、ついぞこれまでに何ひとつとしてあなたから教えていただいたということはありませんでした。(1)にもかかわらずあなたといっしょにいるといつも、私は進歩を遂げたのです、――同じ部屋でなくても、ただ同じ屋根の下にいるというだけでです。もっとも同じ部屋にいれば、なおのことでしたが。しかも同じ部屋にいて、あなたをじっと見つめてお話しをうかがっている時のほうが、よそ見をしながらそうしている場合よりもいっそう進歩したように思いました。しかし何といっても私の進

E

歩が最大かつ最もいちじるしかったのは、あなたのおそばに坐り、あなたの体をつかまえ、あなたにじかに触っていた時のことでした。ところがいまでは」と彼は言ったのだ、「ああいう状態は跡形もなく消え失せてしまいました」とね。

一三

だから、ねえ、テアゲス、君がぼくと結ぼうとしている交わりとは、このようなものなのだよ。それがもし神のみこころにかなうものなら、君はいちじるしく、そしてすみやかな進歩を遂げるであろうし、さにあらずんば、そういうことはあるまい。だから、世の人々に与える利益をみずから意のままにしうる、かの人たちのうちの誰かから教育を受けるほうが、ぼくのもとでじっとなりゆきにまかせているよりは、君にとってずっと無難ではあるまいか、考えてみたまえ。

131

テアゲス　それなら、ソクラテス、われわれはこうするのがよいというのが私の意見です。つまり、われわれはお互いにいっしょになってみて、そのダイモーンの合図をためしてみるのです。そしてもしそれがわれわれにそれを許しておくならば、それに越したことはありません。しかしもし許さないなら、その時にはもはやただちにわれわれのなすべきことを相談することにしましょう、――あなた以外の他の誰かにつくべきか、あるいはあなたに現われるその神からの知らせそのものを、祈禱なり、供犠なり、そのほか予言者の指示するどんな手段でも用いて、なだめるようにつとめるべきかどうかを。

デモドコス　そのことならもはや、ソクラテス、この若者に反対してはならないよ。テアゲスの言っていることは適切なことだからね。

1　『テアイテトス』150D参照。

(131)

ソクラテス ええ、われわれはそうすべきだとお考えになるのでしたら、そうするとしましょう。

カルミデス

――克己節制（思慮の健全さ）について――

山野耕治訳

登場人物

ソクラテス
カイレポン
クリティアス
カルミデス

一

153 前の日の夕方、ぼくたちはポテイダイアの陣地(1)をはなれて帰ってきたばかりだった。ひさしぶりに帰還したものだから、ぼくはいそいそといくつかのいつもの場所にでかけて行った。もちろん、だから、バシレの神殿(2)の正面にあるタウレアス(3)の相撲場（すもうば）にもはいりこんだ。そしてそこで非常にたくさんの人びとに出会った。ぼくの知らない人びともいるにはいたが、大半は知りあいだった。

B ぼくがだしぬけにはいって来たのを見ると、たちまちかれらはめいめいあちこちから、歓迎のあいさつを送ってよこした。ところが、カイレポン(4)は、これがまた熱狂するたちなものだから、その仲間うちから飛びだして来て、ぼくのところにかけよりざま、この手をつかんで、

「ソクラテス、どのようにしてあの戦争から無事に帰還なさったのですか」

とたずねた。じつのところ、ぼくたちがポテイダイアを立つすこし前に、そこでは一戦あったわけだが、この場の人びとはやっといま、その報せ（しら）を聞いたばかりだったのだ。

そこで、ぼくはかれに答えて言った。「うん、ごらんのとおりにしてだよ」

C 「しかも、ここにもたらされた報せによると」とかれは言った。「たいへんな激戦で、われわれの知りあいも大勢それで戦死したそうですが」

「そういう報せだったら、かなりの程度までそのとおりだよ」とぼくは言った。

「あなたは居合わせていたのでしょうね、その戦闘の場に？」とかれはたずねた。
「居合わせていたとも」
「では、ここへすわって、われわれに一部始終を話してくださいよ。全容はまだはっきりとは聞いていないのですから」
そう言うがはやいか、かれはぼくを導いて、カライスクロスの子のクリティアス[5]のそばにすわらせた。
そこで、ぼくはそこに腰をおろして、クリティアスやほかの連中にあいさつしてから、どんな質問にでも応じ
D て、戦況をつぶさに話して聞かせた。なにしろ、寄ってたかって、ぼくを質問攻めにしたものだから。

二

そして、それらの話が一段落すると、こんどはぼくが、当地のようす、つまり、知恵の探究の近況と青年たち

---

1 ポテイダイアは、北部バルカンのマケドニアに近いカルキディケの要塞港。もともとコリントスの植民都市だが、他方ではデロス同盟に加わって、アテナイにも進貢していた。アテナイとコリントスの対立が激化し、アテナイが貢税を増やしたので、前四三二年、アテナイにそむいた。ためにアテナイ遠征軍は前四三二—四二九年までこの都市を包囲攻撃した。カリアス指揮のアテナイ軍は高価な勝利を得、カリアスは戦死した。ソクラテスがこの遠征軍に加わったのは前四三三—四三二年。出征中のソクラテスの逸話については、『饗宴』(219E～221C)参照。

2 バシレ(「女王」の意)の神殿はアクロポリスの南にあった。

3 職業的なトレーナー。

4 解説の「登場人物」の説明(二四〇ページ)参照。

5 解説の「登場人物」の説明(二四〇ページ)参照。

の消息について、かれらに質問することになった。青年たちについては、知恵か美しさにおいて、あるいはその両方を兼備しているということで、だれか傑出したものがあらわれているかどうかを、たずねたわけだ。

154

すると、クリティアスが入口のほうに眼をやって、数人の若者がののしりあいながら入って来、さらにそのあとからまた他のグループが、がやがや言いながらついて来るのを見やりながら言った。

「美しい人のことなら、ソクラテス、今すぐにおわかりになると思いますが。ほら、あそこに入って来た面々は、今のところこよなく美しいという評判の少年の先ぶれ役で、その求愛者たちなのですからね。で、当のご本人も、もうすぐ近くまで来ているようです」

「しかし誰かね、それは」とぼくはたずねた。「そして誰の息子かね？」

「あなたなら、きっとごぞんじでしょう」とかれは答えた。「もっとも、出征なさった当時はまだ年ごろになっ

B

ていませんでしたが。カルミデス(1)ですよ。わたしどもの叔父グラウコンの息子で、わたしのいとこにあたります」

「うん、その児なら、ゼウスの神かけて、知っているとも」とぼくは言った。「実際、まだほんの子供だったころでさえ、ただものではなかったからな。しかし、今ではもう、ちゃんとした青年になっていることだろうね」

「すぐにおわかりになれますよ。その成長ぶりも、どんな人間になったかということも」

こうかれが話しているところへ、当のカルミデスが入ってきた。

三

ところで、このぼくは、きみ(2)、ものの判断がまるっきりできないのだよ。だって、美少年にはからっきし弱く

て、なんのことはない、いわば白い墨糸(3)みたいなものでね。——ぼくには、年ごろの青年はほとんどすべて美しく見えるのだから。

C 実際、そのときもやはり、あの児の身のたけといい、美しさといい、ぼくは目をみはるばかりだった。ほかの連中はどうかといえば、ひとりのこらずみな、あの児に恋しているように思われた。あの児が入ってきたときの、かれらのうろたえぶり、ざわめきようといったらなかった。それにまだあの児の後からも、求愛者たちがぞろぞろついて来るのだ。ぼくたちのような一人前の成人(おとな)がそんなに興奮するのは、まあさほど驚くにあたらないかもしれない。しかしぼくは子供たちにも注意をむけてみたのだが、いとけない子までがひとりのこらず、わき目もふらずにあの児をじっと見つめているさまは、まるで聖像を観(み)ているようだった。

D するとカイレポンがぼくに話しかけて、

「この若者をどう思いますか、ソクラテス。いい顔だちをしているでしょう?」と言った。

「並はずれているね」とぼくは答えた。

「しかしこの児が」とかれは言った。「その気になって着物をぬげば、あなたにはもう顔だちなど問題ではな

---

1 解説の「登場人物」の説明(二四一ページ)参照。

2 ソクラテスからこの対話のありさまを説明してもらっているこの人が、だれだったかは不明。事情は『国家』篇のばあいなどと同じことである。

3 「白い石材に白い墨糸」という諺をちぢめたもの。古注によると、墨糸の墨はふつうは紅土の朱墨がつかわれていた。白い石材を白い墨糸で測っても、識別できないという意味。墨糸ではなく、下げ振り、錘線だと解する説もあるが、意味には変りはなかろう。

(154)

くなるはずです。まあそれほどに、非のうちどころのない美しい姿かたちをしていますよ」

じつのところ、ほかの連中も異口同音にカイレポンの意見に賛成した。そこでぼくは「おやおや！　これは驚いた」と言った。「きみたちの言うとおりだと、なんとこのひとは無敵ではないか！　ただし、一つだけ、ほんのちょっとしたことがこのひとにつけ加わっていさえすれば、だが」

「何が、です？」とクリティアスがたずねた。

E

「それは、たましい（精神）について」とぼくは答えた。「もともと生まれつき素質が善い者であれば、ということだ。ところで、どうやら、クリティアス、かれはそういう人間であることがふさわしいはずだね。いやしくも、きみたち一門に属しているからには」

「ええ、ええ、それはもうその点からみても、しごく美しく資質のすぐれた人物（善美の人）です」とかれは言った。

「ではどうして、われわれは」とぼくは言った。「まさしくその点でかれをはだかにして、この目で見ないのだ？　姿かたちのほうはあとにまわして。もうこのくらいの年ごろだったら、どんなことがあっても、対話に応じてくれるはずだからね」

「ええ、そうですとも」とクリティアスは答えた。「ちょうどまた、かれは哲学的な知能もあるし、それに、

155

自他ともに許すたいへんな詩人でもあるのですから(1)」

「うん、それこそは」とぼくは言った。「愛するクリティアスよ、遠くソロンの血統につながるきみたち一門にそなわった美才だよ。それはそうと、どうしてあの若者をここへ呼んで、ぼくに拝見させてくれないのだ？

実際、いまよりもっと年のいかない児だったにしても、後見人であるばかりかいとこでもあるきみの目もあることだし、その前でわれわれと対話しても、別にみっともないことにはならないはずだがな」

「いや、もっともなお言葉。では、かれを呼びましょう」

そう言って、かれは従者にむかい、こう命じた。

B

「おい、カルミデスを呼んできなさい。ついさきごろのあれの話だと、かげんが悪いそうだが、そのことで紹介してやりたい医者がおいでだと言ってな」

それから、クリティアスはぼくのほうをむいて、こうつけ加えた。

「じつはさきほども、朝起きがけから頭が重いと、あれが言っていましてね。ところで、どうです、あなたはあれに対して、頭痛薬のことで知っているふりをなさっても、別にさしつかえないでしょう？」

「ちっともかまわないよ」とぼくは答えた。「ただ来てくれさえすれば」

「いや、ただいま参ります」とかれは言った。

四

C

事実そのとおりのことになって、かれがやって来て、大笑いがもちあがった。なにしろ、ぼくたち同席のもの

---

1 おそらく、クリティアスは自分のことをこう言いたいのだろう。なお、愛知（哲学）と詩的才能の一致が、ソロンについて言われたことは有名。

はだれもがみな、かれを自分のそばにすわらせたい一念で、夢中になって隣のものを押しのけて、席をあけようとしたものでね。あげくは、そのはずみで両端の席のものは、一人は立たされるし、もう一人は横にころげ落ちる始末だ。で、やって来た当人は、ぼくとクリティアスの間にすわった。さて、とたんに、きみ、ぼくはもうどきどきするばかりで、それまでは気楽にかれと対話できるつもりだったのに、その自信がすっかり打ちくだかれてしまった。

D　ところで、クリティアスが薬に関する知識をもったひとだと言って、ぼくを紹介してくれると、あの児はもの問いたげに、えもいえぬまなざしでぼくを見つめた。おりから、相撲場にいた連中は全員どっと押しよせてきて、ぼくたちをぐるりととりまいた。ああ、まさにそのときだよ、けだかい人よ、上衣(うわぎ)の奥に秘められたその肌をかいま見ただけで、ぼくはかっとなって、もう我を忘れてしまった。とっさに思ったね、こと恋にかけては、あのキュディアス(1)がいちばん知恵があると。あのひとの詩に、美少年のことである他人(ひと)に忠告して、

獅子のみ前にまかり出た子鹿さながらに、おのが身のひとかけなりと奪われめさるな

E　と歌っているくだりがあるが、実際、ほかならぬこのぼくが、そのような猛獣にとっつかまってしまったような気がしたね。

しかしそれでも、頭痛にきく薬を知っているかとかれにたずねられたときには、知っているとだけは、やっとのことでなんとか答えられた。

「では、それは何ですか」とかれはたずねた。

それに答えて、ぼくはこう言った。それ自体は植物の一種だが、しかしこれにはある唱(とな)えごとが組み合わせに

156

なっていて、それを唱えながらこれを用いれば、この薬は効果てきめんだが、その唱えごとぬきだと、この植物にはなんのききめもない、と。

するとかれは「では、あなたの口述されるままに、その唱えごとを書きとることにします」と言った。

「どっちなのだ？」とぼくはたずねた。「ぼくの承諾を得てかね、それとも承諾なしにでもかね？」

すると、かれはにっこりして「もちろん、あなたのご承諾を得てです、ソクラテス」と答えた。

「まあいい、それはそれとして」とぼくは言った。「きみはぼくがどういう名前か、たしかめてあるのだろうね？」

「たしかめてないとしたら、不埒な話でしょう」とかれは答えた。「なにしろ、わたしと同じ年ごろのものたちは寄るとさわると、あなたのうわさでもちきりですし、それに、よく覚えています、まだ子供でしたが、あなたがこのクリティアスといっしょにおられるところを、お見かけしたことがありますから」

B

「ありがとう、それはよかった」とぼくは言った。「それなら、その唱えごとがどういうものかということの説明も、もっと腹蔵なくきみにしてやれるというものだ。ところがさっきは、その効能をどのようなしかたできみに示してやったものかと、思い迷っていたのだ。じつは、カルミデス、それは頭を健康にする薬としての効能しかないようなものではないのでね。いや、おそらくきみもこれまでに、すぐれた医者たちから聞いたことがある

1　この詩人についてはくわしいことは不明だが、たぶん、プルタルコス（『倫理論集』*De facie in orbe lunae*, 931E）が前七世紀のアルキロコスやミムネルモスたちの名とならべて言及している詩人のことであろう。もちろん、獅子はカルミデス、子鹿はソクラテスを意味している。

C

だろうが、いい医者なら、眼病を診てもらいにやってきた患者には、たぶんこう説明してやるはずだ。独立に眼だけの治療を試みるわけにはいかないので、もし眼のぐあいもよくなりたければ、とうぜん頭のほうもふくめて手当しなくてはならない、とね。さらにまた、頭のほうにしても、からだ全体ときりはなして、ただ頭だけ別個に手当できると思うのは、愚の骨頂だよ、と。かくて、こういう理論にもとづいて、いい医者たちは養生法というものをきめて、からだ全体に注意をむけ、全身もふくめて患部の手当、治療にかかるわけだ。——それとも、きみは気づいていないかね？　そういうことをかれらが言い、また現に行なわれているということに」

「いや、気づいていますとも」とかれは答えた。

「すると、きみは、かれらの言葉はもっともだと思い、その理論に賛成するのだね？」

「むろんです、なににもまして」とかれは答えた。

五

D

ぼくは、かれのその同意の言葉を聞いて、やっと勇気をとりもどした。また、さきの自信もすこしずつよみがえりはじめ、生きかえったように元気になった。そこでぼくは、こう言った。

「されば、カルミデス、その唱えごとなるものも、まったく同じような性質のものなのだ。ぼくがそれを学んだのは、あそこに従軍中のことで、ひとりのトラキア人からだった。かれはザルモクシス(1)の流れをくむ医術師なのだが、ひとのうわさでは、この派の医術師はひとを不死にするすべまでも心得ているそうだ。さて、このトラキア人の意見によると、さっきぼくののべていたようなギリシア人たちの主張は、それなりに結構だそうだ。

E 『しかし』とかれはつけ加えた。『われわれの神なる王ザルモクシスさまは、頭のことを考えずに眼の治療にあたったり、からだのことを考えずに頭の治療にあたるべきではないのと同様に、からだのほうもたましいをぬきにして治療を試みるべきではない、と仰せだ』。むしろ、これこそが、たいていの病気がギリシアの医者に見おとされている原因なのだそうだ。つまり、全体のぐあいがよくなければ、部分の調子がいいはずはないわけで、全体というものに気をつかわねばならないのに、それをかえりみなかったことが、その原因なのだ。というのも、かれの説明では、からだや一個の人間全体の善悪はすべて、たましいに始まり、そこから流れ出してくるのだ。157 ちょうど、頭から眼に流れこむようにね。したがって、頭にしても、からだのほかの部分にしても、うまく働かしたければ、まずなんといっても、とりわけ、そのたましいの世話をしなければいけないそうだ。ところで、かれの話によると、たましいの世話というものは、めぐまれた人よ、ある唱えごとを用いてなされるのだ。(2) その唱えごととは、美しい言論にほかならない。そして、そういう言論から、たましいのうちに克己節制(思慮の健全さ)が生まれてくるわけだし、それがそこに生まれ、具わってしまえば、あとはもう楽々と、頭ばかりか、から B だのほかの部分まで、健康にしてやれるとのことだ。

---

1 ザルモクシスはトラキアの神で、トラキアの伝説上の立法者。ヘロドトス(『歴史』第四巻(九四—九六))が、黒海沿岸在住のギリシア人から聞いた話として伝えているところによると、ザルモクシスはもとは人間で、ピュタゴラスがサモスに滞在していたころは、そこでピュタゴラスに奴隷として仕えた弟子だったため、のち自由の身になって帰国してからは、トラキア人たちのためにピュタゴラスばりの永生の教えをとき、それをみずから証したという。

2 『パイドン』77E sqq., 114D 参照。

さて、この薬と唱えごとをぼくに教えながら、かれはこう言った。『この薬で頭の手当をしてくれとだれに頼まれても、まずきみの唱えごとと治療にたましいをゆだねないような人間の頼みには、耳をかすな。というのも、当今は』とかれは言いたした。『こういう誤りが人びとのあいだに見られるからだ。つまり、克己節制（思慮の健全さ）と健康を別々にきりはなして、どちらか一方だけの専門医であろうとする医者がいるのだから』。そしてかC れはぼくにきびしく申しつけた。治療を頼んでくる相手がいかに金持であれ、貴い素性（すじょう）のものであれ、美しいひとであれ、その頼みに動かされてこの治療方式をたがえるな、と。それゆえ、ぼくはかれに誓ったし、誓いは守らねばならないから、とにかく、かれの言うことをきくつもりだ。そこで、きみにしても、その外国人のさしずどおりに、まずきみのたましいをゆだねて、トラキア人の唱えごとをしてほしいのなら、ぼくはこの薬をきみの頭に用いもしようが、それがいやなら、きみのわずらいだって、どのように扱ったものか、ぼくにはわからないのだ、愛するカルミデスよ」

六

さて、ぼくのその言葉を聞いて、クリティアスが口をはさんだ。

「もっけの幸いということになりますね、ソクラテス。この若者にとって、頭が痛いということは。そんな頭D のおかげで、知能のはたらきまでが善くならざるを得ないとすれば。ところで、じつを言えば、カルミデスが同じ年ごろのものより傑出しているのは、姿かたちにおいてだけではありません。お説では唱えごとがかかわっているとされていた、その当のものにおいても傑出していると思われているのです。で、それは克己節制（思慮の

健全さ)ということでしたが、そうですね?」

「うん、そうだとも」とぼくは答えた。

「それでは、いいですか」とかれは言葉をつづけた。「これは衆目の見るところですが、かれは今どきの青年のうちでは、ずばぬけた克己節制(健全な思慮)のもちぬしですし、その他どんなことにかけても、この年ごろの青年としてはだれにもひけはとりませんよ」

E 「そうだろうとも」とぼくは言った。「とうぜんのことだよ、カルミデス、きみがそれらすべての点において他にまさっているというのも。なぜなら、このアテナイのどんな家柄にしても、その二つの家系が縁組を結んだばあい、きみが生まれてきた家門以外に、もっと美しく資質のすぐれた人(善美の人)を生み出しそうなどのような家系がほかにあるのか、この国のひとならだれもかんたんに挙げることはできまいからね。なにしろ、きみたちの父方たるや、ドロピデスの子クリティアスを先祖にもち、その立派さと優れていることにおいて、また、そ

158 の他の家門の幸福と言われるものにおいて、いかにまさっているかということが、アナクレオンやソロンによって[1]、あるいは他の多くの詩人たちによって賞めたたえられ、いまに伝えられている家柄なのだし、母方にしても、

1 これらの詩人にほめたたえられているクリティアスとは、家系図(「解説」二四一ページ参照)のクリティアスIIIのことで、つまり、当対話篇のクリティアスIVの祖父にあたる人のことであろう。このクリティアスIIIは、『ティマイオス』や『クリティアス』の主要人物となっている。

クリティアスに捧げられたアナクレオンの詩については、Fr. 57 (Bergk) =Fr. 55 (Diehl) =Fr. 44 (Page) 参照。ソロンの詩については、Fr. 22–30 (Bergk) 参照。ただし、これらの詩をFr. 6, 12–14, 18–21, 27 (Diehl) は、クリティアスに捧げられたものではないとする。

これまた名家だしね。だって、きみの叔父さんのピュリランペスにしても[1]、使節としてペルシア大王ならびにアジア各地の他の首脳のもとへ行く機会のあるたびごとに評判になったそうだが、この大陸のどこをさがしても、美丈夫ぶりといい、身のたけといい、かれの右に出ると思われるものはいなかったということだね。要するに、この母方のほうも、さきの父方にすこしもひけをとらない家柄なのだ。

さて、そのような両家の人びとの血筋をひいているのだから、とうぜんきみは何事に関しても第一人者たるべきはずだ。うん、なるほど、目に見える姿かたちにかけては、親愛なるグラウコンの子よ、きみはご先祖のかたがたにいささかもおくれはとるまいと思うよ。そこで、克己節制(思慮の健全さ)とかその他の点においても、このクリティアスの言うように、きみが申しぶんのない天禀にめぐまれたものだということになると、汝が母上はめぐまれし子を[2]」とぼくは言った。「愛するカルミデスよ、生みなすったわけだ。

B さて、ところで、問題はこうなのだ。もしこのクリティアスの請けあっているように、きみにはすでに克己節制(思慮の健全さ)が現に具わっており、十分に克己節制(健全な思慮)の人だということになると、もはやきみには、ザルモクシスのさきの唱えごとも、極北人アバリスの呪文も[3]、まるっきり必要ではないわけで、それどころか、即刻あの頭痛薬をきみに与えるべきだろうね。これに反して、その点でまだまだ欠けるところがあるように見えるなら、投薬に先だってまず、唱えごとをしなければならないことになる。さあ、だから、自分で答えてくれたまえ。はたしてきみは、このクリティアスの言うことを認めて、すでにもう十分に克己節制(思慮の健全さ)を分けもっていると主張するかね、それとも、まだ欠けるところがあると言うのかね?」

C それを聞いてカルミデスは、さっと顔を赧らめ、それがまた、いやが上にも美しさをひきたたせた。というの

も、その羞(は)じらいようが、かれの年ごろにしごく似つかわしいものだったから。ややあって、けなげにも、こう答えた。

「ご質問になったことを承認するにしても、否認するにしても、今すぐこの場でというわけには、かんたんにはまいりません」と言い、「そのわけは」とかれはつづけた。「わたしが克己節制(健全な思慮)を失っているなどと答えれば、自分自身について自分の口からそんなことを言うのも変なことになりますし、それにまた、このクリティアスばかりか、他にも、クリティアスの話によれば、わたしを克己節制(健全な思慮)のもちぬしだと思っていてくださる方々がたくさんおられるそうですが、その方々までも、公然と嘘つきにしてしまうことにもなるからです。かといって逆にまた、克己節制(思慮の健全さ)をわがものにしていると答えて、自画自賛するようなことになれば、鼻持ちならぬ態度に出ていると思われることでしょうしねえ。ですから、いったい、あなたにどうお答えしてよいのやら、わからないでいるのです」

D

そこでぼくは言ってやった。「ぼくの見たところ、きみがそう答えるのも、もっとものようだ、カルミデス。

1 プルタルコス『英雄伝』の「ペリクレス」(一三)によると、ペリクレスの友人。カルミデスの母方の叔父。カルミデスの姉妹で、プラトンの母であるペリクティオネは、夫アリストンの死後、このピュリランペスと再婚したから、プラトンの義理の父ということになる。『パルメニデス』126B参照。

2 ホメロスふうのきまり文句。

3 アバリスは、伝説によると、アポロンの司祭で、アポロンからさずかった黄金の矢をたずさえ、神託をさずけながら世界をまわったという。一説では、この矢に乗って自由に空中を飛んだともいわれる。極北人(ヒュペルボレイオイ)は、ギリシア人にとっては、スキュティアの北の、かしこくて幸福な人種だった。ヘロドトス『歴史』第四巻(三六)参照。

E

で、どうやら」とぼくはつけ加えた。「ぼくのたずねているもの〔克己節制〕を、きみがもっているかいないか、それをわれわれはいっしょに力をあわせて、調べてみなければならないようだ。それはひとつには、きみが言いたくもないことをしかたなしに言わされてしまったりすることのないように、それにまた、ぼくのほうでも無分別に治療へと乗りだしたりしないためにもね。そこで、もしきみにその気があるのなら、ぼくはよろこんできみと力をあわせて調べてみるよ。しかしいやなら、やめにしたい」

「とんでもない！　願ったりかなったりですよ」とかれは答えた。「ですから、そのためになら、あなたご自身が調べるのによりよいとお考えのとおりのやり方で調べてください」

七

「それなら、こうするのが」とぼくは言った。「最善の方法だと思うよ、その問題を調べてみるには。つまり、もしも克己節制（思慮の健全さ）がきみに具わっていれば、むろんのこと、きみにはそれ〔克己節制〕についてなにか思わくがあるはずだ。だって、それがきみのうちに内在しているとして、いやしくも内在する以上は、とうぜんそれはなんらかの感覚をきみに与えるにちがいないし、さらに、その感覚からして、克己節制（思慮の健全さ）とは何であるか、どんな性質のものか、というようなことについて、なんらかの思わくがきみに生まれてくるはずだからね。それとも、きみはそうは思わないかね？」

「いや、そう思いますとも」とかれは答えた。

「では」とぼくはつづけた。「その思っていることがらを、きみはどういうものだと見ているのか、その説明

も、むろん、できるのだろうねえ？　ギリシア語を知っているからには」

「たぶん、できますでしょう」とかれは言った。

「それなら、それがきみのうちに内在しているのかいないのか、その見当(けんとう)をつけるために、説明してくれたまえ」とぼくは言った。「きみの思わくでは、克己節制(思慮の健全さ)とは何であると主張するのか、を」

B　はじめのうち、かれはためらって、答えを出ししぶっていた。しかしやがて、自分の考えでは、克己節制(思慮の健全さ)とは、なにをするにも、秩序を守りかつもの静かに行なうことである。つまり、街路を歩いたり、対話したりするときもそうだし、その他どんなばあいにも、同じようにふるまうことであると答え、「思いますに」とかれは言った。「一言にしていえば、一種のもの静かさです、おたずねのものは」

「はたして」とぼくは言った。「それでいいのかな、きみの説で？　うん、とにかく、カルミデス、世間では、もの静かなひとは克己節制(健全な思慮)の人だと言われているからね。それなら、さあ、世間の言っていることに一理あるかどうか、見てみようよ。C　では、ぼくに言ってくれたまえ。どうだね、むろん、克己節制(思慮の健全さ)は、美事(みごと)なことがらのうちに数えられるだろう？」

「ええ、それはもちろん」とかれは言った。

「ところで、どちらが美事なのだろう、読み書きの先生のところでは？　同じ字句を速く書くほうかね、ゆっくり静かに書くほうかね？」

「速く書くほうです」

「で、読みあげることはどうだろう？　速くのほうかね、のろのろのほうかね？」

「速くのほうです」

「さらにまた、キタラを弾くのも速いほうが、相撲の取り口も鋭いほうが、静かなのろのろしたほうよりも、ずっと美事だろう?」

「ええ」

「さらに、拳闘やパンクラティオン(1)はどうだろう? やはり同様ではないか」

「そうですとも」

D

「また、競走や跳躍、その他、体操競技のどれにしたところで、鋭く速い動きのほうは美事だが、動きがもたもたして静かなほうはみっともないだろう?」

「ええ、明らかにそのようです」

「それなら、われわれの見たところ、明らかに」とぼくは言った。「身体については、もの静かさではなくて、いちばん速くて鋭いのが、いちばん美事なのだ。そうだね?」

「ええ、そうですとも」

「しかるに、克己節制(思慮の健全さ)とは、美事なことがらの一つである、ということだったね?」

「ええ、そうでした」

「したがって、とにかく身体に関するかぎりは、もの静かさではなくて、速さのほうが節制(健全な思慮)をもっているということになるだろうね。なにしろ、克己節制(思慮の健全さ)は美事なものなのだから」

「どうやら、そういうことになるのかもしれませんね」とかれは言った。

E

「では、どうだろう？」とぼくは言った。「ものわかりのよさと、わるさとでは、どちらが美事だね？」

「ものわかりのよいほうです」

「うん、ところが」とぼくはつづけた。「ものわかりのよさとは、わかりの速いことだし、ものわかりのわるさとは、わかりが静かでおそいことだろう？」

「ええ」

「また、他人に教えるばあいも、ぐずぐず静かにやるよりは、むしろ速くて、力強いほうが美事ではないかね？」

「ええ」

「さらに、どうだろう？　想起や記憶のばあいも、美事なのは、静かでゆっくりしたほうだろうか、速くて、力強いほうだろうか」

「速くて、力強いほうです」とかれは答えた。

「また、気転（きてん）がきくというのは、精神の鋭さのようなものであって、もの静かさなどではないだろう？」

「そのとおりです」

「ではつぎに、読み書きやキタラの先生のところ、その他、どんなところにおいても、言われたことの意味を理解するばあい、なるべくゆっくり静かにというほうではなくて、できるだけ速いほうが、やはりいちばん美事

1　拳闘とレスリングを兼ねた力技。

なのではないだろうか」

B 「ええ、そうです」

「のみならず、さらに、精神の行ないうろいろな探究や、審議のばあいも、思うに、きわめてもの静かで、審議や解決にもたついているひとは、とうてい賞賛に値する人物とはみなされないわけで、そうみなされるのは、きわめて迅速に楽々とそういったことをやりこなすひとのほうだよ」

「ええ、そうですね」とかれは言った。

「してみると、カルミデス」とぼくはつづけた。「精神、身体いずれの活動にせよ、どんなばあいにも、速くて鋭いもののほうが、おそくて静かなのよりも、美事であるということがわれわれに明らかになったのではなかろうか」

「どうも、そういうことになるようです」とかれは言った。

「したがって、克己節制(思慮の健全さ)は、一種のもの静かさではありえないし、また克己節制(思慮の健全さ)を保った生活は、もの静かなものではありえないことにもなるよ。すくなくとも、今のわれわれの議論によればだ。克己節制(思慮の健全さ)を保ったものであるからには、その生活は美事なものでなければならないからね。

C なぜなら、二つに一つなのだよ。生活においてもの静かな行為のほうが、速くて活発な行為よりも美事だというばあいは、ぜんぜんないか、でなければ、あるにしても、まあ、きわめてまれにしかないか。このどちらかだということがわれわれに明らかになったわけだ。

しかし、もしひょっとして、愛する友よ、もの静かな行為だって、力強く速い行為におとらず美事だというばあいがあるとしてみたところで、かりにそうだとしても、もの静かな行為のほうが、力強く速いのより以上に、いくらかでも、克己節制(思慮の健全さ)であるということにはならないはずだよ、歩きかた、話しかた、その他、なにをとってもD。また、もの静かな生活のほうが、もの静かでないのよりは、克己節制(思慮の健全さ)を保ったものだということにもならないはずだ。なぜって、われわれのさきの議論では、克己節制(思慮の健全さ)は美事な事柄の一つであるということが出発点として定められていたのに、他方では、速い行為も、もの静かな行為におとらず、美事なものだと明らかになったのだからね」

「たしかに、ソクラテス、おっしゃるとおりだと思います」とかれは言った。

八

「では、もう一度」とぼくはつづけた。「カルミデス、もっと注意を深め、そしてきみ自身を見つめ、こういう点を念頭において答えてくれたまえ、つまり、克己節制(思慮の健全さ)が具わっていると、それはきみをどんな性質の人間にしてくれるのか、また、きみをそんな性質の人間につくりあげるには、それはどういうものであるべきかE。そういう点をすっかり勘考してみた上で、りっぱに男らしく言ってくれたまえ、それ〔克己節制〕がきみにはどのようなものとして現われるのか、を」

かれはそのまましばらく、とても男らしい態度で自分を相手にじっと考えこんでいたが、やがてつぎのように切りだした。「では言いますが、わたしの考えでは、克己節制(思慮の健全さ)とは、人間に恥を知らしめ、羞ずか

(160)

しがらせるものです。要するに、克己節制（思慮の健全さ）とはまさしく恥を知る心のことです」

「よろしい」とぼくは言った。「今さっき、きみは克己節制（思慮の健全さ）は美事なものだということを認めなかったかね？」

「いや、認めましたとも」とかれは答えた。

「ところで、克己節制（思慮の健全さ）をもった人は、またすぐれた善い人でもあるのではないだろうか」

「ええ、そうです」

「さて、われわれをすぐれた善い人にしてくれないようなしろものが、そもそも善いものであるはずがあるだろうか」

「むろん、ないにきまっています」

「それなら、美事なものであるばかりか、善いものでもあるということになるね、それ〔克己節制〕は」

161

「はい、わたしには、そう思われます」

「では、どうだろう？」とぼくは言った。「ホメロスのつぎの言葉(1)がすばらしいものだという確信は、きみにはないかね？　こういう言葉だが。――恥を知る心も、困窮者には、善からぬ友」

「はい、その確信なら、わたしにもあります」とかれは言った。

「だとすると、どうも、恥を知る心というものは、善かったり、善くなかったりするものらしいね」

「ええ、そういうことでしょうね」

「うん、しかるに、克己節制（思慮の健全さ）は善いものだ。いやしくも、それを具えたひとを誰でもすぐれた

善い人にし、悪い人にしないものであれば、だよ」

「ええ、たしかにおっしゃるとおりだと思います」

「すると結局、克己節制(思慮の健全さ)は、恥を知る心ではないということになるはずだ。かりにも、克己節制はまさしく善いものであるのに、恥を知る心のほうは、かならずしも、善いとも悪いともいえないようなものならば」

九

「たしかに」とかれは言った。「ソクラテス、その点については、まったくおっしゃるとおりだと思います。けれど、克己節制(思慮の健全さ)に関するつぎのような点については、どうお考えになるのでしょうか、調べていただきたいのです。というのは、たったいま思い出したのですよ。前にだれかの口から聞いたことなのですがね、つまり、克己節制(思慮の健全さ)とは、自分のことだけをすることである、というのです。[2] それで、この定義のぬしの言いぶんが正しいとお考えになるのかどうか、調べていただきたいのです」

そこでぼくは「いまいましいやつだな、きみは」と言った。「このクリティアスあたりか、でなければ、だれかほかの知恵者から、それを聞いたな」

1 ホメロス『オデュッセイア』第一七巻三四七行参照。なお、ヘシオドス『仕事と日々』三一七—三一九行も参照。

2 『ティマイオス』72A 参照。

「きっと、ほかの人からでしょう」とクリティアスが口をはさんだ。「とにかく、わたしではありませんもの」

「でも、どうしてそんなに問題なのですかね？」とカルミデスが言った。「ソクラテス、だれから聞いたかということが」

「いや、べつに」とぼくは答えた。「だって、なにがなんでも考察せねばならないのは、だれがそういう説をのべたかではなくて、のべられているところが真実であるかないか、ということなのだから」(1)

「ただいまのお言葉で申し分ありません」とかれは言った。

「ゼウスに誓って、むろん、そうだとも」とぼくは言った。「しかしながら、その説がどのような意味をもつものなのか、それがわれわれに見破れるようなことにでもなれば、ぼくは驚くだろうな。それはなにか謎のようなものらしいからね」

「それはいったい、なぜですか、どうしてですか」とかれはたずねた。

D

「それはね」とぼくは答えた。「克己節制(思慮の健全さ)とは自分のことだけをすることだといったご当人の考えていることは、自分が実際に口にしたことばで言われていることとは、一致していなかったはずだからだよ。いや、きみは、読み書きの先生が書いたり読んだりしているとき、なにもやっていないと思うかね？」

「いや、それはむろん、なにかをやっていると思います」とかれは答えた。

「すると、きみの考えでは、その先生は自分の名前だけを書いたり読んだりしているし、きみたち生徒にもそういうことだけしか教えてくれないのかね？ それとも、きみたちは、自分の名前や友だちの名前におとらず、敵の名前も書いたことがあるかね？」

「ええ、おとらず書きましたとも」

E 「すると、どうだね、そんなことをすることで、きみたちは出しゃばって余計なことをしていたわけで、克己節制(思慮の健全さ)を失っていたことになるのだろうか」

「断じてそんなことにはなりません」

「それにどうだろう！　きみたちは自分のことだけをしていたわけではないのだよ。いやしくも、読み書きがなにかをすることだとすればね」

「むろん、なにかをすることです」

「うん、医療だってそうだし、きみ、それに建築や機織(はたおり)、その他一般に何らかの技術により何らかの技術的な仕事をなしとげることは、やはりたしかに、なにかをすることであるはずだからね」

「たしかに」

162 「それならしかし、どうだろう？」とぼくは言った。「きみの考えでは、こういう法律のもとでは、国はよく治まることになるだろうか。その法律の命じるところによると、各人は自分の上衣は織ったり洗ったりせねばならず、はきものも手づくり、そのほか、油瓶や浴用あかすり等々の日用品にいたるまで、万事このりくつで、他(ひ)人(と)のことなどかまわずに、めいめい自分のことだけをなし行なわねばならないのだがね[2]」

---

1 『パイドン』91C、『国家』X. 595C など参照。

2 『ヒッピアス(小)』368B～C、『国家』II. 369B sqq.、『アルキビアデス I』127B sqq. 参照。

「いいえ、よく治まるとは、わたしは思いません」とかれは言った。

「しかるに」とぼくは言った。「国というものは、すくなくとも克己節制(思慮の健全さ)をもって治められているかぎり、よく治まるはずだ」

「むろん、それにちがいありません」とかれは言った。

「それなら」とぼくは言った。「以上にのべたような仕事ややりかたに関するかぎり、自分のことだけをすることが克己節制(思慮の健全さ)であるということにはならないはずだ」

「ええ、そういうことになるようです」

「したがって、やはり謎をかけていたことになるようだね、さっきもぼくが言っていたことだが、克己節制(思慮の健全さ)とは自分のことだけをすることだという説を出した人は。だって、その人はそんなにお人好しではないだろうからな。いやそれとも、きみはだれか精神薄弱者からその説を聞いたのかい、カルミデス?」

B

「いいえ、とんでもない」とかれは答えた。「それも、とても頭がいいという感じの人でしたから」

「うん、それなら、なおのこと絶対にそうだと思うよ、その人は謎としてそれを提出したわけだ。自分のことだけをするとはそもそも何であるのか、それを知るのは難しいということを考慮に入れてね」

「おそらく、そうでしょう」とかれは言った。

「では、この、自分のことだけをするとは、いったい、何なのだろう? きみは言えるかね?」

「いいえ、ゼウスに誓って、わたしにはわかりません」とかれは答えた。「いや、もしかしたら、その説をのべたご当人にしても、自分が何を意味しているのか、まるでわかっていないのかもしれません」

そう言いながら、カルミデスは微笑をうかべて、クリティアスのほうに眼を向けた。

一〇

C ところで、クリティアスは、だいぶん前から、ありありと焦燥の色をうかべていた。カルミデスはじめその場につらなる面々に対する負けん気から、ひとついいところを見せねばというわけで。しかしそれまでは、どうにか自分のきもちをおさえていた。ところがもう、そのときはしんぼうしきれなくなった。つまり、どうやら、ぼくのにらんでいたとおり、カルミデスが克己節制(思慮の健全さ)についてのその答えを聞いたのは、やはりたしかにクリティアスからだったのだ。だから、カルミデスはその答えの説明役を自分でひきうけるよりは、クリテ D ィアスにおしつけたほうがよいと考えて、ご本尊(ほんぞん)をそそのかし、自分はもう完全にやりこめられてしまったというふりをしてみせたのだ。しかし、クリティアスにしてみれば、それががまんできず、カルミデスに腹を立てているという印象をぼくはうけた。それは、まるで詩人が自分の作品を公演でとちった俳優に対してとる態度とかわりはなかった。そこで、かれはカルミデスの顔をのぞきこんで、こう言った。

「きみはほんとうにそう考えているのかい、カルミデス。克己節制(思慮の健全さ)とは自分のことだけをすることだという説を出した人が、何を言おうと考えているのか、きみにわからないからといって、その当人までも、まるっきりわかっていないないだなんて!」

E 「いや、しかし、世にもすぐれた友クリティアスよ」とぼくが口をはさんだ。「この児(こ)がわからないのも、驚くにはあたらないよ、年がわかいもの。しかし、きみならとうぜんわかっているはずだ。もうその年だし、ふだ

んから、それに心を打ちこんでいることでもあるし。だから、もしきみが、克己節制（思慮の健全さ）とは問題の人物ののべているとおりのことだということを承認し、その説を受けいれてくれるのなら、ぼくとしては、その言うところが真実であるかないかを、きみといっしょに調べられることになるわけで、むろん、そのほうがうれしさもひとしおなのだがね」

「いや、もちろん、全面的に承認しますし、その説も受けいれます」とかれは答えた。

「よろしい、それなら結構」とぼくはつづけた。「では、ぼくに言ってくれたまえ。きみはさらにもう一つ、さっき[1]ぼくのたずねていたことも、承認してくれるかね？　すべて専門家というものは、なにかを作るということだったが」

「ええ」

「ところで、きみの考えでは、どうだね、かれらは自分自身のものだけを作るのだろうか、それとも、他人のものも？」

「他人のものも作ります」

「すると、自分自身のものだけを作るのではないのに、かれらは克己節制（思慮の健全さ）をもっていることになるのかね？」

「別にさしつかえないでしょう？」とかれは言った。

「うん、ぼくとしては、ちっともさしつかえないのだがね」とぼくは答えた。「しかし、まあ、よく考えてみてくれたまえ。克己節制（思慮の健全さ）とは自分のことだけをすることだということを出発点として定めた上で、

つぎには、他人のことをする人もまた、克己節制(思慮の健全さ)をもっていても、ちっともさしつかえないと主張するような人間のばあいは、どうだね、そんな人間にはさしつかえがあるのではないだろうか」

「話がちがいますよ」とかれは答えた。「そうでしょう、だって、わたしは、他人のものを作る人が克己節制(思慮の健全さ)をもっているというほうは同意しましたが、だからといって、ただちにそれで、他人のことをする人が克己節制(思慮の健全さ)をもっているということを同意したことになるものでしょうかね！」

B

「ぼくに言いたまえ」とぼくは言った。「『作る』と『する』を、きみは同じことだとは言わないのかね？」

「ええ、言いませんとも」とかれは答えた。「それにまた、『はたらく』と『作る』も、区別してつかいます。[2] ぼくがそれを学んだのは、ヘシオドスからなのですが、かれの詩句に

いかなるはたらきも不名誉ではない[3]

というくだりがありますね。ところで、お考えをうかがいたいのですが、あなたはさっき、いろいろなものをあげておられましたが、かりに、ヘシオドスがそれらのものに『はたらき』とか『はたらく』とか『する』という語を用いていたとすると、靴つくりや干物(ひもの)売り、さらには売春業者にいたるまで、いかなる職業の人にも不名誉なことはないなどと、その詩人は主張したことになるのでしょうか。いや、そんなふうにお考えになってはいけ

1　161D～162A.

2　「する」と「作る」の区別については、アリストテレス『ニコマコス倫理学』第六巻(1140a1 sqq.)。「作る」と「はたらく」の区別については、『ヒッピアス(小)』373D sqq. 参照。

3　ヘシオドス『仕事と日々』三〇九行以下。原意は、怠惰こそ不名誉であって、職業に貴賤なしということだが、クリティアスは牽強付会(けんきょうふかい)しているわけ。

ませんよ！　ソクラテス。むしろ、わたしに言わせれば、その詩人もまた、『作ること』は、『すること』や『はたらくこと』とはちがうと考えていたようです。そして、『作られたもの（作品）』のほうは、時として美しさがともなわずに、不名誉になるばあいもあるが、しかし『はたらき』のほうは、けっして不名誉になることはないと考えていたのです。つまり、かれは美しくて利益になるように作られたものを『はたらき』とよび、そのようなものを作ることを『はたらくこと』とか『すること』とよんだわけです。

C　さて、さらにかれの考えでは、それらの美しくて利益になることだけが『自分自身のこと』、利益にならぬ有害なことはすべて『よそごと』であると主張しなければならないのです。したがって、ヘシオドスにしろ、だれかほかの思慮ある人にしろ、自分のことだけをする者を克己節制（健全な思慮）の人とよんでいるのだと、こうわれわれは考えるべきでしょうね」

二

D　「おお、クリティアス」とぼくは言った。「きみが口をひらいたとたんに、もうだいたい、きみの言いたいことがわかったよ。つまり、きみは自分自身の事柄を『善いもの』とよび、善いものを作ることを『すること』とよぶということが。だって、ぼくはプロディコスが(1)名辞について数えきれぬほどたくさん区別しているのをこの耳で聞いてもいるしね。しかし、とにかく、きみがそれぞれの名辞を好きなような意味にとって使うことには、ぼくは反対しないが、ただし、きみが自分の使う名辞をそれぞれ何に差し向けているのか、それだけは明らかにしてもらいたい。

E

では、ここでもう一度ふり出しにもどって、きみの言いたいことをもっと明確にさせたまえ。そもそも、善いことを『すること』とか『作ること』——そんな名辞はなんなりとお好きなように——いずれにしても、それをきみは克己節制(思慮の健全さ)だと言うのかね?[2]」

「ええ、わたしとしては」とかれは答えた。

「それでは、克己節制(思慮の健全さ)をもっているのは、悪いことをする人ではなくて、善いことをする人のほうなのだね?」

164

「おや! いったいあなたは」とかれは言った。「世にもすぐれたかたよ、そうはお考えにならないのですか」

「ぼくのことは案じるな」とぼくは言った。「だって、当分はまだ、ぼくの考えではなくて、きみが今言っていることを調べてみようじゃないか」

「いや、それで結構です」とかれは言った。「わたしの主張はこうですよ。善いものではなく悪いものを作る人間は、克己節制(思慮の健全さ)をもたない。しかし、悪いものではなく善いものを作る人間のほうは、克己節制(思慮の健全さ)をもっている、というのですよ。つまり、善いことをすることが克己節制(思慮の健全さ)である、とこう明確に規定してあげます」

「うん、しかも、きみの言っていることは、おそらくまちがってはいないだろう。それで、別にさしつかえは

1 ケオス島出身の有名なソフィストで、ソクラテスと同時代の人。類似語を極端にまで厳密に区別した例は、『プロタゴラス』337A〜C, 340E sqq., 358D〜E、『メノン』75E、『エウテュデモス』277E、『ラケス』197Dや、アリストテレス『トピカ』第二巻(112^b22)などからも知られる。

2 174B〜C参照。

ないわけだ。もっとも、ぼくがおかしいと思っている点があるのだがね」とぼくは言った。「つまり、こういうことだ。克己節制(健全な思慮)の人でありながら、自分が克己節制(思慮の健全さ)をもった身であることがわかっていない人がいると、きみが考えているかどうか、という点だがね」

「いいえ、そういう考えには立っていません」とかれは言った。

「ついさっき[1]」とぼくはつづけた。「きみは言わなかったかね？　専門家というものは、他人(ひと)のものを作っても、やはり克己節制(思慮の健全さ)をもっていることには、別にさしつかえない、と」

「いや、たしかに言いましたが」とかれは答えた。「しかし、それがどうしたというのですか」

「どうもしないよ。さあさあ、ぼくに言ってくれたまえ。きみの考えでは、医者がほかのだれかを健康にして

B　やるばあい、自分自身のためにも、その患者のためにも、利益になる事柄を作ることになるのかどうか？」

「ええ、わたしの考えでは、そうなります」

「ところで、そういうことをする医者はだ、するべきことをしているのではないか」

「そうです」

「するべきことをしている者は、克己節制(思慮の健全さ)をもってはいないかね？」

「いや、たしかに、克己節制(思慮の健全さ)をもっていますとも」

「さて、どうだね、その医者は、自分の治療がどんな時に利益になり、どんな時にはならないか、それを知らねばならないということも必然だろうか？　また、それぞれの専門家にしても、自分のした仕事の結果が、どんな時に利益になり、どんな時にはならないか、それを知らねばならないことも？」

「いや、おそらく、そこまで知らねばならないことはないでしょう」

「すると、時によっては」とぼくは言った。「医者というものは、自分のしたことが利益になるにしろ、害になるにしろ、自分のしたことの成果を自分では知らないばあいもあることになる。しかも、きみの説によると、[2] 利益になるようなことをした以上、その人は克己節制(思慮の健全さ)をもってしたことになるのだったね。それとも、そういうことではなかったのか、きみの説は」

C

「いや、そうでした」

「してみると、どうやら、時によっては、利益になるようなことをした以上、その人の行為も人がらも、克己節制(思慮の健全さ)を保っているわけなのに、自分が克己節制(健全な思慮)の人だということが、自分ではわからないということばあいもあり得るのではなかろうか」

一二

「いいえ、そんなことは」とかれは言った。「ソクラテス、けっしてあり得ないはずです。しかしながら、かりに、わたしのさきほどのいくつかの同意事項からして、そのような結論がどのみち必然的に出てくるとでもお考えになっているのでしたら、わたしとしては、いっそのこと、同意した事柄のうちのいずれかをとりけしたい気持ですし、前言のまちがいをみずから公言することも、いっこうに恥ずかしいとは思わないでしょう。自分で

D

1　162E sqq.　　2　163C.

自分を知らない人間が克己節制（健全な思慮）の人である、などということを認めるくらいなら！

なぜなら、わたしの主張は、克己節制（思慮の健全さ）とは、まさしく自己自身を知ることにほかならない[1]、といったところですし、そのような意味の銘文をデルポイの神殿に奉納した人にわたしは組するからです[2]。というのも、わたしの考えでは、この銘文は、じつは参詣者に対するそこの祭神アポロンの挨拶であって、いわば『御機嫌よう』という言葉にかわるものとして掲げられているのです。つまり、この『御機嫌よう』というのは挨拶としてはまちがっているわけで、われわれはそんな言葉ではなくて、『思慮が健全であれ』と言って、たがいに勧告しあわねばならないからなのです。そういうわけで、アポロンは参詣者に対して、世間一般とはちがった挨拶をしてくださっている。と、こう考えて、その奉納者は銘文を掲げたものと思われます。すなわち、アポロンはいつだれが参詣に来ても、じつは『思慮が健全であれ』と呼びかけているのです。

ところが、アポロンは予言をつかさどる神ですので、かなり謎めかして呼びかけています。つまり、『なんじみずからを知れ』と『思慮が健全であれ』とは、同じ意味の言葉なのです。原語の文字どおりの意味がそれを証言していますし[3]、わたしもそう主張するのですが。

しかし、おそらく、別の意味だと解釈する人もいるでしょうね。それより後の時代の銘文、『度をすごすなかれ』や『抵当の近くに身の破滅』の奉納者たちにしても、意味がちがうという印象をもっていたように思います。というのも、この人たちは『なんじみずからを知れ』を訓戒だと見て、参詣者に対するアポロンの挨拶だとは見なかったからです。だから、かれらは自分たちもそれにおとらぬ有用な訓戒を掲げたいなどと高望みして、それらの銘文を刻んで奉納したのです。

B さて、何のために、ソクラテス、わたしがこれだけのことをお話したか、そのわけはこうなのです。とりあえず、さっきあなたに対して主張したことは、すっかり放棄することにします。だって、ああいう問題については、たぶん、あなたのほうが正論だったかもわかりませんし、ことによったら、わたしのほうが正しかったのかもしれませんが、いずれにしても、われわれののべたことには、なにひとつ明確なところはなかったからです。だが、さあ、こんどは、克己節制(思慮の健全さ)とは自己自身を知ることなりとする説に、あなたが同意してくださらないようでしたら、あなたにその説明をしてあげたいと思います」

一三

「とんでもない!」とぼくは言った。「クリティアス、ぼくのたずねていることがらを、まるでぼくが知っていると自分で主張しているみたいだね、ぼくに向かってくるきみのその態度をみていると。だから、ぼくさえその気になればだ、かんたんにきみの言うことに同意してやれるとでも、きみが考えているみたいにとれるよ。しかし、事実はさにあらずで、それどころか、問題が提出されるたびにいつも、きみの協力を得て探求しているわ

C けだ。ぼく自身は知らないのだからね。だから、まず調べてみた上でないと、同意するかしないかは言いたくな

1 『アルキビアデスI』130E sqq., 133C、『ティマイオス』72A 参照。
2 『プロタゴラス』343B 参照。
3 克己節制(思慮の健全さ)の原語「ソープロネイン」の文字どおりの意味は、「健全なる(ソー)思慮(プロネイン)」ということである。クリティアスはその「思慮(プロネイン)」を、「なんじみずからを知れ(グノーティ サウトン)」の「知れ(グノーティ)」と同一視しようとするわけである。

いのだ。まあ、待ってくれよ、ぼくの調べがすむまでは」
「では、お調べを」とかれは言った。
「よしきた、調べてみよう」とぼくは言った。「こうなのだ。つまり、もし克己節制(思慮の健全さ)というものがなにかを知ることだとすれば、あきらかにそれはひとつの知だし、なにか(について)の知だということになるだろう。そうではないか」
「そうです。自己自身についてのです」とかれは答えた。
「すると、医術というものも」とぼくはつづけた。「健康についての知ではないのか」
「ええ、そうですとも」
「ではつぎに」とぼくは言った。「きみがぼくにむかって『医術とは健康についての知であるとして、どんな点でわれわれにとって有用なのか？　また、どんな有用なものをつくりあげるのか？』とたずねるとする。するとぼくは、すくなからぬ利益を、と答えるだろうね。だって、それは健康という美しい仕事をわれわれのために

D

しあげてくれるのだから。ただし、美しい仕事だということをきみが認めてくれなければ、話は別だが」
「認めますよ」
「またそれから、『建築術とは建築することについての知であるとして、どんな仕事をしあげると主張するのか？』ときみにたずねられたら、ぼくは家だと答えるだろう。ほかのいろいろな技術にしても、事情は同様だろうね。したがって、克己節制(思慮の健全さ)についても、きみはそれが自己自身についての知だと主張していることだし、きみなら答えられるはずだ。つぎのような質問をうけても。『クリティアスよ、克己節制(思慮の健全

E さ)とは、自己自身についての知であるとして、その名に恥じぬどんな美しい仕事をわれわれのためにしあげてくれるのか?』と。——さあ、答えてくれたまえ」

「いやですね、ソクラテス」とかれは言った。「あなたの探究のしかたはまちがっていますよ。なにしろ、この克己節制(思慮の健全さ)という知は、もともと、ほかのいろいろな知とは似ていないものなのですよ。いや、ほかの知にしても、たがいに似てはいません。だのに、あなたはそれらが似たものだときめてかかって探究なさっている。だって、言ってみてくださいよ」とかれは言葉をついだ。「計算とか幾何の技術のばあいを考えてみますと、建築術の家、機織(はたおり)術の着物というぐあいに、ほかの多くの技術にはそれなりにはっきり指し示すことのできる仕事がたくさんありますが、計算とか幾何の技術には、それらに類似した仕事として何がありますか。さあ、あなたとしては、問題の計算や幾何の技術のばあいに、それらに類似したひとつの仕事を指し示すことがおできになりますか。いや、けっしておできにならないでしょう!」

166

そこで、ぼくは答えた。「ほんとうに、きみの言うとおりだ。しかし、まあ、つぎのことはきみに指し示すことができる。つまり、それらの知がそれぞれ何についての知なのかということはね。しかも、この何〔それぞれの知の対象〕は、その当の知そのものとはまさしくちがうものなのだよ。たとえば、計算の技術は、たぶん、偶数と奇数についての知であり、偶数どうし、奇数どうし、また偶数と奇数どうしの間で、どのような数量的関係をもつかということの知なのだ。そうだね?」

「ええ、そうですとも」とかれは言った。

「で、しかも、その偶数と奇数は、その当の計算の技術そのものとはちがったものではないのか」

「むろん、そうです」

B 「さらにまた、秤量の技術にしても、より重い、より軽いについての重量をはかる技術なのだが、その重い、軽いは当の秤量の技術そのものとはちがうものだ。それは認めてくれるね？」

「ええ、認めます」

「それなら、さあ、言ってくれたまえ。克己節制（思慮の健全さ）も、その当の克己節制（思慮の健全さ）そのものとはまさしくちがうところの何についての知なのか、を」

一四

「それごらん、これだから！　ソクラテス」とかれは言った。「結局、あなたは、克己節制（思慮の健全さ）という知がほかのすべての知とどんな点で異なるのか、という問題を探究するようなはめになりましたね。もっとも、あなたはそれとほかの知との類似点をさがしておいでですが。しかし、事実、そんな類似点はないのです。

C ほかの知はどれも、それ自身とはちがったものについての知で、それ自身についての知ではありませんが、この克己節制（思慮の健全さ）だけは、ほかのいろいろな知についての知であるばかりか、それみずからについての知〔知の知〕でもあるのです。(1)また、そのことにあなたが気づいておられないはずはありません。だって、そうでしょうが！　あなたがさっき(2)絶対にしないとおっしゃったことを、やっておられるような気がしますもの。というのも、あなたはわたしをやっつけてやろうとしておられますよ、かんじんの問題はほったらかしにして」

「なんという考えかたをするのだ」とぼくはやり返した。「よしんば、きみをやっつけることになっても、そ

D れには他意はないわけで、ひとえに自分が何を言おうとしているのかを吟味するためなのだ。つまり、ぼくは、知らないのに何か知っているように思っていながら、それに気づかないことがありはしないかと恐れるのでね。[3] じつを言えば、いまもぼくはそれをやっているわけで、この議論を検討するのもとりわけぼく自身のためなのだ。とはいえ、まあ、ぼくと親しいほかの人たちのためにもなるだろうがね。

いや、きみは、あるもの(実在)がそれぞれどのようなありようをもつものなのか、それが明らかになるということは、いわばすべての人間にとって共通の善いことであるとは思わないかね？」

「いいえ、それはもう大いにそう思いますとも、ソクラテス」とかれは言った。

「それなら、自信を出して」とぼくはつづけた。「めぐまれた人よ、きみに思われるとおりに、ぼくの質問に答 E えてもらいたい。やっつけられるのがクリティアスだろうと、ソクラテスだろうと、そんなことは気にしないで。むしろ、ひたすら議論そのものに注意をはらいつつ、その議論がどうすれば難関をきりぬけられるかを検討してくれたまえ」

「ええ」とかれは言った。「そうすることにします。おっしゃることは当をえているように思われますから」

「それなら、言ってもらいたい」とぼくは言った。「克己節制(思慮の健全さ)について、きみにはどういう言

---

1 165Cの「自己自身についての知(自知)」(ἐπιστήμη ἑαυτοῦ)が、ここや168A, 169A～Bでは「知の知」(ἐπιστήμη ἑαυτῆς)にかわっていることに注目せねばならない。これが詭弁や不注意によるのでないことは169Eなどからも明らかである。つまり「知の知」は「自知」にほかならないという主張がうかがわれるのである。

2 165B～C.

3 主として、『ソクラテスの弁明』20C sqq. 参照。

いぶんがあるのか」

一五

「では、言いますが」とかれは言った。「ほかの知とちがって、それだけがそれ自身についての知であり、また、ほかのいろいろな知についての知でもあります」

「すると」とぼくは言った。「無知(無知識)についての知でもあるということになるのではないか。いやしくも、知についての知であるならば」

「ええ、そうですとも」とかれは言った。

「それなら、克己節制(健全な思慮)の人だけが自己自身を知っていることになり、自分はまさしく何を知り何を知らないかをしらべあげることができることにもなる。さらに、かれだけが、ほかの人びとについても同じようにして考察できることになるわけで、相手の他人(ひと)が何を知り、知っている以上は何を知っていると思っているのか、また反対に、相手の他人が、ほんとうは知らないのに、何を知っているように思っているのかも、考察できるということになるだろう。この克己節制(健全な思慮)の人以外にはだれも、そういうまねはできないだろうね。そしてまた、まさしくこれこそが、克己節制(思慮の健全さ)をもつこと、克己節制(思慮の健全さ)、自己自身を知ることにほかならないのだ。つまり、何を知り何を知らないかを知ることこそが。これらの点がきみの言いぶんかね?」

「ええ、そのとおりです」とかれは答えた。

B 「では、ここでもう一度」とぼくは言った。「三度目[1]は定(じょう)の目で、おさめのさかずきを救い主ゼウスにささげつつ[2]、いわばふり出しにもどって、あらためてわれわれの考察をやってみよう。第一の問題は、知っていることがらについては、知っていると知ること、知らないことがらについては、知らないと知ること、こういったことが可能であるかないか？　という点だ。第二の問題は、かりにそれが可能だとしても、われわれがそういったことを知って、どんな利益があるのだろうか？　という点である」

「よろしい。考察しなければなりませんね」とかれは言った。

「それなら、さあ」とぼくは言った。「クリティアス、考えてみてくれたまえ。いまの問題が当面している行き詰まりをなんとかして切りぬけるのに、きみのほうがぼくより巧者ぶりを発揮できるようなら。なにしろ、このぼくは行き詰まっているのでね。で、どんな点でぼくが行き詰まっているのか、きみに教えてあげようか」

「ええ、ええ、ぜひとも、それは」とかれは言った。

C 「いずれにしても」とぼくは言った。「そういったことはすべて、もしきみが今しがた言っていた[3]とおりであるならば、ある一つの知に帰着するのではないだろうか。その知はまさしくその知自身と、ほかのいろいろな知

1 一度目は161B～164C、二度目は164Cからこれまで。

2 『国家』IX. 583B、『ピレボス』66Dなどにも、こういう表現がみられる。饗宴での献酒は、第一にオリュンポスのゼウスおよびオリュンポスの神々に、第二に半神たちに、第三に救い主ゼウスにという順に捧げられるしきたりになっていた。したがって、この「三度目のおさめのさかずきは救い主ゼウスに」という言葉を、プラトンは議論が三番目のもっとも重要な段階にさしかかったときにいつも使っているわけである。

3 166E.

とについての知であるのみならず、その同じ知が、無知(無知識)についての知でもあるのだが」

「ええ、そのとおりですとも」

「それなら、さあ、見てごらん。友よ、なんという奇妙なことをわれわれは言おうとしていることだろう！だって、同じことをいろいろとほかのばあいについて考えてみれば、きっときみは、そんなことは不可能だということがわかるはずだよ、ぼくの考えでは」

「それはいったい、どうしてです？　どういうばあいに？」

「こういうばあいさ。なにかつぎにのべるような視覚があると考えられるかね、ひとつ、思いうかべてみてほしい。その視覚たるや、ほかのいろいろな視覚の対象になるものについての視覚ではなく、それ自身やほかのいろいろな視覚についての視覚であり、それと同様にまた、さまざまの無視覚についての視覚でもあるのだが。つ

D

まり、視覚であるくせに、色彩(いろ)はなにひとつ見ず、それ自身やほかのいろいろな視覚を見るわけだ。きみはそんな視覚があると思うかね？」

「いいえ、ゼウスに誓って、そんなものがあるとは思いません」

「では、聴覚はどうだ？　それは、音声などはおよそ聞かず、それ自身やほかのいろいろな聴覚を聞き、さらにはさまざまな無聴覚をも聞く聴覚なのだが」

「いや、それも考えられません」

「それなら、すべての感覚を一まとめにして検討してみたまえ。諸感覚やそれ自身についての感覚ではあるが、ほかの感覚の対象になるようなものはなにひとつ感覚しないような感覚がなにかあると、きみに思われるかどう

か」
「いや、あるとは思いません」
E
「しかし、なにかつぎのような欲望なら、あると考えられるかね？　それは、快楽などとは無関係で、それ自身やほかのさまざまな欲望についての欲望なのだが」
「けっして、そうは考えませんよ」
「むろんまた、ぼくの考えでは、意志にしても、善いことはいささかも志さず、それ自身やほかのいろいろな意志を志すような意志があるはずはない」
「ええ、たしかに」
「また、きみは、なにかこういう恋愛があると主張できるかね？　それは、まさしく美しいものを愛する恋愛ではなく、それ自身やほかのさまざまな恋愛を愛する恋愛なのだが」
「いいえ、けっして」とかれは言った。
「しかし、これまでにきみは、なにかこんな恐怖に気づいたことがあるかね？　それは、それ自身やほかのも
168
ろもろの恐怖をおそれるが、おそろしいものは、なにひとつだっておそれないという恐怖だが」
「いいえ、気づいたことはありません」とかれは答えた。
「さらに、思わくにしても、さまざまな思わくやそれ自身を思わくするが、ほかのいろいろな思わくの対象になるようなものは、およそ思わくしないような思わくには？」
「いや、けっして気づいたことはありません」

「それだのに、知のばあいなら、どうやら、われわれの主張によると、なにかこのような知があるらしいね？　それは、およそ学の対象とされるものについての知ではなく、それ自身やほかのいろいろな知についての知らしいが」

「ええ、たしかにわれわれはそう主張していますよ」

「しかし、変じゃないかね？　もし万が一にも、そんな知があるようなことになれば。というのは、われわれとしては、それがないという意見はまだまだ強いて主張するべきではないわけで、あるかどうかの検討をやはりつづけてみようではないか」

B　「たしかに、おっしゃるとおりです」

一六

「さあ、つづけよう。その知は、何か（について）の知であり、何か（について）の知であるような一種の機能をもっている。そうだね？」

「ええ、そうですとも」

「事実、より大きいものも、何かより大きくあるような一種の機能をもっていると、われわれは主張するかね？」

「ええ、もっていますね」

「また、それは、いやしくもより大きいものであれば、より小さい何かより、ではないのかね？」

「ええ、必然にそうなります」

C 「ところで、かりにわれわれが、つぎにのべるような、より大きいなにかを見つけるとする。つまり、それは、ほかのいろいろなより大きいものや、それ自身よりは大きいものだ。しかしながら、ほかのいろいろなより大きいもののばあいには、何かよりも大きいわけだが、そんな何かにあたるものには、今のそれはぜんぜん関係がない、とする。かりにそうだとすると、もしほんとうに自分がそれ自身よりも大きいものである以上は、また、自分よりは小さいものでもあるという性質が、いずれにしてもきっと、それに具わることになるはずだ。それとも、そうならないかね？」

「いや絶対に、そうならざるを得ません、ソクラテス」とかれは答えた。

「さらにまた、かりにもし、ある二倍のものがあって、それはほかのさまざまな二倍のものやそれ自身の二倍だとする。そのばあいには、むろん、それ自身やほかのさまざまな二倍のものは半分であることになり、そういった半分であるところの自己自身や他のものの二倍ということになるはずだ。というのは、たしかに、二倍のものとは、ほかでもない、まさしく半分のものの二倍なのだから」

「ほんとうに、そのとおりです」

D 「また、それ自身より多ければ、またより少ないとか、より重ければ、より軽いとか、より年をとっていれば、より若いとかいうことになるのではないだろうか。さらに、そのほかどんなものでもそれと同じことで、つまり、自分の機能を自己自身に対して関係してもつものは、どんなものでも、それの機能が関係するところのかのものをも、かててくわえて、もっていることにはならないかね？　ぼくの言っているのは、こういう意味なのだ。た

とえば、聴覚を例にとると、もともとそれは、ほかでもない、まさしく音声の聴覚であると、われわれは主張する。そうだね？」

「そうです」

「ところで、もしほんとうに聴覚が自分でそれ自身を聞くであろうものなら、聞かれる聴覚それ自身は音声をもっているということになるだろう。だって、ほかに聞かれようがないだろうから」

「まったく、そうならざるを得ません」

「さらに、視覚についても、とにかく、すぐれた友よ、いやしくも自分でそれ自身を見るであろうものなら、見られる視覚それ自身が、必然的になにか色彩（いろ）をもつものでなければならない。なぜなら、およそ色彩なきものは、おそらく、視覚に見られるはずがないだろうから」

E

「ええ、たしかに、そんなはずはありません」

「それなら、わかるかね？　クリティアス。以上われわれが論じきたったかぎりのすべての実例では、それ自身に関係のある独自の機能をもつことができるかという点になると、われわれの見るところ、あるばあいにはまったく不可能だし、またあるばあいにはひどく疑わしいということが。つまり、一方、大きさ、多さ、等々のばあいには、まったく不可能である。そうではないか」

「ええ、そうですとも」

「他方、聴覚とか視覚、さらには、自分で自分を動かす動きとか、自分で自分を燃やす熱さとか、その他すべてそれに類したもののほうになると、こんどは、不信をいだく人がいるはずだよ。もっとも、そうでない人もい

169

るにはいるだろうが。そこで、だれか大人物が、愛する友よ、必要だね、すべてにゆきとどいたしかたで、われわれの得心（とくしん）のいくように、つぎのような区別のできる人物が。つまり、それ自身に関係のある独自の機能をもともと自分でもっているものはひとつも存在せず、その機能はもっぱら自分以外のものに関係するだけなのか、それとも、それ自身に関係させるものが存在するばあいもあり、存在しないばあいもあるのか？　またもし、今かりに、どういうものであれ、自分が自分に対してそういう関係をもつものがいろいろ存在するとすれば、われわれがまさしく克己節制(思慮の健全さ)だと主張する知は、はたして、そのなかに数えられるのかどうか？――こういった区別だがね。このぼくには、そういう区別を十分にやってのけるだけの自信はないよ。したがって、 B これ、つまり、知(について)の知というものの存在が可能になるかどうかについては、確信ある主張はできないし、また、かりに存在するとしても、その知の知が克己節制(思慮の健全さ)なのだということを承認することもしないよ――それが、なにかそういう知の知であれば、われわれの利益（ため）になるのかどうかの検査をぼくがすますまではね。というのも、じつは、克己節制(思慮の健全さ)とは、なにか有益で善いものだという気がしてならないのだ。

さてと、きみだよ！　カライスクロスの子よ。克己節制(思慮の健全さ)とは知の知であり、むろんまた、無知(無知識)の知でもあるという主張をしているのは、きみだからね。まずはじめに、いましがたぼくの言っていた C ことが可能だということを、つぎには、その可能性に加えて、それが有益でもあるということを、明らかにしてもらいたい。そうすれば、おそらく、克己節制(思慮の健全さ)とは何であるか、ということについてのきみの説はいかにも正しいというわけで、ぼくは堪能させてもらえるのだがね！」

一七

D

で、クリティアスはその話を聞き、ぼくが困惑しているのを見て、ちょうど、自分の目の前であくびをされると、うつって同じようにあくびをもよおすようなもので、かれもぼくの困惑ぶりに感化されて、これまた困惑のとりこになったように見えた。しかし、いつもよい評判をとっているものだから、その場の人びとのてまえ、はずかしくもあり、ぼくにうながされた問題の区別分けができないのを、いっかな白状しようともしないし、その困惑ぶりをひたかくしにかくして、明確なことはなにひとつ言いもしなかった。そこで、ぼくたちの対話を進行させるために、ぼくのほうからこう言ってやった。

「まあまあ、なんなら、クリティアス、さしあたり今のところは譲歩して、知の知というものの存在が可能になるということのほうは、われわれとしてはいちおう認めることにしようではないか。事実そうであるかないかの調査は、いずれまたあらためてすることにして。それなら、さあ、かりにそれが可能だとしても、そう仮定することによって、ひとは自分が何を知り何を知らないかを、はたしてどれだけいっそうよく知ることができるというのだろうね？　というのは、たしかに、さきのわれわれの主張では、(1)これ、つまり、何を知り何を知らないかを知ることが、自己自身を知ることであり、克己節制(思慮の健全さ)をもつことだったはずだからね。そうだね？」

E

「ええ、そうですとも」とかれは答えた。「そして、どうも、じっさいそういうことになるようです、ソクラテス。なぜなら、もしひとが知自身を知る知というものをもっていれば、かれは自分のもっているその知と同じ

170

ような性質のひとになるでしょうからね。それはたとえば、速さをもっていれば、ひとは速くなり、美をもっていれば、ひとは美しくなり、知をもっていれば、知者になるようなものなのです。また、したがって、知自身を知る知をもっていれば、ひとは自己自身を知ることになるはずです」

「いや、その点には」とぼくは言った。「異論はないよ。つまり、知自身を知る知をもっていれば、ひとは自己自身を知ることになるという点はね。しかし、ひとがそういう知をもっているということから、どうして必然的に、何を知り何を知らないかを知るということが出てこなければならないのかね？」

「それはですね、ソクラテス、後者〔何を知り何を知らないかを知ること〕が前者〔知が知を知ること〕と同じことだからです」

「たぶん、そうだろうね」とぼくは言った。「しかし、どうもぼくはいつまでたってもあいかわらずの男だね。だって、こんどはまた、何を知っていると知ることと、何を知らないと知ることが、どうして同じなのか、ぼくにはやはりわからないから」

「それはどういう意味なのですか」とかれは言った。

「こういう意味だよ」とぼくは答えた。「知（について）の知であってみれば、その知は、いまの二つのばあいのうち、その一方は知であり、他方は知でない、という区別はまあできるだろうが、それ以上のことがはたしてできるだろうか」

1　164D sqq., 167 A.

「いいえ。それだけのことしかできません」

B 「ところで、その知(についてゝ)の知は、健康(について)の知や無知(無知識)とか、正しさ(について)の知や無知(無知識)とかと同じことかね?」

「いいえ、絶対にそうではありません」

「そうではなくて、その一つは、ぼくの考えでは、医術、いま一つは政治の技術なのに、問題のその知のほうは、まさしくただの知なのだ」

「もちろん、そうですとも」

「ところで、健康や正しさについてまでは知りおよばず、この知の知だけしかもっていないものだから、ただの知だけを知っているというようなばあいには、とうぜんながら、そのひとが自分や他人について知り得ることといえば、なにか知っている、なにかある知をもっている、ということぐらいだろう。そうだろう?」

「そうです」

C 「しかし、何を知っているのか、などということを、そのひとはこの知によって、どうして知るのだろうか。なぜなら、とにかく、健康を知るのは、医術によってであって、克己節制(思慮の健全さ)によってではないし、音の調子に関することを知るのは、音楽の技術によってであって、克己節制(思慮の健全さ)によってではない。また、建築関係のことを知るのは、建築術によってであって、克己節制(思慮の健全さ)によってではない。以下、どんなばあいについても同じことだ。それとも、そうではないばあいも?」

「いいえ、見たところ、そのようです」

「ところで、克己節制(思慮の健全さ)が、もしほんとうにいろいろな知(について)の知にすぎないとすれば、ひとはこの知によって、どうして知るのだろうか——健康を知っているとか、建築関係のことを知っているとかいうことを」

「どんなにしても、知りようがありません」

「すると、そういった箇々のことを知らない者は、何を知っているかは知らないわけで、知っていると知るだけだ、ということになるだろう」

「どうやら、そのへんのところかもしれませんね」

一八

D 「したがって、克己節制(思慮の健全さ)をもつことや、克己節制(思慮の健全さ)そのものは、何を知り何を知らないかを知ることではなくて、ただ単に、知っている、知っていない、と知るだけのものにすぎないことになるようだね」

「どうも、そういうことになるようです」

「すると、他人(ひと)がなにか知っていると主張しても、その人が知っていると主張している事柄を、はたして知っているのか、知っていないのかの吟味も[1]、この克己節制(健全な思慮)のもちぬしにはできないということになる。

1 166D, 167A.

できるのは、相手の人がなにかある知をもっている、と知るだけのことにすぎないようだ。それに反して、それが何(について)の知なのかということのほうは、克己節制(思慮の健全さ)が相手の人に知らせてやることにはならないだろう」

「そのようです」

E

「またしたがって、医者でもないくせに医者だと称している者と、ほんものの医者を区別することも、この克己節制(健全な思慮)のもちぬしにはできないし、そのほかのどんなことに知識のある人についても、ほんものとにせものの区別はできないことになるだろう。

で、その問題をつぎのようなところから調べてみることにしよう。かりに、克己節制(健全な思慮)のもちぬしでもよいし、ほかのだれでもよいが、ほんものの医者とにせ医者をみわけようとすれば、こういう方法をとることにはならないかね? つまり、医術については、その相手と対話するはずはないと思うよ。なにしろ、さきにわれわれも主張したように[1]、医者というものは、ほかでもない、健康によいもの悪いものだけに通じているのだから。そうではなかったか」

「いや、そう主張しました」

「しかし、知については、医者はなにも知らない。いや、この知は、われわれが克己節制(思慮の健全さ)にしかわりあてなかったものなのだ」

「ええ、そうでした」

「そうすると、医術についても、医術の心得ある者が知らないということになる。なにしろ、医術はまさしく

知なのだからね」

「そうです、ほんとうに」

「そこで、医者がなにかある知をもっているということは、なるほど、克己節制(健全な思慮)の人にわかるだろうが、しかし、それがどんな知なのかを試さねばならないときには、それが何(について)の知なのかを調べてみることになるのではないだろうか。つまり、それぞれの知が単に知であるというだけではなく、さらには、どんな知なのかを規定するきめ手は、その知が何(について)の知なのかということではないか?」

「そうですとも、それがきめ手になります」

「それではまた、医術も、ほかの知とはちがった知として規定されるためのきめ手は、健康によいもの悪いもの(について)の知であるということだったわけだ」

「そうです」

B 「で、医術を検討しようとする者は、いずれにしても、医術の専門領域であるところのそのような事柄〔健康によいもの悪いもの〕において検討にあたらざるを得ないのではないか。というのは、まさかその検討が医術の専門外の領域においてであるはずはないから」

「むろん、よその領域でないにきまっています」

「すると、その医者がどの程度まで医者としての資格があるかを、健康によいもの悪いものという領域におい

1　170C.

て調べてみることになるだろうね。まともに検討にあたろうとする者なら」
「そのようです」
「で、その検討にあたっては、そのような医者としての言行の範囲内で、ほんとうのことが言われているのか、正しいことがなされているのかを調べるのではないのか」
「ええ、必然にそうなります」
「ではどうだね、医術に通じてもいないのに、それら医者としての言葉もしくは行為のいずれかについて行けるひとがあるだろうか」
「むろん、ないにきまっています」
c「うん、それに、医者でないかぎりは、だれにもできないようだし、克己節制(健全な思慮)のもちぬしにしてもできっこないね。だって、できるというのなら、かれは克己節制(思慮の健全さ)以外に、医術の心得がなければならないはずだから」
「なるほど、それはそうです」
「したがって、とうぜんこういうことが帰結する。つまり、もし克己節制(思慮の健全さ)が知や無知(無知識)(について)の知にすぎないとすると、医者が医術に属する事柄を知っているのか、それとも、知らないのに知ったかぶりをしたり、知っていると思っていたりするのかを区別することもできないし、ほかのどんな事柄を知っている人についても、区別できないだろう。ただし、自分と専門を同じくする人についてだけはできるだろうがね。ほかの専門家どうしの間では、それができるように」

「ええ、見たところ、そのようです」とかれは言った。

一九

D 「そうすると、クリティアス」とぼくはつづけた。「どんな利益を、なおわれわれは克己節制(思慮の健全さ)から ひき出すことができるだろうか、克己節制(思慮の健全さ)が以上のようなものであってみれば。つまり、もしも、われわれがはじめに出発点として定めたように[1]、克己節制(健全な思慮)の人は、自分が何を知り何を知らないかを知っていて、一方は知っていると知り、他方は知らないと知っており、さらに、それと同じ状況にある他人も調べてやることができるとすれば、そのばあいには、われわれが克己節制(思慮の健全さ)をもつことによってうける利益は、たいへんなものだろう! とわれわれは主張するよ。なぜって、そうなれば、克己節制(思慮の健全さ)をもっているわれわれ自身も、われわれに指導されるほかのすべての人びとも、過失なく生きて行くことになるだろうからね。というのは、われわれ自身にしても、知らないことがあれば、それを自分でしようとはせずに、だれかその方面の知識ある人を見つけ出してきて、その人に譲ってやってもらうだろうし、われわれの指導をうけるほかの人びとにも、やれば正しくやれるにちがいない事柄——すなわち、あらかじめかれらの知っている事柄のばあい——しか、行なうことを許さないだろう[2]。

E かくして、克己節制(思慮の健全さ)のおかげで、家政は美しくととのえられるし、国政も美しく行なわれ、そ

1 167A～B.

2 『アルキビアデスI』117D～E参照。

のほか万事が克己節制（思慮の健全さ）に支配されて、うまく行くことだろう。というのは、いったん過失がとりのぞかれ、正しさが指導することになると、必然的に、そのような心がまえをもたされた人びとは、なにをするにも美しくいいように行なわねばならず、いいように行る（うまく行く）人というものは、かならずいいダイモーン（神霊）がついている（幸福な）人なのだからね。[1] どうだね、クリティアス」とぼくはつけくわえた。「克己節制（思慮の健全さ）について、そういう意味のことを言おうとしていたのではなかったのか。何を知り何を知らないかを知ることがどんなに善いことであろうかと、さきにわれわれが語ったときには」

「そうですとも。たしかにそういう意味でした」とかれは言った。

「ところが」とぼくはつづけた。「いまごらんのとおり、どこにもそういう知は見あたらないということが明らかになった」

「なるほど」とかれは答えた。

B

「ところで」とぼくは言った。「いまのところ、われわれの見つけ出したところでは、克己節制（思慮の健全さ）とは、さしあたり、知と無知（無知識）（について）の知というわけだが、この知はつぎにのべるような善い点をそなえているのだろうか。つまり、ひとは、その知をもっていれば、それ以外になにを学ぶにしても、その学習はもっとやりやすくなるし、どんなことでも、もっとはっきり見えるようになるのだろうか。だって、そのひとは自分の学ぶそれぞれの学科以外に、その当の知を観得しているのだからね。さらにまた、そのひとが自分自身でも学んでいる学科のことで、他人を吟味するようなばあいにも、もっとうまく美しく行くことになるが、それに反して、その当の知をもたずに、そういった吟味にあたるひとは、もっと無力でへたな吟味しかできないことに

なるのだろうか。

C はたして、愛する友よ、われわれが克己節制（思慮の健全さ）のおかげで得するはずのことといえば、なにか以上のようなことなのに、われわれときたら、なにかもっと大きな得をめざし、実際以上に誇大視した法外な得を求めているのかね？」

「おそらく、そんなところでしょうね」とかれは言った。

二〇

「たぶん、そんなところだろうがね」とぼくは言った。「しかし、たぶん、われわれの求めていたものは、なんのためにもならないものかもしれないよ！　その証拠には、克己節制（思慮の健全さ）が上述のようなものだとすると、それのことで奇妙な事実がいろいろぼくの念頭にうかんでくるのだ。

だって、まあ、もしよければ、見てみようではないか。知の知の存在が可能だということをおたがいに承認しあった上で、さらに、われわれがはじめに定めたこと、つまり、克己節制（思慮の健全さ）とは、何を知り何を知

D らないかを知ることだというあのことも、奪いとったりしないで、かりに認めるとしよう。ついで、以上すべてのことに承認を与えた上で、もっとよく調べてみようではないか。いま認められたようなものであるとして、克己節制（思慮の健全さ）というものは、はたして、やはりわれわれのためになるようなことをなにかしてくれるの

1　173D sqq.、『アルキビアデス I』116B, 134A～B、『ゴルギアス』507C、『エウテュデモス』280B～281C 参照。

だろうか？ という問題を。

というのは、さきほどわれわれは、克己節制（思慮の健全さ）というものが上述のようなものであれば、家政や国政を指導するばあいには、大いに善いことだろうと主張していたが、ぼくの考えでは、われわれがそれに同意したのは、クリティアス、どうもうまくなかったようだから」

「いったい、どうして？」とかれはたずねた。

「それはね」とぼくは答えた。「もし、われわれがめいめい、自分の知っていることはするが、知らないことは、だれかほかのその方面の知識ある人に譲って、その人にやってもらうなら、世間の人びとにとってなにか大いに善いことだということに、われわれが同意したのは軽率だったからだよ(1)」

E

「おや」とかれは言った。「それは正しい同意ではなかったのですか」

「ぼくの考えでは、正しい同意ではなかったようだ」とぼくは答えた。

「奇妙なことをおっしゃいますね、ほんとうに、ソクラテス」とかれは言った。

「犬に誓って(2)」とぼくは言った。「そうだとも！ ぼくも同感だね。じつはその点に注目したからこそ、いまさきも、奇妙な事実がいろいろぼくの念頭に浮んでくるなどと口走って、われわれの考察のすすめかたがまちがってはしないかという恐れを表明したわけだよ。なぜって、じつをいえば、克己節制（思慮の健全さ）が、かりにそういうものだとしてもだよ、それがわれわれに善いことをしてくれるということは、すこしも自明のことで

173

はないように、ぼくには思えるのでね」

「いったい、どうしてですか」とかれはたずねた。「聞かせてくださいよ。われわれも、あなたの言わんとさ

れるところが知りたいのです」

「ぼくは」とぼくは言った。「無意味なことをしゃべっているような気がするのだがね。まあ、しかし、とにかく念頭に浮んでくることは、むぞうさに見すごしてしまうようなことは許されず、どうあっても検討してみなければならない。すこしでも、自分のことを心にかける者であるなら」

「うまい、ようこそ言ってくださいました」とかれは答えた。

二

「それなら、さあ、聞いてくれたまえ」とぼくは言った。「ぼくのは夢のような話なのだが。その夢が角の門を通ってきたにせよ、象牙の門を通って出てきたにせよ(3)。かりにもし、克己節制(思慮の健全さ)がいまわれわれの規定したようなものであって、われわれを支配するとB しても、それでどうなるというのだろう。なるほど、そうなれば、すべての行為はいろいろな知にしたがってなされることになり、船の操縦もできないくせに、船長だと称してわれわれを欺きとおせる者は、ひとりもいない

1　171E.

2　『ソクラテスの弁明』22A、『ゴルギアス』482Bなどにもみられる表現。古注によると、犬や鵞鳥やプラタナスの木や牡羊などの名を誓いの言葉につかうのはラダマンテュスの誓いといわれ、神々の名を軽々しくつかわないためだったと言われている。

3　ホメロス『オデュッセイア』第一九巻五六二―五六七行にみえるペネロペの言葉によると、夢の門は二つになっていて、象牙の門を通ってくるものは人をだますが、角の門を通って出てくるものは、かならず正夢となる。

ことになるし、また、医者や軍司令官その他だれにしたところで、なにか知ったかぶりをしていても、そのじつは知らないのだということが、われわれに気づかれずにすむということもなくなるのではないか。いいかね、事情がそういうふうだと、どういう結果になるかといえば、ほかでもない、われわれの身体はいまよりもっと健康になるし、海上や戦争で危険にさらされても、身を全うすることができ、また、われわれの器具、あらゆる種類の衣服やはきものはおろか、その他のさまざまなものにいたるまで、いっさいがっさいが、本職の専門家を使えるものだから、その道の技術にかなったしかたで工作してもらえるだろうか。

C　それにまた、もしよければ、予言術も将来についての知として認め、克己節制(思慮の健全さ)がその予言術を管理すれば、ほら吹きを遠ざけてくれるばかりか、ほんものの占い師を、われわれのために将来を予言する者として任命してくれることになるのを認めてやろうではないか。

D　まさしくそういうふうな状況がそなわると、人類は知にしたがって行為し、生きて行くことになるだろう——というところまでは、ぼくもついて行ける。だって、克己節制(思慮の健全さ)が警戒してまもっているかぎり、無知(無知識)がこそこそわりこんで来て、われわれの同僚になるようなことは、けっして許すはずがないから。しかし、知にしたがって行為すれば、それで、われわれはいいように行った(うまく行った)ことになり、いいダイモーン(神霊)がついていること(幸福)になるはずだというあたりまでくると、われわれはまだ理解できないでいるのだ、愛するクリティアスよ」

二三

174

「しかし、そうかといって」とかれは言った。「知にしたがってということを軽蔑なさっては、いいように行る(うまく行く)ことの極致をなにかほかに見つけようとなさっても、容易なことではないでしょうね」

「では、ぼくに、ほんのちょっとしたことだが」とぼくは言った。「もう一つ、ついでに教えてくれたまえ。何(について)の知にしたがってと、きみは言っているのだね？　どうだろう、靴につかう革の裁断(について)の知では？」

E

「いいえ、ゼウスに誓って、そんな意味ではありません」

「それなら、金物(かなもの)細工(について)の知かね？」

「いいえ、断じてそうではありません」

「では、羊毛とか木材、あるいは、なにかほかのそういったたぐいのものに加工する知かね？」

「むろん、そんなのでないにきまっています」

「それなら」とぼくは言った。「もはやわれわれは、知にしたがって生きる者はいいダイモーンがついている(幸福である)という説を守っていないということになるね。だって、上述の加工や細工に従事している人びとは、知にしたがって生きているのに、幸福だという同意がきみからはもらえないのだから。むしろ、きみは、幸福なひとというものを、もっぱら、なにかある事柄(について)の知にしたがって生きている者だけにかぎっているように、ぼくには見えるよ。そして、たぶんきみは、いましがたぼくが挙げた人のことを言おうとしているのだろうね。つまり、将来のことなら、どんなことでも知っている人、占い師のことを。きみの言おうとしているのは、その人のことかね、それとも、だれかほかの人？」

「ええ、その人のことでもあり、ほかの人のことでもあります」とかれは答えた。

「それはだれのことなのかね？」とぼくはたずねた。「ははあ！　ひょっとして、きみはこういう人のことを考えているのではないか？　つまり、将来のこと以外に、現在は言うにおよばず、過去のことも、なんでも知っていて、なにひとつ知らないことはないというような人のことを。(1)まあ、だれかそういう人が実際にいるとしよう。だって、ぼくの考えでは、きみにしても、そういう人以上に、知においてまさった人が実際に生きているなどと主張することはできないだろうからね」

「むろん、できないにきまっています」

「では、もう一つ、このことがぼくは知りたい。つまり、その人のもっているいろいろな知のうちで、どの知がその人を幸福にしてくれるのかが。それとも、それらの知はどれもこれもみな同じように、かれを幸福にしてくれるのか」

「同じようにということは、けっしてありません」とかれは答えた。

B

「するとしかし、どういう知がいちばん、かれの幸福に貢献するのだろうか。それは、現在、過去、未来にわたる事柄のうちの何についての知であるという点で、いちばん貢献するのだね？　はたしてそれは、将棋のさしかたについての知であるという点でかね？」

「何を言っているのです、将棋のさしかたただなんて！」とかれは言った。

「では、計算のしかたについての知であるという点でかな？」

「とんでもない」

「すると、健康についての知であるという点では?」
「そのほうがましですね」とかれは答えた。
「いや、いや、ぼくの言っているのは、いちばんかれの幸福に貢献する知のことだよ」とぼくは言いかえした。
「それは、何についての知であるという点で、貢献度がいちばんなのだね?」
「善悪についての知であるという点でです」とかれは答えた。
「殺生なやつだな、きみは!」とぼくは言った。「さっきから、ぼくを引っぱりまわすだけ引っぱりまわして
C おいてだよ、いいように行る(うまく行く)ことやいいダイモーンがついていること(幸福)を保証してくれるのは、知にしたがって生きるということではなく、さらには、ほかのすべての知にしたがって生きるということでもなくて、ただ一つの知、つまり、善悪についての知にしたがって生きるということだったのに、それをきみは秘密にしてかくしているとは!
なぜって、事実、クリティアス、きみがその知をほかのいろいろな知から除外する気になれば、それでいくらかでも、医術はひとを健康にしないし、はきものつくりの技術ははきものをはかせないし、機織の技術は衣服を着せないし、船を操縦する技術は海上で、軍隊を指揮する技術は戦場で、ひとが死ぬのを防止してくれないことになるのだろうか」

1 ホメロスの『イリアス』に登場するカルカスは第一流の鳥うらない師で、現在、未来、過去にあったことによく通じているとされているが、カルカスのような人のことがここで言われていると指摘する学者もある。

「いいえ、ちっともかわりはありません」とかれは答えた。

D 「しかしながら、愛するクリティアスよ、それらの専門的な知がそれぞれ、いいように、利益になるように行なわれるという可能性のほうは、われわれを見捨ててしまうことだろうね、その知が欠けていれば(1)」

「ほんとうに、おっしゃるとおりです」

「うん、ところが、どうやら、その知は克己節制(思慮の健全さ)ではないようだね。むしろ、その知はわれわれを益することを仕事とするものらしい。というのは、その知は、知と無知(無知識)(について)の知ではなく、善悪(について)の知なのだからね。したがって、その知がわれわれを益してくれるものであれば、克己節制(思慮の健全さ)は、われわれの利益になる知とはちがった別のものだということになるはずだ」

「しかし、どうして」とかれは言った。「克己節制(思慮の健全さ)が有益ではないことになるのですか。だって、克己節制(思慮の健全さ)は、とにかく絶対にいろいろな知(について)の知であり、また、ほかのさまざまな知を管理するものだとすると、むろん、その善についての知も配下におさめて、われわれを益することになるはずでしょう」

E 「どうだね、ひとを健康にすることもやってくれるのだろうか、医術ならぬその克己節制(思慮の健全さ)が？　また、そのほかのいろいろな技術に属する仕事にしても、それがやってのけて、ほかの技術がそれぞれ自分の仕事としてするのではないのかね？

いや、さっきからわれわれは、克己節制(思慮の健全さ)とは、たんに知と無知(無知識)(について)の知にすぎず、ほかのことはなにも知らない知なのだと言明してきたのではなかったのかね？　そうではなかったのか(2)」

175 「どうも、そういうことだったようです」

「すると、克己節制（思慮の健全さ）は、健康の専門家ということにはならないはずだね？」

「むろん、ならないにきまっています」

「というのは、健康はほかの技術領域に属するということだったから。そうではなかったか」

「いや、ほかの技術領域のことでした」

「してみると、克己節制（思慮の健全さ）は、利益の専門家でもないことになるね、友よ。だって、それどころか、われわれはたったいま、その仕事〔利益〕をほかの技術〔善悪の知〕にわり当てたばかりだもの。そうだろう？」

「ええ、そうですとも」

「すると、どうして克己節制（思慮の健全さ）は有益になるのだろうか、いかなる利益の専門家でもないのに」

「けっして有益にならないでしょう、ソクラテス、どうも、見たところ」

二三

「さて、わかるかね、クリティアス、さっきから、克己節制（思慮の健全さ）についてのぼくの考察がなんのためにもならないのではないかと恐れていたのも、どれほどとうぜんであり、またそれを自分のせいにしていたのも、B どれほどもっともなことであるかが。なぜなら、かりにいくらかでもぼくに、美事（みごと）に探究をすすめて行くだ

---

1 164B～Cと比較せよ。

2 167B～168D, 170A～D.

けの有能さがあったならば、なにもましてこよなく美しいと定評のあるものが、われわれの目には無益なものに見えたりするはずはなかったろうからね。ところが実際はちがう。なにしろ、われわれはいたるところで敗北のうきめをみたものだから、かの立法者[1]がこの克己節制（思慮の健全さ）という名をどんな存在にさずけたのか、それを見つけ出してくる力がわれわれにはないのだ。

それにしても、われわれの言論（論理）の中でならどうしても帰結してこないようなたくさんのことを、われわれは譲歩して認めたものだね。というのも、知の知が存在するということを認めたからね[2]。われわれの言論（論理）はその存在を許さず、肯定もしていなかったのに。さらにまた、その知の知が、ほかのいろいろな知の仕事まで

C

でも知るということも、これまた言論（論理）が許さないのに、われわれは譲歩して認めたのだ[3]。克己節制（健全な思慮）の人が、自分の知っている事柄については、知っていると知り、自分の知らない事柄については、知らないと知る人になってもらったりするためにさ！　いやはや、そこまであっさり譲歩してやったとは、まったくのところ、われわれも度量が大きいね。まるっきり知らない事柄をどうかこうかして知るなんて不可能だのに、われわれときたら、その調べもすませずにさ。だって、そんなことにうっかり同意すれば、結局、それらまるっきり知らない事柄について、その人が知らないと知っているなどと、われわれが主張することになってしまうのだから[4]！　ぼくの考えでは、それ以上に筋道の立たない主張は、ほかにあるはずがないのだが。

D

ところが、この探究は、そんなにお人好しで妥協的なわれわれごとき人物にめぐりあっていながら、しかもなお、真実を発見できないでいる。それどころか、この探究は真実をひどくあざ笑い、その結果、われわれがさっきから、たがいにさんざん譲歩や妥協をかさね、やっと克己節制（思慮の健全さ）だと定めたもの〔知の知〕が、じ

つはわれわれにとって無益なものだと、この探究はあつかましくも宣言したのだ。

で、ぼく自身としては、そんなに悲しい思いはしていないがね。しかし、きみのためには」とぼくはつけくわえた。「カルミデス、ひどく悲しい思いをしているのだよ。きみがそれほどの姿かたちをもち、かてくわえて、 E こよなく克己節制(思慮の健全さ)にめぐまれたたましいの人だというのに、その克己節制(思慮の健全さ)からはなんの利益もうけず、きみの生活のうちにそれが現にあっても、なんのためにもならないのだったとしたら。しかし、それにもましてもっとぼくが悲しく思うのは、あのトラキア人(5)から学んだ唱えごとのためなのだ。苦心さんたんして学んできたのに、それが実際はなんの値うちもないものだったとしたら。

しかし、そうは言っても、それらのことがほんとうにそうであるとは、ぼくにはぜんぜん思えないね。むしろ、その責任はくだらない探究者たるこのぼくにあると思うよ。なにしろ、克己節制(思慮の健全さ)というものは、 176 なにか大いに善いことであり、また、きみがほんとうにそれをもっているのなら、きみはめぐまれた人間だとぼくは思うから。

さあ、見てみたまえ、きみはそれをもっていて、唱えごとなどはちっとも必要としないのかどうかを。だって、

---

1 『クラテュロス』では、立法者とは作名者なりとされ(389A)、立法者には、おのおののものに本来ふさわしい名を立ててやる知識がなければならないとされている(389D)。

2 169D, 172B~D.

3 166E~167C, 168A~B, とくに171D~172C, 173A~D.

4 『テアイテトス』188A参照。

5 155E~157C.

きみがそれをもっているのなら、ぼくとしては、むしろきみにこう勧告したいからね。つまり、ぼくのことは、役立たずのおしゃべりで、何にもせよ言論による探究のできないやつだとみなしてもいいが、きみ自身については、克己節制(思慮の健全さ)をもてばもつほど、それだけますますいいダイモーンがついていること(幸福)になると考えるように、とこう勧告したいのだ」

二四

すると、カルミデスが答えた。

「ところが、ゼウスに誓って、ソクラテス、わたしは自分がそれをもっているのかいないのか、さっぱりわかりません。だって、あなたがお認めになっているように、あなたがたお二人にさえ、それが何であるかは見つけ出せないのでしょう。それがどうしてわたしに知ることができるのでしょうか。せっかくのお言葉ですが、しかし、お勧めにはまるで応じられそうにもありませんし、わたし自身には、ソクラテス、その唱えごとがだんぜん必要なのだと思います。それどころか、わたしのほうはいっこうにさしつかえありませんから、来る日も来る日もあなたが今日のところはそれぐらいで十分だとおっしゃるまで、あなたの唱えごとを聞かせてください」

B

「よろしい。ところで」と、クリティアスが口をさしはさんだ。「カルミデス、そうしてくれれば、きみが克己節制(健全な思慮)の人であるという証拠をぼくに提出してくれたことになるだろう。きみがソクラテスの唱えごとに身をささげて、大小いずれのことにつけても一歩もはなれず、このかたにつきまとっていてくれればね」

「いえ、それはもう、もちろん、わたしはついて行ってはなれないつもりです」とカルミデスが言った。「だ

C　って、後見人のあなたの言葉にしたがわず、お命じになったことをそのまま行なわなければ、わたしはとんでもないまちがいを犯したことになるでしょうから」

「いや、むろん、それがぼくの命令だよ」とクリティアスが言った。

「では、そうすることにします」とカルミデスが答えた。「今日の日からはじめて」

「おいこら！　きみたち」とぼくは言った。「何をするつもりで、二人して審議しているのだ？」

「いや、別に」とカルミデスが答えた。「もう、われわれの審議はおわりました」

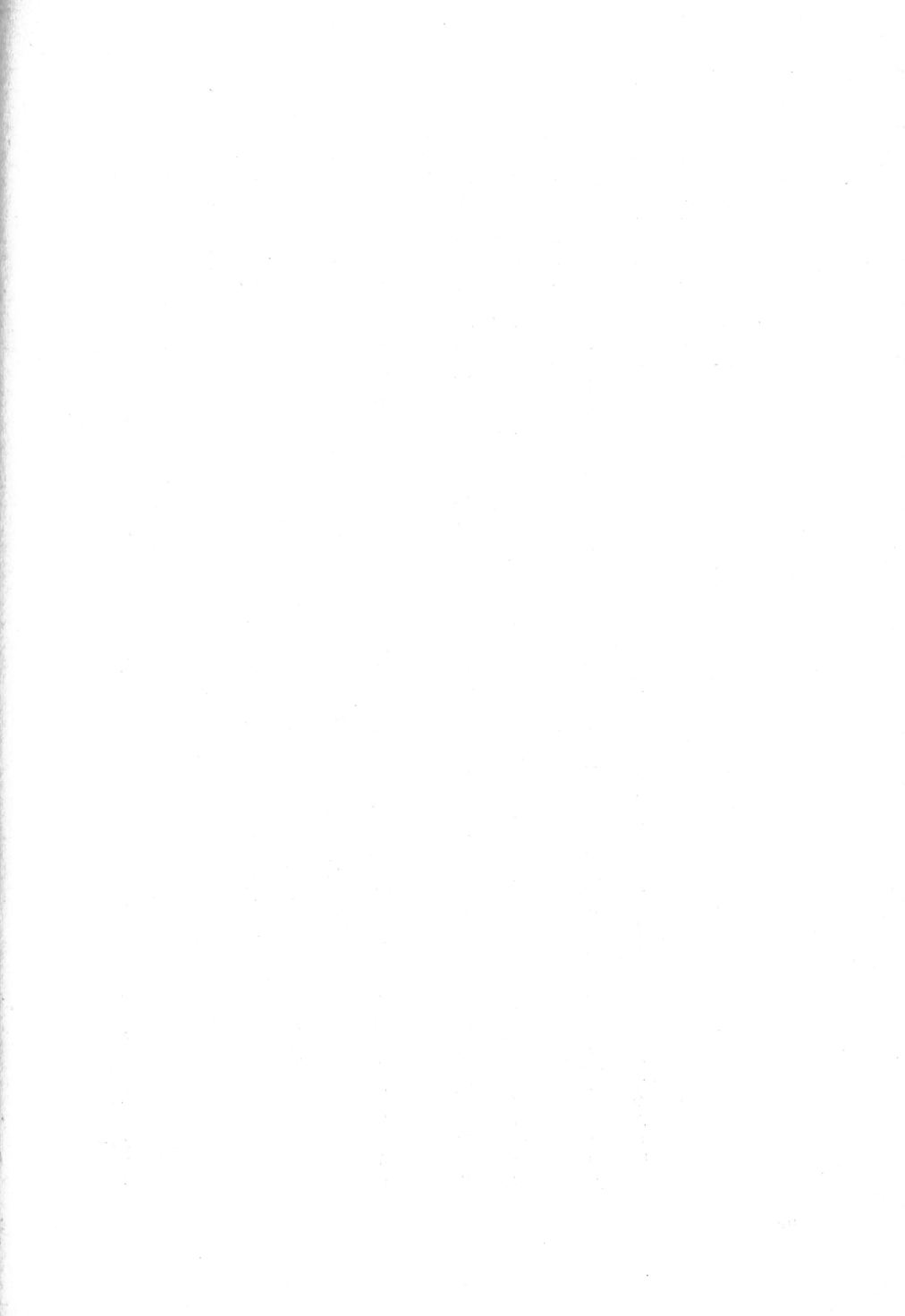
「すると、きみは強制執行にふみきるつもりかね」とぼくは言いかえした。「ぼくに予審の機会もあたえないで？」

「そうですとも、強制執行に出ますから、そのおつもりで」とかれは言った。「だって、ほかならぬこのクリティアスのご命令ですもの。ですから、こんどはあなたのほうで思案してくださいよ、どういう対策をお立てになるつもりですか」

D　「いや、しかし」とぼくは答えた。「思案することはひとつも残っていないよ。だって、何にもせよ、きみが行なおうとして、しかも強制手段にうったえてきたら、それに反対できる人間はひとりもいないだろうから」

「それなら」とかれは言った。「あなたも反対しないでください」

「よろしい、それなら」とぼくは答えた。「反対しないことにしよう」

ラケス

——勇気について——

生島幹三訳

登場人物

リュシマコス
メレシアス
ニキアス
ラケス
リュシマコスの息子
メレシアスの息子
ソクラテス

一

178 **リュシマコス**　ニキアスにラケス。あの男が重武装[1]してわたりあっているところを、ごらんになったわけですが、何のために私と、このメレシアスが、いっしょに見てくださるようにお願いしたのかということは、さきほど言いませんでしたが、いま申しましょう。みなさんには何でもお話しすべきだと、私たちは考えていますので。といいますのは、このようなことを馬鹿にする人たちがあり、それにまた、人が相談しても、自分の考えている B ことをすこしも言わずに、相手の考えをおしはかって自分の心にもないことを言う人がありますのでね。しかしみなさんは、すぐれた判断力をおもちになっているばかりでなく、判断したうえで、考えることをそのまま言ってくださるだろうと思いまして、それで、これからご相談しようとする問題について、ご意見をうかがうためにお呼びしたわけです。

179 さて長々と前置きをしましたが、その問題というのはこういうことです。ここにいるのはわれわれの息子(むすこ)でして、これがこの人ので、祖父[2]の名をもらってトゥキュディデスといい、これが私ので、これも私の父[3]である祖父の名をもらっていて、つまりアリステイデスといっています。ところでわれわれの考えでは、この息子たちの面倒を、できるだけみてやるべきだと思うのです。世間一般の人たちのするように、もう若者になってしまえば彼らの好きなようにさせておくのではなくて、われわれにできるかぎり面倒をみることを、むしろいまこそ始める B べきだと考えているのです。そこで、みなさんにも息子さんがおありだということを知っているので、他のどん

な人たちよりもみなさんこそ、どのように育てれば彼らがもっともりっぱな人間になるかということを、すでに配慮してしまっておいでになると考えたのです。だがもしひょっとして、まだこのような問題に注意を向けておいでにならなければ、このことをゆるがせにしてはいけないとご注意し、われわれといっしょに息子たちの面倒をみることに、おさそいしようと思ったというわけです。

二

ところで、どうしてこのようなことをすべきだとわれわれが考えるようになったかというわけを、ニキアスにラケス、すこしばかり長くなっても、ぜひ聞いてください。さて、私と、このメレシアスとは、いつも食卓をともにしているのですが、この若者たちも私たちのそばで食事をしているのです。ところで、話のはじめにも申しましたように、みなさんには何もかもお話しするつもりですから申しますが、われわれはどちらも、自分の父親についてであれば、彼らのしたりっぱな仕事を、それが戦時のことであれ平時のことであれ、同盟国の仕事[4]であれ、この国の仕事であれ、たくさんこの若者たちに語ることができるのですが、われわれ自身のしたことという

C

1 重武装については、あとの182A注1を参照。

2 前五世紀中頃に貴族派の有力な指導者の一人としてアテナイの政界に活動。民主派の代表者ペリクレスの諸政策に反対した。なお、有名な歴史家とは別人。

3 前五世紀初期アテナイの代表的政治家の一人。ペルシア戦争では、将軍としてマラトン、サラミス、プラタイアイの戦に勝利をおさめ、戦後は、いわゆるアテナイ帝国の基礎をきずくことに貢献した。なお、一代おきに名をつぐのはアテナイの一般的慣習。

4 ペルシアの侵入に備えるために、アテナイが盟主となり、諸国を結集して前四七七年に作られた、いわゆるデロス同盟の運営に関することである。

(179)

D

と、二人とも何も語ることがないのです。そこでこのことで、いささかこの人たちに恥ずかしくもあり、また自分たちの父親にたいしては、われわれが青年になってからは、われわれの気ままにさせておいて、他人のことばかりに精だしていたと、とがめたりもするのです。それで、この事実をこの若者たちに示して、もし私たちの言うことをきかず自分自身に対する心がけを怠るようなことがあれば、名もない人間になるだろうが、その心がけを忘れなければ、きっと、おまえたちのもらっている名に恥ずかしくない人間になるだろう、と言っているのです。

E

ところで、息子たちは、お言葉どおりにしますと言っているのですが、われわれのほうは、彼らが何を学んだり何にいつも従事したりすれば、もっともすぐれた人間になるものかと、思案中なのです。するとまた、重武装して戦うことを学ぶのが、若い者によいことだと言ってくれた人がありまして、いま実演中をみなさんがごらんになったあの人を推奨して、見にゆくようにと言うのです。そこで、自分たちがその人を見にゆくだけではなくて、みなさんにもぜひいっしょに行って見ていただき、同時にまた、どのように息子たちの面倒をみるべきかについて、もしおよろしければ仲間になって助言していただこうと考えたのです。

180

以上が、私たちのみなさんに聞いていただきたいと思ったことですが、さて、こんどはみなさんのほうで、この術(学びごと)を学ぶべきだとお考えになるかどうか、またその他のものについても、何か若い者にすすめることのできるような学びごとなりいつも従事することがらなりをごぞんじであれば、意見を聞かせてください。そして仲間入りしていただこうというわれわれの提案に対して、どのようにしてくださるのかおっしゃってください。

三

ニキアス　私としては、リュシマコスにメレシアス、みなさんのお考えはりっぱだと思いますし、喜んで仲間に入りたく思うのですが、その点はこのラケスにしても、おそらく同じことでしょう。

B **ラケス**　まったくあなたのご推察どおりですよ、ニキアス。すくなくともリュシマコスがいま、自分とメレシアスとの父上のこととしておのべになったことは、あのかたがただけではなく、われわれにとっても、国務にたずさわっている他のすべての人々にとっても、まったくそのとおりのことだと思います。このかたのおっしゃるように、おそらく彼らは、子供たちのことにしろその他のことにしろ、自分の個人のことはゆるがせにし、ほったらかしておくことになるだろうと思いますから。

さて、リュシマコス、そのことはあなたのおっしゃったとおりですが、しかし、われわれを若者たちの教育の

C 相談相手に呼びながら、このソクラテスを呼ばないということはおかしいですね。だいいち、みなさんと同じ区(1)の人であるうえに、この人は、いまみなさんが探しておいでになるような、青年たちのりっぱな学びごとなり従事することがらなりが何かあるところで、いつも時を過ごしている人なのですから。

リュシマコス　何ですって、ラケス？　このソクラテスは、すでにそのようなことがら(青年たちの習いごと)

1　アロペケ区。アテナイの南東の郊外にあたる。アテナイの国家は、一五〇(後には約一七〇)の区に分かたれ、それぞれ政治上の、また共同生活上の単位をなしていた。

の何かに注意をはらっている人だとおっしゃるのですか。

ラケス そうですとも、リュシマコス。

ニキアス そのことであれば、私もラケスと同様に、申しあげることができると思います。と言いますのは、

D じじつ、彼は最近私自身に、息子の音楽の先生として、アガトクレス(1)の弟子のダモン(2)を紹介してくれたのですから。そのダモンはというと、音楽だけでなくて他の何ごとにかけても、この年配の若者たちのつくべき師として、あなたのお望みどおりの、このうえなくすぐれた人物なのです。

四

リュシマコス ソクラテス、ニキアスにラケス。私の年配になりますと、年のせいでたいてい家にひっこんで過ごしているので、もう年の若い人たちは知らないのですよ。しかし、ソプロニスコスの息子さん、あなたももしあなた自身と同区人であるこの私に、何か善いことを助言できるのであれば、ぜひ助言してください。じじつ

E また私たちとは、お父さん以来の友人なのですから、そうしてくださるのがとうぜんなのです。私とあなたのお父さんとは、いつも親しい友だちで、あのかたが亡くなるまで喧嘩ひとつしなかったのですから。それにそうそう、いまちょうど、この子らがしゃべっているのを聞いて思いだしましたが、この青年たちが家で二人で話をしているときには、しょっちゅうソクラテスという名前がでてきて、たいそうほめているのです。しかし、それが

181 ソプロニスコスの息子さんのことを言っているのかどうかというようなことは、いちども尋ねたことがありませんでした。それでは子供たち、おまえたちのいつも言っていたソクラテスというのはこのかたのことかね。

子供たち　そうですお父さん。そのかたです。

リュシマコス　女神ヘラに誓って、それはよいことだソクラテス。あなたのお父さんはこのうえなくりっぱなかただったが、その名を高めているとは。それに何といっても、これでわれわれとあなたとは、あなたのものはわれわれ自身のもの、われわれのものはあなた自身のものという、親しい間柄になれるでしょうからね。

ラケス　そうです、リュシマコス。ですからその人を離さないようにしてください。他のところでも私は、彼が父親だけではなくて、祖国の名をも高めているところを目のあたりに見たのですから。つまり、デリオンから退却するときに(3)私といっしょにひきあげたのですが、もし他の人たちも彼のようにふるまう気になっていたとすれば——私は請けあいますが、——われわれの国家はびくともせず、あのときあのような負けかたをしなくてもよかったでしょう。

B

リュシマコス　これはソクラテス、信頼できる人たちから、しかもこのようなことでほめてもらうとは、じつにすばらしいね。それを聞いていて、あなたの評判がよいので私が喜んでいるということを、よく知っていても

1　『プロタゴラス』316Eにも、音楽の教師として、その名があげられている。アテナイの人。

2　『アルキビアデスI』118Cに、ペリクレスが親しく交わった人としてアナクサゴラスなどとともにあげられている。『国家』III. 400B, IV. 424Cでは、そこでのべられる音楽の道徳的効果についての説が、ダモンの名をひきあいにだして主張されている。アガトクレスとともに当時の音楽理論の大家であったと思われる。

3　『饗宴』221Aには、当時騎兵として従軍したアルキビアデスの口を通して、その状況が語られている。デリオンはボイオティア東端の小地点。前四二四年、この地でアテナイ軍はテバイ軍に惨敗を喫した。トゥキュディデス『歴史』第四巻(九〇以下)参照。

らいたいのですが、あなたのほうでも、私が誰よりも好意をもっていることを信じてください。ですから、いまC までもとうぜん、家族同様に思って私たちのところへ、あなたのほうから訪ねにきてくださるべきだったのですが、しかし今日この日からはお互いに知りあったのですから、ぜひ私たちとも、また私たちの友情があなたがたの代にも続けられるようにこの若い人たちとも、交わり親しんでください。さてそのことは、あなたのほうでもしてくださるでしょうし、私たちもまたあとであなたにあらためて言うつもりですが、いまわれわれがしかけていた問題のほうは、さあ、みなさんのご意見はいかがですか。重武装で戦うことを学ぶのは、青年たちに有益なものでしょうか、それともそうではないのでしょうか。

五

D **ソクラテス** もちろんそのことにつきましても、リュシマコス、私としましては、もし何か助言できることがあれば申しあげるつもりですし、またその他あなたのお申し出には何でも従おうと思います。だがしかし、私はこのお二人よりも年が若く、このような問題にお二人より不慣れですから、まずこのかたがたのおっしゃることを聞いてその考えを学ぶことにし、そのうえでもし私に違った考えがあれば、そのときはじめて、あなたにもこのかたがたにもそれをお教えし、わかっていただくようにするのがいちばん正しいと思われるのです。ではニキアス、お二人のどちらかから、おはじめになりませんか。

ニキアス いや、すこしもかまいませんよ、ソクラテス。

E さて私の考えますところでも、その術を知っていることは若い人たちに、いろいろな意味で有益であると思い

182 ます。じっさい、若い人たちが暇なときにいつもしたがることがいろいろありますが、あんなことをせずに、これをして時を過ごすことはよいことですからね。そのうえ、からだはよくなるにきまっていますし、――どんな運動にも劣らない、どんな運動よりも少なくない苦労をさせますから――。同時に、この運動と馬術とは、自由市民のするにもっともふさわしいものなのです。つまり、この武装をして戦う訓練をする人たちだけが、われわれ自由市民が戦士(1)として出場する勝負、およびその勝負の行なわれる状況、に対する訓練をするのです。つぎに、実戦において、他の多くの人たちといっしょに戦列にあって戦わねばならないばあいにも、もちろんその術は何か役にたつでしょう。しかしそれがいちばん大きく役にたってくれるのは、戦列が崩れていまははや一対一になり、B 逃げる敵を追って相手の防ぎとどまるところを攻めたり、あるいはまた退却にあたって、攻めてくる敵を防いだりしなければならないときです。その術を心得ている人は、一対一のときに相手からどうされることもないのはもちろんですが、おそらく二人以上を相手にするばあいも変りはなく、どんなばあいにもその術によって勝をしめるだろうと思います。

さらにはまた、そのようなことを学ぶと、その他のりっぱなことも学びたくなるものです。つまり、重武装し

1　ギリシアの都市国家の市民軍の中心を成したのは重武装歩兵(重甲兵)である。青銅製の、よろい、かぶと、すね当て、短剣を身につけ、楯と長槍を手に持つ。これらの装備は自費でまかなわねばならず、彼らは、騎馬の準備をして騎兵になる市民についで、一定資力のある市民から成っていた。なお、平素体育場で行なわれたその練習は、けいこ用の軽い装備で行なわれたらしいが、ここにでてくる武術教師の称する重甲術は、完全武装で行なう彼独特のくふうのあるものであったのであろう。

て戦うことを学んだあとでは誰でも、そのつぎの陣だてに関することを学びたくなり、それを身につけそのことで人とはりあうようになってしまうと、広く将軍の術に関するあらゆることにとびついてゆくことになるでしょう。さらにそれらに続くこととなると、それらがすべてりっぱなことでもあり、また男子たるものにとって、学び従事する値打ちの十分あるものでもあることは、もはやあきらかなことで、いま問題の術(学びごと)は、そこへの道をつけてくれることになるでしょう。

ところで、それにすくなからぬ追加をつけますと、それを心得ることによって誰でも、それまでの自分よりずっと、戦いにおいて大胆に勇敢になるでしょう。またこのようなことはいささか些細なことだと思う人があるかもしれませんが、ばかにせずに言っておかねばならないのは、その人はまた、それまでよりもみごとな態度を、見せるべき場所で見せることになるでしょうし、そこではまた、そのみごとな態度のゆえに、敵方の目に、ずっと恐るべきものとして映るでしょう。

さて、リュシマコス、いま申しますように、私には、若者たちにそれはぜひ教えるべきであると思われるのでして、またそれがどういうわけでかということも申しました。しかしラケスのほうに、もし別の意見があれば、私自身も喜んで聞きたいと思います。

六

ラケス　よろしいとも。じっさいのところ、ニキアス、どんな術(学びごと)にしても、それを学ぶべきではないなどと言うことは、むずかしいことです。どんなことにせよ、知っていることはよいことだと思われますから

E ね。したがってまたこの重甲術も、もしそれが、それを教える人たちの主張するように一つの術であり、しかもニキアスのお話しのような性質のものであるとすれば、ぜひそれを学ばねばなりません。しかし、それを教えると称する人たちの言うことがまったくいつわりで、それは術ではなく、あるいはたしかに術ではあるが、しかしあまり重大なものではないばあいは、いったいどうしてそれを学ぶ必要があるでしょうか。

私がそれについてそう言いますのは、つぎのことに注目したからです。つまり私の考えでは、もしそれが何らかの価値のあるものであったとすれば、ラケダイモン（スパルタ）の人々が気づいていないはずはないと思うので

183 す。ラケダイモン人というものは、それを学びそれにいつも従事しておけば戦争のことで他の人たちに優るようになるような習いごとを探して、それにいつも従事していること以外には、何もこの世で考えない人たちなのですから。しかし、たとえ彼らが気づいていなくとも、すくなくともその術の教師たちのほうは、つぎのことに気づいているはずです。他でもない、それは、彼らラケダイモン人はギリシア人のなかでいちばんそのようなことに熱心であるということ、また彼らのところでそのことに関して名声を得た人は、他の土地へ行ってもいちばん金が儲かるということで、ちょうど悲劇作家がわれわれのところで名声を得たばあいと同様なのです。そのよう

B なわけで、およそ自分がすぐれた悲劇作家であると思っているような者は、自分の腕前を見せるために、外でアッティカ(1)のまわりの他の諸国をぐるぐる歩きまわるようなことをせず、いきなりこの土地へ足をむけて、ここの人たちに見せるのですが、もっともなことです。

---

1 アテナイの町を中心とするアテナイ国家の地域がアッティカ地方である。

ところがあの重武装して戦う人たちはというと、私の見るところ、彼らはラケダイモンを立ち入り禁止の聖地であると考えていて、足の先もその土地にはいらず、ただぐるぐるそのまわりをまわっているのです。(1) 他の土地の人々——ことに、軍事に関しては、他にすぐれた国がたくさんあることを、みずからも認めているような国の人々——にはどこでも、自分の術を見せておきながら。

七

C つぎにはまた、リュシマコスよ、私は、いままでに彼らの中のけっして少なくない者と、実際の場においていっしょになったことがあり、彼らがどのような者かということを見ているわけです。そしてまさにこの点からも、われわれはしらべることができるのです。つまり、まるでわざとそうしたかのように、いまだかつて一人として、重甲のことにいつも従事していた人たちの中で戦場で名をはせた人がないのです。もっとも、他のことであれば何にしても、名ある人はその人たち、つまりそれぞれの術にいつも従事していた人たちから出るものですが、彼らはその点で他の人たちとくらべて、ひじょうに不運だったようです。といいますのは、あのステシレオスも、D みなさんが私とごらんになったように、あのおおぜいのまえで自分の腕前を見せて、自分のことであんな大きなことを言っていましたが、私は他の機会にもっとみごとに、彼がほんとうの場所でほんとうに自分の腕前を——心ならずも——見せているところを見たのです。

つまり、彼の乗りくんでいた船が敵の運送船とぶつかったとき、彼は鎌付き槍を持って戦っていました。——彼自身も他の人々とは違っているので、武器も違っているというわけですね。ところで、あの男について、他に

E　は何も語るに価するほどのことはないのですが、槍に鎌をつけるというそのしゃれた工夫（くふう）がどのようなことになったかということは、言っておかねばなりません。つまり、彼の戦っているあいだに、その鎌が向こうの船の船具のどこかにからまり、ひっかかったのです。そこでステシレオスは、取ろうと思ってしきりにひっぱったのですがうまくゆかず、他方しかし、船と船はすれ違ってゆくのでした。そこで始めのうちは、船中を柄（え）をつかんで舷（ふなばた）ぞいに走っていましたが、つぎに船と船が離れて、柄にとりすがっている彼をひきずりはじめてからは、手

184　の間から向こうへ柄をくりだしていって、さいごに石突きの先をつかまえました。彼のその恰好（かっこう）に向こうの運送船の人々はしきりに笑いはやしていましたが、誰かが甲板の彼の足もとへ石を投げ、彼が柄をはなしたとたん、そのときはこちらの軍船(2)の人々も、もはや笑いを押さえることができませんでした。——あの鎌槍が向こうの運送船からブランブランゆれているのを見ましてはね。

そういうわけで、おそらくそれはニキアスのお話しのように値うちのあるものなのでしょうが、しかしとにかく私の経験したものは、何かそのようなものなのです。

八

B　したがって、はじめにも言いましたように、それは術ではあってもこんなわずかな利益しかもっていないか、

1　外来の教師たちにたいするスパルタ人たちの態度に関しては『ヒッピアス（大）』283〜285にも言及されている。

2　当時の軍船、つまり三段櫂船のこと。

あるいは術ではないのに術であるといつわり称されているかであって、いずれにせよ学んでみる値うちのないものです。じっさいまたこうも思われますから。つまり、もし臆病な人が、自分はそれを知っていると信じるならば、そのことのために、いままでより向こうみずになり、その結果、じつは彼がどのような人間であったかということが、いままでよりはっきり人目にたつことになるでしょうし、またもし勇気のある人であれば、いつも人から監視されていて、すこしでもしくじればひどく悪口を言われることになるでしょう。つまり、そのような

C 術を知っていると称するならば、嫉妬（しっと）の目で見られることになり、その結果、よほど徳[1]に関して他の人たちよりはるかに立ちまさっていなければ、どうしても笑いものになることをまぬかれないでしょう、そのような術をもっていると主張するならば。この術に励（はげ）むことは、リュシマコスよ、そんなふうに私には思えるのです。しかし、はじめにあなたに申していましたように、ぜひこのソクラテスを離さずに、いま問題になっていることがらについて、彼の考えも聞かせてくれるようにたのんでください。

九

リュシマコス　もちろん、私はおたのみしますよ、ソクラテス。それにまた、いわば審判してくださるかたが、

D われわれの評議会には必要なように思われますからね。つまり、このお二人のご意見が一致していたのであれば、そのような者をそれほど必要としなかったでしょうが、じつはごらんのとおり、ラケスは、ニキアスとは反対の票をお入れになったのですからね。ですからあなたからも、このお二人のうちのどちらのほうに賛成票を入れるのか、聞かせていただくのがよいわけです。

ソクラテス　何ですって、リュシマコス？　どちらか、われわれの中の多数がすすめるほうの意見を、あなたは用いようとしておいでになるのですか。

リュシマコス　といって、誰にしても、それ以外にどうすることができるでしょうか、ソクラテス。

ソクラテス　メレシアス、はたしてあなたもそのようになさるでしょうか。もしあなたの息子さんの体育のことで、何を練習させるべきか協議しているばあいにも、はたしてあなたはわれわれの中の多数の意見にお従いになるでしょうか、それとも、たまたま良い(2)(すぐれた)体育家のもとで教育され練習をつんだような人の言うことに、お従いになりますか。

E

メレシアス　とうぜん、いま言われたような人にでしょうよ、ソクラテス。

ソクラテス　では、四人いる私たちよりも、むしろその人の言うことにお従いになるのでしょうか。

メレシアス　そうなるでしょう。

ソクラテス　正しく判断されるためには、知識によって判断されるべきであって、数によるべきではないでしょうからね。

メレシアス　そうですとも。

1　原語アレテーは、アガトス(「よき」)という形容詞の名詞であり、一般には、広義の、徳、卓越性、を意味する。ここでは、とくに、勇気の意味で言われている。

2　ギリシア語の、よき、あしき、には、すぐれた、おとった、の意味が含まれている。(この作品中でも、ばあいにより、後者のように訳した箇所もある。)全篇の議論の中でこの語の意味を考えるうえで留意のこと。なお、「よき」の名詞にあたるアレテーについては前注参照。

ソクラテス　それでは、いまのばあいも、私たちの中に誰か、いまわれわれの協議している問題について、技術をもっている人がいるかいないかというそのことを、まずしらべてみねばなりません。そして、もしいるとすれば、他の人はほうっておいて、たとえ一人であってもその人の言うことに従うことにし、もし誰もいなければ、そのときは誰か他に人を探さねばなりません。それとも、いまあなたとリュシマコスがしている危い冒険には、小さなものがかけられているのであって、むしろみなさんの持ちものの中で、ちょうどもっとも大きなものが、かけられているのではないと、みなさんはお考えなのですか。と言いますのは、息子たちがすぐれた人間になったり、あるいはその逆になったりするとき、その父親の家全体もまた、そのときに子供たちがなる性質と同じ仕方で治められることになるでしょうからね。

メレシアス　まったくあなたの言うとおりです。

ソクラテス　では、そのことには、まえもって十分注意をはらわねばならないわけですね。

メレシアス　まったくそうです。

B

ソクラテス　それでは、さっきの話になりますが、われわれの中の誰が、体育に関して、もっとも技術をもっているかということを、もしいましらべたいと思っているのであれば、われわれはどんなふうにしらべるでしょうか。その人は、まさにそのことに関する良い先生であった人について、そのことがらを学びそれにいつも従事していた人ではありませんか。

メレシアス　私はそう思います。

ソクラテス　ところで、さらにそのまえにわれわれは、そのことがらというのが、いったいどういうことであ

って、それの先生たちをわれわれが探しているのか、ということを、しらべるのではないでしょうか。

メレシアス あなたのおっしゃることはどういう意味ですか。

一〇

ソクラテス こう言えば、たぶんもっとはっきりするでしょう。つまりわれわれはいま、われわれの中の誰が C 技術者であるか、そして当の問題に関して先生をもっていたか、また誰がそうでないか、ということを審議していながら、いったい何の問題について審議しているのかという点を、最初にわれわれのあいだで同意しておかなかったように私には思えるのです。

ニキアス といってソクラテス、重武装して戦うことが、いまのわれわれの問題であって、それを若者たちが学ぶべきか学ぶべきでないかを、しらべているのではありませんか。

ソクラテス たしかにそうですよ、ニキアス。しかし、人が何か目につける薬について、それをつけるべきかどうか考えるばあい、そのときそのような考慮がなされているのは、その薬についてであるとお思いですか、それとも目についてであるとお思いですか。

ニキアス 目についてだと思います。

D **ソクラテス** それではまた、馬に轡(くつばみ)をはますべきかどうか、またいつそうすべきか、を人が考えるとき、そのばあいに考慮しているのは、おそらく馬についてであって、轡についてではないでしょう。

ニキアス そのとおりです。

ソクラテス　それでは一言で言って、人が或るもののために何かを考えてやるとき、そのばあいの考慮は、まさにその或るもの——つまりそれのためを考えてやっていた当のもののほう——についてなされているのであって、その何かのほう——つまり、他のもののために求められていたもののほう——についてではありませんね。

ニキアス　たしかに。

ソクラテス　そうしますと、相談にのってくれる人をしらべるにあたっても、それのためをわれわれが考えてやっている、この当の目的のものを世話する術に、はたしてその人がたけているかどうか、をしらべるべきです。

ニキアス　まったくそうです。

E　**ソクラテス**　ところでいまわれわれは、若者たちの魂のための学びごと(術)について、しらべているのだ、と言ったものでしょうか。

ニキアス　ええ。

ソクラテス　そうしますと、われわれの中に誰か、魂の世話に関して技術をもち、りっぱにそれの世話をすることのできる人がいるかどうか、そして誰が良い先生についたことがあるか、このことを考えねばなりません。

ラケス　何ですって、ソクラテス？　ものによっては、先生なしでも、先生についた人以上のすぐれた技術者になっている人がいますが、そのような人をあなたは見たことがないのですか。

186　**ソクラテス**　ありますとも、ラケス。だが、そのような人々が、すぐれた技術者であると自称したばあい、彼らの技(わざ)の作品がりっぱにできているのを、一つでも、いくつでも、見せてもらえないかぎり、あなたは彼らを信用する気になれないでしょう。

ラケス　それはあなたの言うとおりです。

二

ソクラテス　ではわれわれもまた、ラケスにニキアス、——リュシマコスとメレシアスは、この二人の息子さんたちの魂ができるだけすぐれた（よき）ものになることを願って、この人たちのことでわれわれを相談にお呼びになったのですから、——このかたがたにわれわれの先生たちをも見せるべきです、——もし見せることができると言うのであれば——。つまり、まずみずからがよき人であって、数多くの若者たちの魂の世話をしたのちに、われわれをも教えてくれた、——ということが明らかに認められている先生たちとは誰々であるか、ということ B を示さねばなりません。あるいは、もしわれわれ自身の中で、自分に先生はなかったと言う人があるとすれば、その人はしかし、アテナイ人あるいは他国人のなかで、奴隷であれ自由市民であれ、彼の手によってよき人間になったと誰しもが認める者としては、どのような人がいるかを言って、彼自身の作品を見せることができなければなりません。だがもしわれわれに、そのどちらもまったくできないとすれば、われわれは、親しい人々の息子さんたちをだいなしにして、いちばん身内の人たちからいちばん重大な非難をうけるような冒険はせずに、他の人たちを探してくださいというべきです。

C さて、リュシマコスにメレシアス、まず私が自分のことを言いますと、私にはそのことについて、いまだかつて先生はありませんでした。もっとも、若い時からずっと、そのことに心を寄せてはいたのです。りっぱでよき人にしてあげることができる、と私に請けあってくれたのは、ソフィストたちだけでしたが、しかしあの人たち

には謝礼を払うことができず、かといって自分でその術を見つけだすことは、いまなお、できないでいます。だがもしニキアスやラケスが、すでに見つけるなり学ぶなりしておいでになっても、私は驚かないでしょう。なぜといって、このかたがたは、財産から言って私よりも力があり、したがって他の人たちから学ぶことができますし、同時にまた、年が私よりも上であり、したがってすでに自分で見つけていることもできるわけです。それで

D 私には、このかたがたは人間を教育する力をもっておいでのように思えるのです。もし十分知っているという自信がなかったとすれば、若者の従事することがらについて、益になる害になると恐れげなく意見をのべるようなことは、けっしてなさらなかったでしょうからね。したがって、他のことなら、私としてはこのかたたちを信用するのですが、しかしお二人の意見がくい違っているのには驚きました。

そこで、つぎのことを私のほうから逆にお願いしたいのです、リュシマコス。つまり、さっきラケスが、私を離さずに質問せよ、とあなたにすすめておいでになったとちょうど同じように、私もいま、ラケスとニキアスを離さずに質問するように、とあなたにおすすめします。それではこう尋ねてください。

E ――ソクラテスのほうは、この問題について知識がなく、みなさんのうちのどちらのおっしゃることがほんとうなのか判定をつけることができない、――そのようなことについての、発見者でもなければ、誰の弟子でもなかったのだから――と言っていますが、あなたのほうはラケス、そしてニキアス、お二人それぞれ、私たちに言ってください。若者たちを育てることに関して、みなさんのおつきになったえらい先生は誰ですか。いや、みなさんは誰かから学んで知っておいでになるのですか。それとも自分で見つけだして知っておいでになるのですか。

187 そしてもし学んでであるとすれば、みなさん各自の先生は誰であるか、言ってください。また、彼らと同じ技を

もつ人として、他にどんな人たちがいるのか言ってください。――もしもあなたがたには、国家の仕事のために暇がないようなばあいに、その人たちのところへ行って、ぜひわれわれの子供たちも、また――あなたがたのお子さんがつまらない人間になって、自分の父祖の名を恥ずかしめることにならないように――あなたがたの子供たちも、面倒みてくださいと、贈り物をするとか礼を言うとか、あるいはその両方をするとかして、たのみこめるように。だがもし、みなさん自身が、そのような技を見つけだした人であってのことであれば、いままで他にどのような人たちの面倒をみて、つまらぬ人間からりっぱでよき人間になさったことがあるのか、その見本を見せてください。といいますのは、もしいまはじめて教育の仕事に手をおつけになろうというのであれば、みなさんがたは、みなさんにとってその危い冒険が、かのカリア人(1)の上で行なわれるのではなく、〔自分の〕息子たちと、B 親しい友人の子供たちとの上で行なわれて、そこで、ちょうどことわざにいう「陶器作りが大甕(おおがめ)からはじまる(2)」ようなことが、みなさんがたに起ることにならないように、用心せねばなりませんからね。それでは、以上のどれがみなさんにあてはまり、どれがあてはまらないか、言ってください。――

こういうことを、リュシマコス、このかたたちを離さずに尋ねてください。

---

1 一種のことわざ的な言い方で、『エウテュデモス』285C にも見られる。小アジアのカリア人は、よく奴隷としてギリシアで用いられたので奴隷の代名詞のようになっていたと解されている。またカリア人は、よく雑兵として傭われ、外人部隊を構成した。そこで、自国の市民から成る軍兵を惜しんで、最前列に彼らを立たせることがあったことからきた表現とも解されている。

2 『ゴルギアス』514E でも、ここと同じ問題が論じられていて、そこにこの表現がひかれ、そこでは「陶器作りを大甕から学ぼうとする」とある。はじめて手がけることがらを、いちばんむずかしいものからとりかかろうとすることの無謀を言ったものであろう。

一二

リュシマコス　みなさん、ソクラテスの言うことは結構なことのように私には思われますが、しかしこのよう
C　なことについて質問され、そして返答するということを、みなさんがおのぞみかどうかは、ニキアスにラケス、お二人のご一存にまかせます。私とこのメレシアスにとりましては、もちろんソクラテスが出した質問の全部に、いちいち答えていただければありがたく思います。話のはじめにも申しましたように、みなさんは何といっても、
D　私たちのとほとんど同じくらいの、これから教育されるべき年頃の子供さんをお持ちになっている以上、とうぜんこのようなことは、すでに考えてしまっておいでになるだろうと思って、みなさんを相談にお呼びしたのですから。したがって、もしみなさんに何もご異存がなければ、いまの点についてみなさんの考えをのべてください。そして互いに言葉のやりとりをしながら、ソクラテスといっしょにしらべてください。またまったく彼の言うとおり、われわれはいま、自分たちのいちばん大切なもののことで協議しているのですからね。ではみなさん、そのようにすべきだとお考えになりますかどうですか。

ニキアス　リュシマコス、あなたはまったくソクラテスを、彼の父親とのつながりで知っておいでになるだけ
E　のようですね。彼自身とは、ひょっとして彼が子供のとき、父親についてお社(やしろ)へなど、区民の集りに来ているおりに、いっしょになったことがあるだけで、成人してからの彼には、どうもまだお会いになったことがないようですね。

リュシマコス　えっ、どうしてですか、ニキアス？

一三

ニキアス　お見うけしますところでは、ごぞんじないようですが、誰でもあまりソクラテスに近づいて話をしていますと、はじめは何か他のことから話し出したとしましても、彼の言葉にずっとひっぱりまわされて、しまいにはかならず話がその人自身のことになり、現在どのような生きかたをしているか、またいままでどのように生きてきたか、を言わせられるはめになるのです。さていったんそうなると、その人の言ったことを何もかもきちんと吟味してしまうまで、ソクラテスは離してくれないでしょう。

188

ところで私は、この人とは前からのなじみであるうえに、この人の手にかかればそういう目に会わねばならないということを知ってもいますし、さらにまた、自分もいまから、そういう目に会うだろうということもよくわかっているのです。こういう言いかたをしますのもつまりリュシマコス、私はこの人とつきあうのが楽しく、われわれの今までにしたことであれ今していることであれ、それがりっぱな仕方でされていない、ということに気づかされることは、すこしも悪いことではないと思うのです。いやむしろ、そうされるのを避けずに、ソロン(1)の言葉にしたがってそれを進んで受けようとし、そして、生きているかぎりは学ぶべきであると考えて、老齢が自分に思慮をもたらしてくれるのではないと思うような人は、そうされることによって、かならず自分の今後の生

B

1　前六世紀始めのアテナイの政治家、詩人。ソロンの元の言葉は「私は、つねに多くのことを教えられつつ年をとってゆくのだ」(Fr. 22 (Diehl))。なお、あとの189 A参照。

活に対して、いままでよりも用心ぶかくなると私は思うのです。したがって、ソクラテスに吟味されることは、私にとっては、慣れないこと(アエーテス)でも、好まないこと(アエーデス)でもないのでして、さっきからも、ソクラテスのいる以上この話は、青年たちのことではなくて、われわれ自身のことになるだろう、ということは、おおよそわかっていたのです。

C それでは、いま申しましたように私のほうは、ソクラテスと、彼のしたいような仕方で話をしても、すこしもかまいませんが、このラケスはどういう考えでいるか、聞いてください。

一四

ラケス 話(議論・言葉)というものにつきましては、ニキアス、私の態度は一つなのですが、もしよければ一つでなく二つだと言ってもよろしい。じっさい私は、話〔を聞くこと〕の好きな人間にも、話〔を聞くこと〕の嫌いな人間にも、見られるでしょうからね。と言いますのは、もし誰かが徳について、あるいは何かの知恵について、人と話をしているのを聞くときに、その人がほんとうに一個の男子であり、彼の話していることに値する人であれば、D 話している人と話されていることが、互いにぴったり調和しているのを見て、ひじょうにうれしいのです。そして、このような人こそ、真に音楽の達人であると思います。リュラなどの遊びの道具ではなく、じつに、自分で自分自身の生活を、言葉(話)と行動(行為)とが協和音をなすように、もっとも美しい音階に調律しているのです。それはまさしくドリア調(1)であって、イオニア調ではない。プリュギア調でもリュディア調でもなく、唯一のギリシアの調(ちょう)である、あの調だと思うのです。このような人が声を出すときには、私は楽しくなり、誰からも

E 〈話の好きな人〉(ピロロゴス)だと思われるのです。——それほど熱心に、その人の言うことを私は受けいれるのです。——ところが、それと逆のことをする人は、よいことを言っているように見える人ほど、私を苦しめ、こんどは〈話の嫌いな人〉(ミソロゴス)に見られるのです。

ところでソクラテスはというと、私は彼の話(言葉)のほうを経験したことはありませんが、さきに行為のほう 189 を経験したようです。そして、行為のほうで私が知った彼は、どんな美しい言葉(話)をどんなに遠慮なく言っても、それにふさわしい人でした。したがって、もしこの言葉のほうもりっぱにできるとすれば、彼こそ私の望みにぴったりの人です。このような人にであれば、よろこんで吟味されましょう。いやがらずに学びたいと思います。私も、ほんの一つだけ付け加えますが、ソロンの言うことに賛成です。つまり、「年をとっていくとともに、多くのことを——ただすぐれた人たちからだけ——教えられ」たいのです。つまり、私がいやいや学ぶことになって、人からのみこみが悪いのかと思われることにならないように、先生自身のほうもすぐれた人であること、というそのことを、ソロンにも認めてもらわねばなりません。しかし、先生が私より若かろうと、まだ有名では B なかろうと、その他どんな事情があろうと、そのようなことは私にはどうでもよいことなのです。

ですからソクラテス、私はあなたに対して、何でもあなたのしたいと思うことに関して私を教えもし吟味もしてくださるように、そしてまた、他方私の知っていることを学んでくださるように、と申し出ることにします。

---

1 『国家』IIIでは、魂の教育と、音楽との関連が論じられているが、音階に関しては(398D sqq.)、種々の音階が検討され、ドリア調は勇敢で忍耐づよい人の声と抑揚を写していると評され、思慮と節度をもった人を写していると評されるプリュギア調とともに、この二つだけが正しい情操を養う調として認められている。

あなたが私と危難をともにし、あなた自身の徳を、(1) まさに人の模範とすべき仕方で、証明してみせたあの日以来、私はあなたに対してそのような気持でいるのですよ。ですから、私たちの年齢のことなどは、すこしも考えに入れずに、あなたの好きなことを言ってください。

一五

C **ソクラテス** これでもう、あなたがたのほうは、いっしょに考えて意見を聞かせてくださるお気持がないなどと言って、私たちが非難するようなことにはならないようですね。

リュシマコス ではこんどは、私たちのほうがとりかからねばなりません、ソクラテス、――あなたを私たちの一員と私は考えるからですが――。それでは、私に代ってこの若者たちのために、われわれがお二人から何を訊くべきであるか、考えてください、そして、このかたがたと問答しながら、意見を聞かせてください。私はもう年のせいで、尋ねようと思ったことも人から聞いたことも、しょっちゅう忘れるし、もし途中で他の話がはいったりすると、はじめのことはろくすっぽ覚えていないというありさまですからね。それではみなさんが、いま

D われわれの問題にしていたことについて、みなさんどうしのあいだで、ひとつひとつ議論をしていってください。私は聞かせていただきましょう。聞いたあとで、このメレシアスといっしょに、みなさんのよいとお考えになったことを実行しましょう。

ソクラテス ニキアスにラケス。リュシマコスとメレシアスのおっしゃるとおりにしましょう。さて、さきほどわれわれのしらべようとしていたこと、つまり、このような教育についてわれわれの就いた先生は誰々である

かとか、われわれは他のどのような人たちを、いままでよりすぐれたものにしたかとか、――このようなことに(E)ついて、われわれ自身を吟味することも、たしかに悪いことではなかったでしょうが、しかし、つぎのようなふうにしらべてみても同じことになると思います。いや、それどころか、おそらくこのほうが、いっそう根本から考えることになるでしょう。

つまり、こういうことです。――もしわれわれが、何であれ或る何かについて、「その何かが、或るもののところに生じるときには、それはそのものを、いままでよりもよきものにする」ということをちょうど知っていて、しかもそのうえ、その何かをそのもののところに生ぜしめることも、われわれにできるとすれば、そのばあい明らかにわれわれはその何か自身を、――その何かについてわれわれは、「どのようにすれば人は、もっともたやすく、もっともりっぱにその何かを獲得することになるだろうか」ということの助言者に、そのばあいなることでしょうが、――すくなくともその何かそれ自身を、知っているはずです。

ところで、おそらく私が何を言っているのかおわかりにならないでしょうが、こう言えば、もっとおわかりに(190)なりやすいでしょう。「視力が目に生じるときには、それは目を、いままでよりもよきものにする」ということを、もしわれわれがちょうど知っていて、しかもそのうえ、視力を目に生ぜしめることも、われわれにできるとすれば、そのばあい明らかにわれわれは視力自身を――視力についてわれわれは、「どのようにすれば人は、視力をもっともたやすく、もっともりっぱに獲得することになるだろうか」ということの助言者に、そのばあいなること

1　184C注1参照。

でしょうが、——すくなくとも視力自身がいったい何であるかを、知っているはずです。つまり、もし「視力とは、そもそも何か。聴力とは、そもそも何か」ということ自体さえも、われわれが知らないとすれば、目や耳の
B 医者として、「どのようにすれば人は、もっともみごとに聴力や視力を獲得することになるだろうか」ということについて、言うに価するほどの助言者になることなど、とうていできないでしょうからね。

ラケス　あなたの言うとおりです、ソクラテス。

一六

ソクラテス　ところでラケス、いまのばあいも、このお二人は、「どのようにすれば、徳が息子(むすこ)さんたちの魂に生じて、魂をまえよりよきものにすることになるだろうか」ということの相談に、われわれをお呼びになっているのではありませんか。

ラケス　たしかに。

ソクラテス　それでは、「徳とはいったい何であるか」を知っていることが、まずわれわれにとって必要なのではありませんか。もし、徳とはいったい何であるか、ということさえも、われわれがぜんぜん知らないような
C ばあいには、それをもっともみごとに獲得する方法について、およそ人の助言者になることなど、どうしてできるでしょうか。

ラケス　それはけっしてできないと思います。ソクラテス。

ソクラテス　そうしますとラケス、われわれは、それが何であるかをわれわれが知っていると、認めているわ

けです。

ラケス　たしかにわれわれは認めています。

ソクラテス　ところで、われわれは、すくなくとも自分の知っているものなら、また、それが何であるかを言うこともできるでしょう。

ラケス　もちろんそうです。

ソクラテス　さてそれでは、いいですか、われわれは、すぐさま徳の全体についてしらべるのではなくて――そうするとかなり大仕事になるでしょうからね――、まず或る一部分について、われわれがそれを十分に知って

D

いるかどうか、見てみることにしましょう。そのようにしたほうが、おそらくわれわれは、らくにしらべられるでしょう。

ラケス　よろしいとも、ソクラテス、あなたのしようと思うようにしましょう。

ソクラテス　それでは、徳のどの部分を選んだものでしょうか。いや、もちろん、重武装術が関係していると思われるもの、ということになるでしょうか。ところでそれは、大多数の人からみて、〈勇気〉に関係していると思われることでしょう。違うでしょうか。

ラケス　まったくそう思われます。

ソクラテス　では、ラケス、「勇気とはいったい何であるか」をまず言ってみることにしましょう。それから

E

そのあとで、「どのようにすれば、それが青年たちのところに、およそいつも従事することがらや学びごとによって生じることの可能なかぎり、生じるであろうか」ということも、われわれはしらべることになるでしょう。で

は、私のいま言っている「勇気とは何であるか」ということを、言ってみてください。

一七

ラケス　ゼウスに誓って、ソクラテス、そんなことを言うのはわけのないことです。つまり、もし誰かが戦列にふみとどまって敵を防ぎ、逃げようとしないとすると、よろしいか、その人は勇気のある人である、ということになるでしょう。

ソクラテス　あなたのおっしゃることは、ラケス、たしかにそれで正しいのです。しかし、はっきり言わなかった私のせいでしょうが、あなたのお答は、私がいま質問しようと考えたことの答には、なっていないのです。

ラケス　それはどういう意味ですか、ソクラテス？

191

ソクラテス　うまく言えますかどうか、とにかく説明しましょう。さて、あなたのおっしゃるように、戦列にふみとどまって敵と戦う人も、おそらく勇気のある人でしょう。

ラケス　とにかく、私は、そう主張します。

ソクラテス　私もそう思います。しかし、それでは、ふみとどまって、ではなくて、逃げながら、敵と戦う人のばあいは、どうですか。

ラケス　逃げながらというのはどういう意味ですか。

ソクラテス　それはつまり、こういう意味です。たとえば、スキュタイ人(1)たちは、敵を追って戦うと同様に、逃げながらも戦うという話ですし、また、ホメロスはどこかで、アイネイアス(2)の馬たちをほめて、それらが「あ

B　なたへこなたへ、いとすみやかに、追いまた逃ぐ[3]」ることを心得ていると言っていました。さらに当のアイネイアスをも、逃げのわざを心得ているということでほめたたえて、彼は「逃げを図（はか）る者[4]」であると言いました。

ラケス　それはそれでよいのです、ソクラテス。ホメロスは、戦車のことを言っていたのですから。また、あなたがスキュタイ人たちのこととして言っているのは、騎兵のことなのです。つまり、騎兵はそういう戦い方をするものであり、これに対し重甲兵は、私の言うような戦い方をするのです。

C　**ソクラテス**　たぶん、ラケダイモン（スパルタ）の重甲兵は別としましてね、ラケス。ラケダイモン軍は、プラタイアイ[5]でペルシアの楯兵とぶつかったとき、ふみとどまって彼らと戦おうとせずに、逃走し、ペルシア軍の戦

1　当時、現在の南ロシア地方を中心に狩猟生活をしていた騎馬民族。

2　『イリアス』では、トロイアの王族で、ヘクトルとならぶトロイア側の指導者とされている。後世彼についてトロイ陥落後の遍歴譚が生じ、のちに、ローマ人は彼の子孫と称するようになり、ウェルギリウスが彼を主人公とする叙事詩『アイネイス』を書くことになる。

3　『イリアス』第五巻二二三行および第八巻一〇七行。なお、この馬とは、戦場でアイネイアスの乗る戦車をひく二頭の馬である。

4　『イリアス』第五巻二七二行および第八巻一〇八行参照。ホメロスの原文では、この語は、敵軍の中に「逃走をひきおこすもの」の意味で、それをプラトンはここで、いわば逆の意味にもじっている。しかもホメロス原文では、それはアイネイアス自身ではなく、これもやはり、アイネイアスの馬のことをのべた言葉である。原詩句中でのこの語の語尾を少し変え、ここでプラトンの用いている語形に変えると、馬でなくアイネイアスにかかる意味になるから、プラトンが『イリアス』の異本に拠ったのでないかぎりは、これも彼のもじりであるとすることができよう。

5　前四七九年、南ボイオティアのプラタイアイで、ギリシア軍はペルシア軍にたいし、最終的な勝利をおさめた（ヘロドトス『歴史』第九巻参照）。ただヘロドトスは、ここでのべられているような戦闘状況を、この戦ではなくて、第七巻（二一〇以下）のテルモピュライ戦の記述のところでのべている。

列が乱れるやいなや、騎兵のやるように向きなおって戦い、こうしてかの地での戦いに勝利をおさめたということですからね。

ラケス　それはあなたの言うとおりです。

一八

ソクラテス　さて、あなたの答え方がまちがったのは、私のせいで、私の質問の仕方が悪かったからだ、とさっき言いましたのは、そういうことなのです。つまり、私のあなたにお訊きしたいと思ったのは、重甲戦においD
て勇敢な人たちだけでなく、騎馬戦その他あらゆる種類の戦いにおいて勇敢な人々、また、戦いだけでなく、海難において勇敢である人々、さらには、病いに対して、貧乏に対して、あるいはまた政治上の事件に対して、勇敢なすべての人々、さらにはまた、苦痛や恐怖に対して勇敢な人々だけでなく、欲望や快楽に対してりっぱに戦うことのできる人々——ふみとどまるにせよ、あとで向きなおるにせよ、——それらの人々も含めてのことなのです。このようなことにも、勇敢な人々が、いるでしょうからね、ラケス。E

ラケス　そうですとも、ソクラテス。

ソクラテス　ところで、この人たちはみな、勇敢ではあるのですが、それぞれ、或る人々は快楽に、他の人々は苦痛に、また或る人々は欲望に、他の人々は恐怖に関して勇気をもっているのです。他方では、同じそれらのことに関して、臆病をもっている人々があるのだと思います。

ラケス　まったくそうです。

ソクラテス　そのときもっている、その勇気と臆病とは、それぞれいったい何なのでしょうか。それを私は尋ねていたのです。それではもう一度、これらのすべてのばあいにおいて、同じものとして存在するその〈勇気〉とは何であるか、をまず言ってみてください。それとも、私の言う意味が、まだよくおわかりになりませんか。

ラケス　どうもよくはね。

一九

192

ソクラテス　いや、こういう意味なのです。たとえば、〈迅速〉とはいったい何であるか、と私が尋ねたとしましょう。この〈迅速〉ということは、われわれにとって、走ることにも、キタラ(1)を弾くことにも、しゃべることにも、理解することにも、またその他たくさんのことに、まさしく存在するものであって、およそわれわれは、言うに価するかぎりのことがらのなかに——手、足、口と声、頭脳、のいずれであれ、それらのもろもろのはたらきのなかに——それをもっているでしょう。あなたもそう主張なさいませんか。

ラケス　そうしますとも。

ソクラテス　さてもし誰かが私に、「ソクラテス、それらすべてのことがらにおいて、君が〈速さ〉と呼んでいるものは、何であると言うのかね」と尋ねたとすれば、「短い時間に多くのことをしあげる能力を、私は〈速さ〉と呼ぶのだ——話すことでも、走ることでも、その他何に関することでも」と彼に答えることでしょう。

B

1　リュラとならんで、ギリシアのもっとも普通の絃楽器。木製の胴に通常七本の絃が張られていて、はじいて音を出す。

ラケス　正しいことを、あなたは言っていることになります。

ソクラテス　それでは、ラケス、いまの流儀であなたも、〈勇気〉を言ってみてください。快楽苦痛その他さきにあげたあらゆるところに、同じものとしてあるそれは、そもそもどのような能力であって、それで〈勇気〉と呼ばれているのですか。

C

ラケス　では、私には、それは魂の一種の忍耐づよさであるように思われます。とにかくあらゆるばあいを通じてある本性を、もし言わねばならないとすれば。

ソクラテス　もちろん、言わねばなりませんよ、とにかくわれわれが、われわれ自身のために、その問に答えようとするのであればですね。さて、私にはこう思われるのです。あなたは、私の思いますところでは、忍耐心の全部が全部、〈勇気〉であるとはお考えになっていないでしょう。そう言いますわけはこういうことです。つまり、ラケス、あなたはきっと、〈勇気〉をひじょうに美しい(りっぱな)ものの一つであるとお考えになっているだろう、と思うのです。

ラケス　そうですとも、もっとも美しい(りっぱな)ものの一つであると考えます。

ソクラテス　それでは、「思慮をともなった忍耐心」は、美しくよきものではありませんか。

ラケス　まったくそうです。

D

ソクラテス　では、「無思慮をともなった忍耐心」はどうですか。さきのものとは反対に、有害で悪をなすものではありませんか。

ラケス　そうです。

ソクラテス　それでは、そのような性質のものをあなたは、悪をなし有害なものであるのに、何か美しいものであるとおっしゃるでしょうか。

ラケス　いいえ、それは正しくはないでしょう、ソクラテス。

ソクラテス　そうしますと、すくなくともそのような忍耐心を、〈勇気〉であるとはお認めにならないでしょう。それは美しくないのに、勇気のほうは美しいものなのですから。

ラケス　あなたの言うとおりです。

ソクラテス　では、あなたの主張によれば、思慮ある忍耐心が勇気である、ということになるでしょう。

ラケス　そのようです。

二〇

E

ソクラテス　それでは、何に関して思慮ある忍耐心が、それであるか、見てみましょう。それとも、大小あらゆることに関してのそれでしょうか。たとえば、金を出せば、もっと多くの金を手にいれることになると知っているので、辛抱して、思慮深く出費しているような人があるとき、あなたはその人を、勇気のある人とお呼びになるでしょうか。

ラケス　ゼウスに誓って、私はそうは呼びません。

ソクラテス　では、たとえばまた、ここに一人の医者がいて、息子(むすこ)か他の誰かが肺炎にかかり、飲んだり食べたりする物をほしがっているとき、それに負けずに耐えているばあいは？

ラケス　どうしてどうして、それも勇気ではありません。

ソクラテス　では、戦いにおいて、辛抱づよく戦おうとしている人が、他の人々が自分を助けに来るとか、自分の側より人数が少なく劣っている敵と戦うのであるとか、さらにはまた、こちらのほうが地の利を得ているとかいうことを知っていて、思慮深くそれを考えに入れているようなばあい、——そのような思慮や準備をして辛抱づよいこの人のほうが、勇気があるとあなたはおっしゃるのでしょうか。それとも反対の陣営にあって、動じることなく辛抱しようとしている人のほうでしょうか。

B

ラケス　私の考えでは、反対の陣にある人のほうです、ソクラテス。

ソクラテス　だがしかし、その人の忍耐心は、もういっぽうの人よりも、無思慮ではあるのです。

ラケス　あなたの言うとおりです。

ソクラテス　そうしますとまた、騎馬戦のときに、馬術の心得をもっていて我慢づよい人は、心得をもたずにそうする人よりも勇敢ではない、とおっしゃることでしょう。

ラケス　そう思います。

C

ソクラテス　また、石弓術、弓術、その他何かの術をもっていて、我慢づよい人のばあいも、そうでしょう。

ラケス　まったくそうです。

ソクラテス　また、およそ、井戸へおりていってとびこみ、上手ではないのにその仕事[1]を、あるいは何か他にその種の仕事を、我慢してしようとするかぎりの人たちも、それの上手な人たちよりも勇気がある、とおっしゃることでしょう。

ラケス　といって、それ以外に人は何と言えるでしょうか、ソクラテス。
ソクラテス　それ以外に何とも言えませんよ、すくなくともそう考えているとすればね。
ラケス　ところがじっさいに私はそう考えているのです。
ソクラテス　ところでまた、ラケス、そのような人たちは、技をもっていてそれを行なう人たちよりも、すくなくとも無思慮に危険をおかし、我慢をしていることになるでしょう。
ラケス　そう思われます。
D
ソクラテス　ところで、さきほどわれわれに明らかになったところでは、無思慮な冒険や忍耐は、醜く有害なのではありませんか。
ラケス　まったくそうです。
ソクラテス　他方、勇気はというと、何か美しいものであると、すでに同意されています。
ラケス　そうでした。
ソクラテス　ところがいまや、さらにまた、あの醜いもの、つまり、無思慮な忍耐が、勇気であるとわれわれは言っているのです。
ラケス　そのようです。

1　ここで井戸と訳した語は、貯水池とも解しうる。いずれにせよ、もぐって底をさらえたり、落ちたものを拾ったりする仕事である。『プロタゴラス』350Aにも、勇気に関してここと同様の議論があり、やはりこの例がもちだされている。

ソクラテス　それでは、あなたには、われわれの議論は、うまくいったように思えますか。

ラケス　ゼウスに誓って、ソクラテス、私にはそうは思えません。

二一

E

ソクラテス　そうしますと、あなたのお話でいうと[1]、私もあなたも、ドリア調に調律されていないということになるでしょう、ラケス。われわれにとって、行動が言葉と、協和音をなさないのですから。行動のほうでは、われわれが勇気を与り（あずか）持っている、と誰かがおそらく言ってくれるかもしれませんが、言葉のほうでは私の思うに、いまわれわれ二人のした議論を聞いたばあいに、そうは言ってくれないでしょう。

ラケス　まったくあなたの言うとおりです。

ソクラテス　それではどうですか。われわれがこのような状態でいるのが、りっぱなことだと思えますか。

ラケス　いや、けっして。

ソクラテス　それではどうです、いまわれわれの論じていることに、すくなくともそれだけ（それの言っていることだけ）は、従おうではありませんか。

ラケス　いったい、どのようなことだけは、そしてどんな議論に、従おうというのですか。

194

ソクラテス　辛抱づよくあれ、と命じているいまの議論に、ですよ。したがって、もしお望みならば、われわれもまた、辛抱づよくこの探究をつづけましょう。そうすればまた、もしひょっとしてその忍耐こそ勇気であったばあいに、私たちが勇気を探究するにあたって勇気がないということで、勇気自身に笑われないですむでしょ

う。

ラケス　私は、中途で、はや、やめたりはしないつもりです、ソクラテス。もっとも、このような議論に不慣れではありますがね。だがしかし、いま言われたようなことに対しては、負けるものかというような気持が私をとらえているのです。こんなふうに自分の考えていることが言えないとは、ほんとうにいらいらします。勇気について、それが何であるかということを、私は、たしかに考えてはいるように、自分には思えるのですが、ところがさきほどは、どうしたわけか逃げられてしまい、それで、言葉でそれをとらえて、それが何であるかを言うことができなかったのです。

ソクラテス　ではラケス、すぐれた猟師たるものは、逃がしておかずに追いかけてゆかねばなりません。

ラケス　まったくそうです。

ソクラテス　それでは、どうですか、われわれは、このニキアスも狩りの仲間に呼んだものでしょうか。何かわれわれよりも、うまい方法を心得ているかもしれませんからね。

ラケス　もちろんそうしたらと思います。

二三

ソクラテス　さあ、それではニキアス、仲間の者たちが、議論のさなかであらしにあって行きなやんでいるの

1　188D参照。

ですから、もし何か力をおもちであれば、助けにきてください。つまり、われわれのほうは、ごらんのとおりの行きづまり状態なのですが、あなたは、何が勇気であると考えるかを言うことによって、われわれをこの行きづまりから救いだすとともに、あなた自身も、自分の考えていることを、言葉によって確かなものにしてください。

ニキアス　さて、あなたがたの勇気の定義の仕方がうまくないとは、ソクラテス、さっきからずっと思っていたのです。それは、以前に私があなたの口から聞いたことのあるみごとな主張を、いまあなたが用いていないからです。

ソクラテス　いったいそれはどういうものですか、ニキアス。

D

ニキアス　たびたび私が聞いた、あなたの言っていたこととは、われわれは各人それぞれ、自分の知っていることがらに関しては、よき(1)(すぐれた)人であり、他方、自分の無知であることがらに関しては、悪しき(劣った)人である、ということです。

ソクラテス　ゼウスに誓って、たしかにあなたのおっしゃるとおりですよ、ニキアス。

ニキアス　そうすると、もし勇者がよき(すぐれた)人であるとすれば、あきらかにその人は知者なのです。

ソクラテス　お聞きになりましたか、ラケス?

ラケス　聞きましたとも、しかし何を言っているのか、どうもよくはわかりません。

ソクラテス　しかし私はわかるようです、そして私には、このかたは勇気を、何らかの知であるとおっしゃっているように思われます。

ラケス　いったいどんな知であるというのですか、ソクラテス。

E

ソクラテス　それではそれを、このかたにお尋ねになるのではありませんか。

ラケス　そうです。

ソクラテス　それではさあ、ニキアス、あなたの主張によれば、どのような知が勇気であるということになるのか、このかたに言ってあげてください。すくなくとも笛を吹く知識がそれではないでしょうからね。

ニキアス　とんでもない。

ソクラテス　もちろん、キタラを弾く知識でもないでしょう。

ニキアス　違いますとも。

ソクラテス　ではいったい、それはどんな知識で、何についての知識ですか。

ラケス　まことにあなたの質問は当をえていますよ、ソクラテス。勇気がどんな知識であるというのか、ぜひこの人に言ってもらいたいものです。

195

ニキアス　この知識であると私は言うのです、ラケス。つまり、戦争のばあいにも、他のすべてのばあいにも、「恐ろしいものと恐ろしくないものとの知識」であると。

ラケス　何というばかげたことを言っているのでしょう、ソクラテス。

ソクラテス　どういうことを考えて、あなたはそんなことをおっしゃったのですか、ラケス。

ラケス　どういうことを、ですって？　知は勇気とは、別々のものにきまっていますから。

1　184E注2参照。

ソクラテス　ところがニキアスは、そうはおっしゃらないのです。

ラケス　ゼウスに誓ってたしかにそうです。じっさいそういうくだらないことをしゃべっているのですよ。

ソクラテス　それではわれわれは、悪口を言っていないで、彼に教えてあげることにしましょう。

ニキアス　いや、そういうことではなくて、じつはソクラテス、私の思いますには、ラケスは、私もまた何の意味もないことを言っているということが、明らかになるようにと、願っているのです。彼自身も、さきほど、

B

何かそのようなものであることが、明らかになったものですから。

二三

ラケス　そうですとも、ニキアス。しかも、明らかにしてみようと思っているのです。じじつ、何の意味もないことを、あなたは言っているのですから。といいますのは、たとえば病気のことであれば、恐ろしいものを知っているのは医者ではありませんか。それともあなたには、勇気のある人々が、知っているように思えるのですか。それともあなたは、医者を勇者と呼ぶのですか。

ニキアス　けっしてそんなことはしません。

ラケス　では、農夫たちもそうではないと思います。もっとも、農業のことで恐ろしいものは、彼らが知っているにきまっているし、他のどんな技術者たちにしても、自分の技術のことで恐ろしいものと恐ろしくないもの

C

とは、知っているのです。しかし、それだからといって、すこしでも彼らが勇者になるわけではありません。

ソクラテス　ラケスは何をおっしゃっているようにお思いですか、ニキアス。たしかに何か（意味のあること、

一理あること)をおっしゃっているようですが。

ニキアス　じっさい何かを言ってはいるのですが、しかし真実は言っていないのです。

ソクラテス　いったいどうしてですか。

ニキアス　なぜなら、この人は、医者というものは、健康によいもの悪いものが、どのようなものかを言うことよりも、何かそれ以上のことを病人に関して知っている、と考えているからです。しかし彼らは、たしかに、ただそれだけのことしか知らないのです。他方、もし或る人にとって、健康であるほうが病気をしているよりも、むしろ恐ろしいことであるようなばあい、そのことを医者が知っているとあなたは思いますか、ラケス。それとも、病いの床から起きあがるよりも起きあがらないほうが、ずっとよいような人たちが、おおぜいいるとあなたは思いませんか。つまりつぎのことを言ってください。――あなたは、すべての人々にとって、生きているほうがよいのだと主張するのですか。そして、死んでしまっているほうがよいような人が、おおぜいいるとは思わないのですか。

D

ラケス　たしかにそうは思いますよ。

ニキアス　では、死んでいるほうがよい人たちと、生きているほうがよい人たちとでは、恐ろしいものが同じだと思いますか。

ラケス　思いません。

ニキアス　ところで、これを見わけることが、あなたは、私が勇者と呼ぶ「恐ろしいものと、恐ろしくないものとの知者」以外の、医者その他の技術家にできると考えるのですか。

E

ソクラテス　ラケス、このかたが何をおっしゃろうとするのか、よくおわかりですか。

ラケス　わかりますとも、すくなくとも、彼が占い師たちを勇者と呼んでいるということはね。といいますのは、誰にとって生きているほうがよいか、死んでいるほうがよいか、というようなことを、他の誰が知っているでしょうか。もっとも、あなた自身はニキアス、自分を占い師であると認めるのですか[1]、それとも、占い師でも勇者でもないと認めるのですか。

ニキアス　何ですって？「恐ろしいものと恐ろしくないもの」を見わけることが、こんどはさらに、占い師のすることであるとあなたは思うのですか。

ラケス　そうですとも。なぜなら、他の誰にできることでしょうか。

二四

ニキアス　それはあなた、はるかにずっと、私のいま言っている人に、できることですよ。といいますのは、占い師というものには、これから誰かが死ぬとか、病気になるとか、財産をなくすとか、あるいは戦争その他の勝負で勝つとか負けるとか、およそ未来の出来ごとの前兆だけがわかるべきであるのです。しかし、誰かが、それらの出来ごとの中のどれに会うほうがよいか、会わないほうがよいか、を判定することは、どれだけ他の誰かより以上に、占い師にできることでしょうか。

196

ラケス　いやもう私には、この人が何を言おうとしているのか、わかりませんよ、ソクラテス。彼は、彼の言う勇者を、占い師とも医者とも、また他の何者とも明らかにしないのですから。もしそれを何か神さまだとでも

B 言っているのなら別ですが。そこで、私の見るところでは、ニキアスは、自分が何の意味もないことを言っているということを、いさぎよく認めようとしないで、そのかわりに、自分の行きづまりを隠そうと、右へ左へと身をかわしているのです。もっとも、われわれにしても、われわれ自身と前後で矛盾した議論をしているように思われないようにしたく思えば、さきほど私とあなたとは、そんなふうに身をかわすことができたことでしょう。たしかに、われわれが法廷で議論をしているのであれば、そのようなことをするのも何か説明がつくでしょうが、しかしいまのばあい、誰かがこのような集りにおいて、空虚な議論によって、むなしく自分で自分を飾りたてる、どんな理由があるでしょうか。

C **ソクラテス** 私にも、どんな理由もあるように思えませんよ、ラケス。だがしかし、ニキアスは、単なる議論のために、それをおっしゃっているのではなくて、何か意味のあることを言っているおつもりではないでしょうか。そのことを見てみましょう。それでは、このかたから、いったい何を考えておいでになるのか、もっとはっきり尋ねてみることにしましょう。そして、何か意味のあることを言っておいでになるということが明らかであれば、われわれは同意することになるでしょうし、そうでなければ、われわれは教えてあげることになるでしょう。

ラケス では、あなたが、ソクラテス、もし質問をつづけたいと思うのであれば、質問をつづけてください。私は、もうじゅうぶん尋ねてしまったようです。

---

1 ニキアスと占い師との関連については、あとの199A注1参照。

ソクラテス　むろん、私はすこしもかまいませんよ、これからの質問は、私とあなたとの名において行なわれる共同のものになるのですから。

ラケス　まったくそうです。

二五

ソクラテス　それではニキアス、私に、というよりむしろ、われわれに、言ってください――私とラケスとは
D
共同で話をしているのですから――。〈勇気〉とは、「恐ろしいものと恐ろしくないものとの知識」であると、あなたは主張するのですね。

ニキアス　そうですとも。

ソクラテス　ところで、医者にしても、占い師にしても、他ならぬこの知識をさらに得る(1)のでなければ、そのことがわからず、したがってまた、勇敢ではないことになるとすると、それは、どんな人にでもわかるというものではないわけです。そのようにおっしゃろうとしていたのではありませんか。

ニキアス　たしかにそうです。

ソクラテス　そうしますと、ことわざどおりほんとうに「どんな猪(いのしし)にもわかっ(2)」て、勇敢になることができるというわけにはゆかないでしょう。

ニキアス　そう思います。

E
ソクラテス　するとニキアス、あきらかにあなたのお考えでは、クロンミュオン(3)の猪も、勇敢ではなかったの

です。私は、ふざけてこんなことを言っているのではありません。さっきのような主張をする人は、どんな獣にも勇気を認めないようなことになるか、——あるいは、獣のなかにはずいぶん賢いものがいるということに同意して、その結果、わかりにくいので人間でもわずかの人しか知らないようなことを、ライオンや豹(ひょう)や猪の一種が知っている、と主張することになるか——どちらかにならざるをえないと思うのです。まさにあなたの勇気であるとするものを勇気とする人は、ライオンでも鹿でも牛でも猿でも、勇気に関しては生れつき同等である、と主張することにならざるをえないのです。

197

ラケス 神々に誓ってそうです、あなたの言うとおりです、ソクラテス。それでは、ニキアス、つぎのことをほんとうにわれわれに答えてください。われわれすべてが勇敢であると認めている、あの獣たちが、われわれより賢いとあなたは主張するのですか、それとも、すべての人々に反対して、それらの獣たちを勇敢ともあえて呼ぼうとしないのですか。

ニキアス いささかもこの私は、ラケス、獣であれ他の何であれ、無知であるゆえに、恐ろしいものを恐れないもののことを、勇気のあるものとは言わず、恐れ知らずの愚かなもの、と呼ぶのですからね。それともあなたは、無知のために何も恐れない小さな子供たちをも、みんな、勇気のある者と私が呼ぶと思うのですか。いや、

B

私の思うに、恐れを知らないことと、勇気のあることとは、同じではありません。この私は、勇気と先慮には、

1 それぞれ自分の専門の知識の他に、そのうえに、の意味。
2 どんな無知な動物にもわかるようなことだという意味で、「野豚(猪)にも犬にもわかるだろう」という表現がされていた、と考えられている。
3 コリントスの近くの地名。この猪は、その地域を荒らしていて、英雄テセウスに退治されたという。

ひじょうにわずかな人しか与っていず、他方、大胆、向こうみず、先慮のない恐れ知らず、のほうには、男でも女でも子供でも獣でも、ずいぶんたくさんのものが与っていると思います。したがってあなたが、また大多数の
C
人々が、勇気のあるものと呼ぶものを、私は、大胆なものと呼び、私の言っているような、思慮あるものを、勇気のあるものと呼ぶのです。

二六

ラケス 見てください、ソクラテス、どんなにうまくこの人が——彼のつもりでは——自分自身を議論によって飾りたてているかを。他方、勇気のある人であると、すべての人々がひとしく認めている人たちから、その栄誉を奪いとろうとしているのです。

ニキアス いや、ラケス、あなたにはそのようなことをしませんから、安心していてください。あなたと、それから、ラマコス(1)とは、勇気があるかぎり、賢い人だと認めますから。他のおおぜいのアテナイの人々にも、そうしますよ。

ラケス それには、お返しする言葉はありますが、何も言わないでおきましょう。私が、まったくのアイクソネ区人(2)だと、あなたに言われないようにね。
D
ソクラテス それでは言わないでください、ラケス。それに、お見うけしますところあなたは、このかたがそのような知恵を、あのわれわれのなじみのダモン(3)から、得ておいでになるということを、感づいてもいらっしゃらないようですから。ところで、そのダモンは、プロディコス(4)にずいぶん就いているのですが、このプロディコ

スこそ、ソフィストたちの中で、もっともみごとに、この種の呼び名を区別している人のように思われます。

ラケス　なるほど、ソクラテス、じっさいそのようなしゃれたことをするのは、国家からその指導者たるべき者とされるような人物よりも、ずっとソフィストにふさわしいことですからね。

E

ソクラテス　そうですとも、たしかに、あなたのおっしゃるとおり、最大のことがら(国事)を指導する人々には、最大の思慮を与り持っていることがふさわしいでしょう。だが、いったいどんなことを考えて、勇気という呼び名をそのような意味のものと定めるのか、私にはニキアスは、しらべてみる値打ちのある人のように思えるのです。

ラケス　それでは、自分でしらべてください、ソクラテス。

ソクラテス　ええよろしい、そうしましょう。だがしかし、私がこれから、あなたを、共同で議論をすることから解放するのだと考えないでください。そうではなくて、言われることに、心を向けて、いっしょにしらべてください。

1　アテナイの将軍。ニキアスとは対照的に、好戦的な軍人で、機敏な活動を行なう有能な戦術家であった。後にニキアスと同じくシケリア遠征の司令官となり、彼に先だって戦死した(前四一四年)。トゥキュディデス『歴史』第四—六巻参照。

2　ラケスの出身区。アテナイの南方にあたる。ここの人は口ぎたないということになっていたとみえる。

3　この人物のことは180Dで、すでにラケスにも紹介されていた。その箇所の注参照。

4　ケオス島出身のソフィスト。彼のこのような特色については、『カルミデス』163Dの他に、『メノン』75E、『エウテュデモス』277Eにも言及され、また『プロタゴラス』337A～B, 358D～Eでは、彼自身がじっさいに、そのような用語の区別を行なっているさまが描かれている。

ラケス　それでは、そういうことにしましょう、もしそうせねばならないように思えるのなら。

二七

198

ソクラテス　もちろんそうせねばならないように思えます。ではあなたは、ニキアス、もういちどはじめから、われわれに言ってください。われわれは議論のはじめに[1]、〈勇気〉というものを、徳の一部分として考察するという仕方で、考察していたのをごぞんじですか。

ニキアス　まったくそうでした。

ソクラテス　それでは、あなたもさっき、それを徳の一部分として、つまり、他にも諸部分があり、それらが、全体として〈徳〉と呼ばれているのだと考えて、お答えになったのではありませんか。

ニキアス　そうですとも。

ソクラテス　それではそもそも、ちょうど私が言っているものを、あなたも、それらのもの（徳の諸部分）として、おっしゃっているのでしょうか。私のほうは、勇気の他に、節制や正義や、その他その種のものを、そう呼んでいるのです。あなたもそうではありませんか。

B

ニキアス　まったくそうです。

ソクラテス　さて、そこでですね。そのことでは意見が一致しているわけですが、他方、恐ろしいものと恐ろしくないものとについて、あなたがわれわれとは違ったものをお考えになっていることにならないように、しらべてみましょう。それでは、われわれの考えているものを、あなたに申しましょう。他方あなたのほうは、もし

ご同意にならなければ、〔正しい考えを〕教えてくださるでしょう。さて、われわれは、恐れをもたらすものを、また、恐ろしいものと考え、他方恐れをもたらさないものを、恐ろしくないものと考えるのです。ところで、恐れをもたらすのは、悪(わざわい)のうちの、過去のものや現在のものではなくて、予期されるものです。なぜなら、恐れというのは、未来の悪の予期ですから。それとも、あなたにも、そのように思えませんか、ラケス。

C

ラケス まったくそう思えますよ。ソクラテス。

ソクラテス さてわれわれのほうは、ニキアス、お聞きのように、「未来の悪が〈恐ろしいもの〉であり、未来の悪くないもの、あるいは善きものが、〈恐ろしくないもの〉である」と主張するのですが、あなたのほうは、これらについて、そのようにおっしゃいますか、それとも違ったふうにおっしゃいますか。

ニキアス そのように私は言います。

ソクラテス では、それらを知っていることを、〈勇気〉とお呼びになるのですね。

ニキアス まさにそのとおりです。

二八

ソクラテス それではさらに、第三のことがらについて、あなたと私たちと意見が同じかどうか、しらべてみましょう。

1 190C~D参照。

(198)
D

ニキアス　それはいったいどのようなことですか。

ソクラテス　では私が申しましょう。つまり、私とこの人に思えますには、およそ知識のとりあつかうものについては、過去のことと現在のことと未来のこととの、それぞれについて、過去のものがどのように生じたか、現在のものがどのように生じているか、また、まだ生じていないものが、これからどのように生じ、どのようにして、もっともりっぱに生じうるかを、それぞれ別々の知識があって、知っているのではなく、同じ一つの知識があって、それらのいずれをも知っているようです。たとえば、健康のことでは、あらゆる時に関して、ほかでもない医術が、ただ一つあって、現在のことも、過去のことも、また未来のことがどのように生ずるかということも、見はっているのです。また土地から生育するもののことでは、農作術が同様のことをしています。また戦

E

争に関することであれば、きっとあなたがた自身が、ご証言になるでしょうが、将軍術がもっともみごとに、もろもろのことを――とくに未来のことを――配慮するのであって、将軍術は、自分は予言術に仕えるべきではなく、それを支配すべきであると、考えるものです。(1)――戦争のことは、現在のことも、これから起こることも、自分のほうがよく知っているのだから、というので。――そして法律も、占い師が将軍を支配するのでなく将軍が占い師を支配するように定めているのです。こうわれわれは主張しましょうか、ラケス。

199

ラケス　しましょう。

ソクラテス　ではどうですか、ニキアス、同じものについては、未来のものも現在のものもまた過去のものも、同じ知識がとらえる、というわれわれの主張に、あなたは賛成ですか。

ニキアス　賛成です。私にもそのように思えますからね、ソクラテス。

B

ソクラテス それでは、さあ、〈勇気〉も、あなたの主張では、恐ろしいものと恐ろしくないものとの知識なのです、違いますか。

ニキアス そうです。

ソクラテス ところで〈恐ろしいもの〉と〈恐ろしくないもの〉というのは、すでに同意されたところでは、一方は未来の悪、他方は未来の善であったのです。

ニキアス まったくそのとおりです。

ソクラテス さあ、ところが、同じものについては、未来のものであれ、どのようなばあいのものであれ、同じ知識がとりあつかうということでした。

ニキアス そのとおりです。

ソクラテス そうしますと、〈勇気〉とは、単に恐ろしいものと恐ろしくないものとだけの知識ではないのです。

C

なぜなら、それはただ、未来の善悪だけを知るのではなく、他の諸知識と同様に、現在のも過去のも、あらゆるばあいのものを知るのですから。

ニキアス そのようです。

---

1 将軍術を擬人化した表現をしている。ここは、195Eとともに、ニキアスが迷信家であったことへの作者の諷刺とみられる。シケリア遠征軍の総司令官であったニキアスは、占い師の言葉に従って撤退の日を延期したため、アテナイ軍の全滅を招き、彼自身も降伏し処刑されて死んだ。

二九

ソクラテス　そうしますと、ニキアス、あなたはわれわれに、〈勇気〉のおよそ三分の一を答えてくださったのです。われわれは、〈勇気〉の全体が何であるか、を尋ねていたのですがね。そうしていまや、あなたの議論によれば、どうも、勇気とは、単に恐ろしいものと恐ろしくないものとだけの知識ではないようで、むしろ、まずはすべての、そしてすべてのばあいの、善と悪についての知識が、いまあらためてあなたの議論の主張するところ

D では、勇気であることになるでしょう。そんなふうに、こんどは自分の考えを変えようとおっしゃるのではありませんか、それとも、どんなふうに、でしょうか、ニキアス。

ニキアス　そうすべきだと私には思えます、ソクラテス。

ソクラテス　それでは、もし善のすべてを、そしてそれが現在・未来・過去においてどのように生じるかを、ことごとく知り、また悪についても同様に知っている人があるばあいに、そのような人が、徳に関して、何か欠けるところがあるようにあなたには思えますか。このような人が、節制や、正義と敬虔とに関して、欠けるところがあると、あなたはお考えですか。すくなくとも、このような人だけが、神々に関することでも人間に関する

E ことでも——正しく〔彼らと〕交わるすべを心得ているので——恐ろしいものとそうでないものとに十分気を配り、善きものを手にいれることができるわけですが。

ニキアス　あなたは、何か(もっともなこと)を言っているように私には思えます、ソクラテス。

ソクラテス　そうしますと、ニキアス、いまあなたのおっしゃったものは、徳の一部分ではなくて、徳の全体

であるということになるでしょう。

ニキアス　そのようです。

ソクラテス　ところがじつは、われわれは、〈勇気〉を、徳の諸部分の一つである、と主張していたのです。

ニキアス　そうでした。

ソクラテス　ところが、いま言われたものは、そうではないようです。

ニキアス　そのようです。

ソクラテス　そうしますと、ニキアス、われわれは、〈勇気〉が何であるか、ということを、見つけなかったのです。

ニキアス　そのようです。

ラケス　ところが私は、ニキアスさんよ、あなたが見つけるだろうと思っていたのです。私がソクラテスに答えたときに、あなたは私をばかにしましたからね。ダモンから得た知恵で、あなたがそれを見つけだすだろうと、まったく大きな期待をもっていたのですよ。

三〇

ニキアス　けっこうなことですよ、ラケス。あなたは、自分がさきほど勇気について何も知らないことが明らかになったということは、もう何ごとであるとも思わずに、私もまたそのようなものであることが明らかになれば、ということのほうに目を向けているとは。そして、自分を一かどのものであると思っている人にとって知識

B をもっているべきことがらを何ひとつ知らなくても、そのようなことは、私といっしょであれば、あなたにはもはやどうでもよいことになるようですね。こうしてあなたは、まことに人間にありがちなことをしていて、あなた自身のほうでなく他の人々のほうに、目を向けておいでのように私には思えるのですが、私のほうは、われわれの論じていたことがらについて、いまもかなりよく、私によって論じられたと考えていますし、また、もしそこに何か不十分に論じられたことがあれば、のちほどダモンとでも──彼のことをどうもあなたは、あざわらってよいと思っているようだが、しかもまだ一度もダモンに会ったこともないのに──またその他の人々ともいっしょに、正(ただ)したいと思っています。そして、それを確かなものにしたときは、私は、あなたにも教えてあげ、も

C の惜しみしないでしょう。お見うけするところ、あなたはじっさい、大いに学ぶ必要がありそうですからね。

ラケス　それは、あなたは賢いですからね、ニキアス。しかしそれはともかくとして、私は、このリュシマコスとメレシアスに対して、この青年たちの教育については、あなたや私のほうはほうっておいて──はじめにも言っていたことですが──そこにいるソクラテスを離さないように、とおすすめします。私も、もし子供たちが年ごろになっていれば、同じようにそうしたでしょう。

ニキアス　そのことであれば、私も賛成しますよ、もしソクラテスがこの若者たちの面倒をみてくれるという

D のであれば、いっさい他の人をお探しにならないようにとね。もしこの人が引きうけてくれるのであれば、私も、ニケラトス(1)を、誰によりもこの人に、よろこんでたのみたいと思うのですから。ところが、すこしでも彼にそのことを漏らしますと、そのたびに、他の人たちを私に紹介してはくれるのですが、自分では引きうけようとしないのですよ。しかし、リュシマコス、あなたのおっしゃることであれば、ソクラテスは、もうすこしきいてくれ

るでしょうか、しらべてごらんになってください。

リュシマコス　とにかくとうぜんのことですよ、そうしてもらうのは、ニキアス。私のほうでも、他のそうたくさんの人にはする気になれないようなことを、この人にはたくさんしてあげようと思っているのですから。それでは、ソクラテス、どうおっしゃいますか。すこし私の言うことをきいて、できるだけすぐれた人間になろうとしているこの若者たちに、加勢してやってくださいますか。

三一

E **ソクラテス**　それはそうですよ、リュシマコス。人ができるだけすぐれた人間になろうとしているときに、加勢しようとしないのであれば、それこそ恐ろしいことでしょうからね。ところで、私は知っているがこのお二人は知っておいでにならないということが、もしさきほどの議論の中で明らかになったのであれば、とくに私をこの仕事にお呼びになることは、正しいことであったでしょうが、しかし事実はいまや、われわれは、みんな同じように、行きづまりにおちいったのですからね。ですから、人がわれわれの中の誰をとくに選びだすどんな理由があるでしょうか。私自身の見るところでは、誰を選ぶというわけにもゆかないように思えます。しかし、事態

201 がこのようなありさまなので、これから私がみなさんに提案をしますから、何か当をえたところがあるように思

1　ニキアスの息子ニケラトスは、かなり著名な人物となったが、三〇人独裁政権に処刑された。ラケスの息子については、知られていない。

えるかどうか、しらべてください。つまり、みなさん、――どのような話も外に漏れることはないのですから申しますが、――われわれは、みんないっしょになって、なによりまずわれわれ自身のために――われわれは必要としているのですからね――、つぎにはまた、この若者たちのために、金銭も他の何ものも惜しまずに、できるだけすぐれた先生を探さねばならない、と私は申します。他方、われわれ自身を、現在の状態のままにしておかないように、おすすめします。だが、もしも誰かがわれわれのことを、このような年をして先生たちのところへ通うべきだと考えている、と笑ったりしようものなら、ホメロスを持ちだすべきであるように私には思えます。彼は、「窮迫せる人に羞恥心(しゅうち)あるはよろしからず」[1]と言っていたのです。したがってわれわれも、誰かが何か言おうとするならほうっておいて、われわれ自身とこの若者たちとの面倒を、いっしょにみることにしましょう。

リュシマコス 私は、ソクラテス、あなたのおっしゃることを、たいへんけっこうだと思います。そして、いちばん年をとっているだけ、またいちばん熱心に、この若者たちといっしょに学びたいと思います。それでは、あなたは、どうかこうしてください。まさにこの問題について協議するために、明日の朝早くから、私の家へ来てください。ぜひ、そうしてくださいよ。しかし、いまのところは、われわれはこの集りを、終えることにしましょう。

ソクラテス ええ私はそうしましょう、リュシマコス、そして、明日あなたのところへまいりましょう、それが神のおぼしめしであるならば。

B

C

---

1 『オデュッセイア』第一七巻三四七行。

リュシス

——友愛について——

生島幹三訳

登場人物

ソクラテス
ヒッポタレス
クテシッポス
メネクセノス
リュシス

203 アカデメイアから、まっすぐリュケイオン(1)へ行こうと思って、市壁(2)の外側に沿った道を歩いていました。ちょうどパノプスの泉(3)のある小門にさしかかったところで、ヒエロニュモスの子ヒッポタレスとパイアニア区のクテシッポスが、他の青年たちと、集って立っているのに出あいました。私が近づくのを見たヒッポタレスは、

「ソクラテスさん、どこへおいでになるのですか？　どちらから？」と声をかけてきました。

B 「アカデメイアから、まっすぐリュケイオンへ行くところだよ」

「こちらへいらっしゃいませんか。まっすぐぼくたちのほうへ。いいことがありますよ」

「どこへだって？　その君たちというのが、よくわからないが」

「そら、こちらですよ」と彼のさす方を見ると、市壁の向こう側に何か建て物があって、戸が開いていました。

「あそこには、このぼくたちばかりではなくて、他に美しい少年たちが、とてもたくさんいるのですよ」という彼の返事に、

204 「あれはいったいなに？　あそこで何をしているの？」

「体育場(4)ですよ、こんどできた。で、おもに話をして時を過ごしているのですが、その話にぼくたちは、よろこんであなたに加わっていただくでしょう」

「それはありがとう。で、そこで教えているのは誰なの(5)？」

「あなたのお友だちで、あなたのことをほめているミッコスですよ」

B 「それはそれは。なかなかすぐれた男だ、えらいソフィストだよ」

「それでは、いっしょにいらっしゃいますか。そこにいる人たちをごらんになれるのですよ」

「うん、しかしそのまえに、いったい何のために私は行くのか、その美しい子というのが誰のことか、まず聞かせてほしいものだね」

「誰かとおっしゃられても、ぼくたちそれぞれに意見が違いますよ、ソクラテス」

「だが君の考えでは誰なの？ ヒッポタレス。それを言ってほしいね」

そうたずねると彼は赤くなりました。そこで私は言いました。

「さあさあ、ヒエロニュモスの子ヒッポタレス、いまさら好きな子がいるとかいないとか言ってはいけないよ。好きなどころか、もうぞっこん惚れこんでしまっているということが、ちゃんとわかっているのだから。私はね、

C 他のことなら能なしの役たたずだけれども、神様のおかげで、誰かが誰かを愛していれば、どちらのほうもすぐ

---

1 アカデメイアは、アテナイの北西郊外、リュケイオンは東郊外にあった公園で、後年それぞれ、プラトン、アリストテレスの学園の所在地として知られる。どちらも元来神域で、ギュムナシオン(公営の大体育場)があり、そこでよくソクラテスは、青年たちとの交わりを楽しんだ。

2 アテナイの市街地域の周囲にめぐらした城壁。その外は郊外になる。

3 リュケイオンの近くにあった泉。

4 これはパライストラという種類のもので、少年のための小さな体育場。体育教師の個人経営によるものが多かった。

5 体育場の体育教師ではなく(それはあとの207Dに出ている)このような体育場に出入して青少年たちを相手に教授したソフィストをさす。ミッコスについては、ほかには知られていない。

見ぬくという力はさずかっているのだよ」

こう言われて彼はますます赤くなりました。するとクテシッポスが横から、

「これはみごとなものだね、ヒッポタレス、ソクラテスさんに名前を言えないで赤くなっているとは。しかし、このかたがほんのしばらくでも君といっしょにおいでになれば、さんざん君の口から聞かされて、へとへとになっておしまいになるだろう。

D ぼくたちに対してはね、ソクラテスさん、『リュシス』『リュシス』で、われわれの耳をすっかりつんぼにしてしまったのですよ。一杯飲んだりされようものなら、われわれのほうは、〔あくるひ〕目がさめてもまだリュシスの名前が聞こえるような気がする、というぐらいの目には、わけもなくあわされるのです。しかし話を聞かされるのは、恐ろしいといってもまだたいしたことはないのですが、詩や文章に作ったものを浴びせかけようとされるときにはね。また、それ以上に恐ろしいのは、そのパイディカ(1)(愛童)によせた歌を、すばらしい声で歌うのを辛抱して聞かねばならないことです。ところがいまは、あなたにたずねられて赤くなっているのですよ」

E 「ところで、そのリュシスというのは、まだ年のゆかない子らしいね。名前をきいても私の知らないところをみると」

「それは、その子の父親があまりにも有名なので、その息子という呼び方がまだされていて、あまりその本名は言われていないからですよ。その子の容姿のことをあなたがご存じでないはずはありませんから。それだけでも十分、人に知られるような子ですからね」

「いったい誰の息子だというの?」

「アイクソネ区のデモクラテスの一番上の息子です」

そこで私は〔ヒッポタレスに〕言いました。

「そうかい、ヒッポタレス、それはまたどうにも何と景気のよい立派な恋をしでかしたものだね。さあ、それでは、この人たちに見せているものを、私にも見せてくれたまえ。エラステース（恋する人）はパイディカ（愛童）のことを、その当人に向かって、また他の人々に向かって、どのように語るべきかを、君が心得ているかどうか知りたいから」

205

「ではあなたは、この男の言うことに、すこしでもあてにできることがあるとお思いなのですか。ソクラテスさん」

「君がその子を愛しているというのも、うそだと言うのかね」

「いや、そうではありませんが、その子のことを詩や文章に作ったというのはうそですよ」

するとクテシッポスが、

「どうかしていますよ、この男は。気が狂ってうわごとを言っているのです」

1　美しい少年にたいして同性の年長者が恋する風習があり、そのとき恋される少年がパイディカ（愛童）、恋する者がエラステースである。

二

それで私は言いました。

「いやヒッポタレス、君がその少年のことを詩に作ったにしても、私は、その詩や歌の文句(もんく)を一々聞きたいのではない。その趣旨を聞いて、君のその子にたいする態度を知りたいのだ」

「そのことなら、この男がお話するでしょう。彼の言うように、耳がつんぼになるほどいつも私から聞かされたのであれば、はっきりおぼえていて、たしかなところを知っているわけですから」

するとクテシッポスが、

「神々に誓って、まったくそのとおりだよ。

それがまた、こっけいなんですからね、ソクラテスさん。だって、人を恋する者(エラステース)が、他のどんな人たちよりも、その子のことを心にかけていながら、自分一人の気持をあらわす言葉としては、子供でも言えるようなことしか言えないなんて、こっけいでなくて何でしょうか。それで、していることといえば、この国中が歌いはやしているような、その子の父デモクラテスや祖父のリュシスその他一家の祖先のすべての人たちのこと、つまり、その富とか、名馬を持っていることとか、デルポイやイストモスやネメアの大祭[1]で騎馬競走や戦車競走で得た勝利のこととか、そんなことを詩にしたり話したりしているのです。いや、それどころか、もっと時代がかったことまで。といいますのは、『ヘラクレスのもてなし』ということを詩のようなものに作って、おとといとっくりわれわれに聞かせたのです。その家の祖先が、自分もゼウスとその区の祖神の娘との間に生まれた

B C D

子なので、ヘラクレスとは血のつながりがある[2]ということから、ヘラクレスを家に迎えてもてなしたという、まったくおばあさんたちの物語で、その他たくさんこのようなことばかりなんですよ、ソクラテスさん。こういうのが、われわれのむりやり聞かされているこの男の話や歌の内容なのです」

それを聞いて私は言いました、

「それはこっけいだね、ヒッポタレス。まだ勝利をおさめないうちから、自分のために讃歌を作って歌っているのかい」

「いいえソクラテス、自分のためになんて、作りも歌いもしていませんよ」

「それはそう思っているだけなんだよ」

「では、どうだとおっしゃるのですか」

「だれよりもまず、それらの歌は、君に関係しているものなのだよ。つまり、これから君が、そんなパイディ

E

1　古代ギリシア世界全体の祭として四つの大祭があった。それが、四年ごとのオリュンポスのゼウスの大祭(オリュンピア)と、四年ごと(オリュンピアの二年後)のデルポイのアポロンの大祭と、二年ごと(オリュンピアの一年および三年後)のイストモス(コリントス)のポセイドンの大祭と、二年ごとのネメア(北アルゴリス)のゼウスの大祭であった。いずれにおいてもギリシア各地から集った選手による体育その他の競技大会が催された。富裕なリュシスの家では名馬をもっていて、騎馬競走や、四頭立の馬にひかせた戦車の競走に出場したのであろう。

2　ゼウス神とテバイのアルクメネとの間の子ヘラクレスは、ギリシアの神話伝説中、もっとも有名な英雄で、遍歴して十二の難業をやりとげたとされている。ここはリュシスの一家が、一家の居住区の祖神の娘とゼウスとの間に生まれた子を祖先としていて、この祖先が、遍歴中のヘラクレスを、同じくゼウスの子どうしであることから、家に迎えてもてなした、というような話であろう。

カ(愛童)を手に入れることになれば、君の言ったり歌ったりしたものは、君を飾る栄誉となり、いわば優勝者に対するほんとうの讃歌になることだろう。そんなにすばらしいパイディカを射とめたのだから。しかし獲物を逃がしたばあいには、いまそのパイディカの讃歌を君が大げさに歌えば歌うほど、それだけいっそう大きなりっぱなものを君は失ったということになって、もの笑いの種になることだろう。だから君、色恋の道の達人というものは、自分の愛する人を、手に入れる前からほめたりしないものなのだよ。どういう結果になるかが心配だから

206

ね。それにまた、美しい少年たちというものは、人があまりちやほやすると、すっかり思いあがって高慢になってしまうものだよ。そう思わないかね?」

「そう思います」

「それでは、思いあがったものほど、つかまえにくくなるのではないかね」

「たしかに」

「それでは、狩をしているとき、ガサガサ音をさせて獲物を逃がし、つかまえにくくする人がいれば、その人を狩人(かりうど)としてどう思うかね」

B

「もちろん、へたな人です」

「それでは、言葉や歌で、人をうっとりさせないで、あらあらしくさせるとすれば、それはまったく音楽の心得がないということになる。そうではないかね」

「そう思います」

「ではヒッポタレス、君は詩を作って、このような非難をみんな、自分が受けるはめにならないように気をつ

けたまえ。もっとも、詩を作って自分自身に害を与えるような人を、かりにも善き詩人(1)だなどと君は考えまいがね。その人自身にすら有害なのだから」

「ゼウスに誓って、もちろんですとも。そんな理屈に合わないことはありませんからね。ところで、いまおっしゃったようなはめにならないようにと思えばこそ、ソクラテスさん、あなたにうちあけてお話しているわけで、他にも何かご意見をおもちであれば、ぜひ聞かせてくださって、いったいどんな話をし、どんなことをすれば、パイディカに気にいられるようになるのか教えてください」

C

三

そこで私は言いました、

「口で言えといってもむずかしいね。しかしもし君がその子を、私と話をするようにさせてくれるというのなら、この人たちのいう君の話や歌の代わりに、どんなことをその子と話したらよいか、見せてあげられると思う」

D

「いや、それなら何でもないことです。このクテシッポスといっしょに中へ入って、坐って話をしていらっしゃれば、あの子のほうからもやってくるでしょう。——人の話を聞くのがかくべつ好きなのですよ、ソクラテス。それに、あそこではいま、ヘルメス様のお祭(2)がおこなわれているので、青年たちと少年たちとが、まじりあって

1 ギリシア語では〈よき〉ということには、「役にたつ」の意味も「すぐれた」の意味も含まれている。

2 ヘルメスは体育や運動競技の守り神でもあったので、体育場などで、その祭が行なわれた。なお、平生、青年は成人用の大きな体育場ギュムナシオンを用いたので、このような少年用のパライストラへは立ち入らない。

いっしょに過ごしているおりですから。——だからきっとあなたのところへ来ますよ。もしそれがだめであれば、このクテシッポスは、いとこのメネクセノスの縁で、あの子となじみなのです。あの子はメネクセノスとは、ちょうどいちばんの仲よしなものですから。ですから、ひょっとしてあの子のほうから来なければ、この男に呼ばせればよろしいでしょう」

E 「ぜひそうしよう」と私は言って、それと同時にクテシッポスの手をとり、その体育場へ入ってゆきました。他の連中はあとに続いてやってきました。

そこへ入ってみると、子供たちがいけにえのおそなえをすませて、お祭の儀式は、すでにだいたい終わったあとで、どの子もみな美しく着飾って、骨玉(1)遊びをしていました。さて、たいていの子供たちが中庭に出て遊んでいる一方で、何人かは脱衣室の隅にいて、いくつかの小籠から骨玉をどっさりつかみ出しては、その数が奇数か偶数か当てっこしていました。またそれをとりまいて見物している子もいました。その見物の中にリュシスもい

207 たのです。花冠をかぶって、ほかの子供たちや青年たちの中にまじって立っていましたが、容姿はひときわ目だち、いや、美しい少年と言われるだけではなくて、〈美しくよき少年〉(貴公子)と言われるべきものでした。

さて私たちは、彼らとは離れて反対の側へ行って坐りました。——そこが静かだったものですから。——そして話をしはじめました。するとリュシスは、何度もふりむいて私たちの様子をうかがい、あきらかにこちらへ来たがっているのでした。しばらくの間彼は、どうしてよいかわからず、一人だけでやってくるのをためらってい

B ましたが、そこへ、中庭からメネクセノスが、自分の遊びのとちゅうで入ってきて、私とクテシッポスの姿を見つけるや、そばへ坐りにきました。彼を見たリュシスは、あとについてやってきて、メネクセノスとならんで坐

りました。つづいて他の人たちも来ましたが、かのヒッポタレスも、かなりの人数が立ちならぶのを見とどけてから近寄ってきて、その人たちの蔭にかくれ、リュシスの目につく心配がないと思った場所に身を置きました。リュシスに嫌われはしないかと恐れていたのです。このようにして近くに立って、彼は聞き耳を立てるのでした。

C

さて私は、メネクセノスのほうを向いて、
「ねえ、デモポンの子、君たちどちらが年上なの？」とたずねました。
「それでいつもけんかなんですよ」
「では、どちらがよい家柄の生まれかということも争いの種だろうね」
「そうですとも」
「それでは、どちらが美しいかということも、そうだろうね」
すると二人とも笑いました。
「だけど、君たちのどちらがお金持かということは、たずねないことにしよう。君たちは友だちなんだろう」
「そうですとも」と二人の答。

1　羊や山羊などの足の距骨で作った玉。この玉五つを用いて、女や子供たちが、お手玉遊びをしたり、また、すぐあとに出ているような仕方で、手の中に握った玉の数の奇数偶数を当てさせる遊びに用いられたほか、はなれたところから、穴の中や地面に画いた円の中に玉などを投げこむ遊びにも用いられたといわれる。また、骨玉製の一種のさいころがあり、それを四つ用いて、さいころ遊びが行なわれた。

「ところが『友だちのものは共有のもの』[1]といわれているから、このことでは君たちは勝ち負けなしになるわけだ、君たちが、いま答えたように、ほんとうに友だちなら」

二人ともそれに同意しました。

四

D　そこでつぎに、正義や知恵では、彼らのどちらがすぐれているのか、たずねてみようとしていますと、そこへ人が来て、体育の先生が呼んでいるからといってメネクセノスを立たせました。ちょうど彼は、お祭の役をつとめているようでした。こうして彼が行ってしまってから、私はリュシスを相手にたずねました。

「君のお父さんやお母さんは、さぞかし君をかわいがっていらっしゃることだろうね、リュシス」

「はい」

「それでは、君がこのうえもなくしあわせでいてくれるようにと、願っていらっしゃるだろうね」

「それはもう」

E　「ところで、他人の奴隷になり、自分のしたいことを何ひとつできない人があれば、その人を君はしあわせだと思うかね」

「いいえけっして」

「ところで、お父さんやお母さんは、君を愛して、君がしあわせになることを願っていらっしゃるなら、きっと、どのようにしたら君がしあわせになるだろうかと、心をくだいていらっしゃることだろう」

「それはもう」
「では、何でも君のしたいようにさせておいて、君のしたがることは何ひとつ、お叱りになったりお止(と)めになったりすることはないのかね」
「どうしてどうしてソクラテス。私はしょっちゅう止められてばかりです」

208

「何だって？　君のしあわせを願っていらっしゃるのに、君のしたいことをさせてくださらないのかね。それではね、もしお父さんが戦車競走に出られるときに、君がお父さんの車のどれかに乗って、手綱(たづな)をとって走らせようとすれば、お二人は君を止めて、したいようにさせてくださらないのだろうか」
「それはもうぜったいにだめでしょう」
「ではいったい誰にはお許しになるの？」
「馭者というものがいて、お父さんから給料をもらっているのです」
「何だって？　君ではなくて、やとい人に、したいように馬を扱うことをお許しになって、おまけに、他ならぬそのことのために、お金までお払いになるのかね」

B

「そうですとも」
「では荷車をひくらばに指図(さしず)をすることなら、君にお許しになるだろう。君が鞭をとって打ちたいと思えば、お止めになるまい」

1　この表現は『国家』IV. 424A、『パイドロス』279Cなどにもみられる。

「どうしてそんなことを許してくれましょう」
「何だって？　らばに鞭うつことは、誰にも許されていないことなのかね」
「もちろん、らば追いには許されています」
「それは奴隷かね、それとも自由人かね」
「奴隷です」
「それでは息子の君よりも、奴隷のほうをだいじにして、君よりもむしろ彼らに、自分たちのものをおまかせ

c　になり、したいことをさせておきながら、君にはさせてくださらないとみえるね。それではもう一つたずねるが、君が自分で自分に指図をすることはお許しになるかね、それとも、そのことも君にはまかせてくださらないのかね」
「どうしてまかせてくれましょう」
「では誰かが君に指図するのかね」
「ええ、そら、ここにいるパイダゴーゴス(1)がするのです」
「まさか、その人は奴隷ではあるまいね」
「いいえどうして。うちの奴隷です」
「自由人であるものが奴隷に指図されるとは、いやまったく恐ろしいことだ。で、いったいそのパイダゴーゴスは、君に指図するって、どんなことをするの？」
「先生のところへつれて行ってくれるのです」

「まさかその先生たちも、君に指図するのではないだろうね」

D 「いいえ、もちろんなさいますとも」

「それでは、お父さんは君に、じつにたくさんの主人や支配者を、わざわざつけていらっしゃることになる。しかし、とにかく家へ帰ってお母さんのそばへ行くときは、お母さんは、君がしあわせでいてくれるようにと、何でも君のしたいことをさせてくださるだろうね、織っていらっしゃる機(はた)や糸のことでは。つまり君が筬(おさ)や梭(ひ)や、その他何か糸つむぎの道具にさわるのを、けっしてお止(と)めになるまい」

すると彼は笑って、

E 「どうしてどうして、止めるだけではすまないで、さわろうとしたら私はぶたれることでしょう、ソクラテスさん」

「これは驚いた、まさか君はお父さんやお母さんに何か悪いことをしたのではないだろうね」

「もちろんですとも」

五

「それではご両親は、いったいぜんたい何のために、君がしあわせで何でもしたいことをするのを、そんなに

---

1 文字どおりには「子供をつれてゆく者」の意味で、ここにあるように、外出につきそったりして子供の世話をした召使の奴隷。なかにはギリシア語をりっぱにしゃべれないような外国出身の者もあったことは、あとの223Aなどからうかがわれる。

ひどくおさまたげになり、そして、一日中いつも誰かの奴隷になって、要するにほとんど何ひとつ自分のしたいと思うことができないようなありさまにして、君をお育てになるのだろうか。それだと、それほどある財産も君には何の役にもたたず、どんな他人でも君よりはそれを支配していることになるだろうし、また、そんなりっぱな体を持っていても、それさえ他人が監督して世話をするのでは、何にもならないようだね。君のほうは、誰一人として君の支配する者はなく、何ひとつとして君のしたいことができないということになるだろう、リュシス」

209

「それは私がまだ、一人前の年になっていないからです、ソクラテスさん」

「そんなことはべつにさしつかえないだろう、デモクラテスの子よ。お父さんやお母さんにしても、すくなくともこれくらいのことは、君が大人になるのを待たずに、おまかせになると思うね。つまり何か読んだり書いたりしてほしいものがあったときには、家中の誰をさしおいても、君にその用をおいいつけになると思う。そうではないかね?」

B

「そうです」

「そのときには、君は一番目の字も二番目の字も、自分の書きたいと思う字を書くことができるのだ。読むことでも同様のことができるのだ。またおそらく君がリュラを手にするときにも、君が自分の思いどおりの絃をしめたりゆるめたり、指ではじいたりばちで打ったりするのを、お父さんもお母さんもお止めにはなるまい。それとも、お止めになるかね?」

「いいえけっして」

C

「ではリュシス、こんなばあいにはお止めにならず、さっき言っていたようなことでは、お止めになるという

のは、いったいどういう理由からだろうか」

「それは、このことではそうではないからだと思います」

「そうそう、うまい。ではお父さんは、何も君の年を待って万事をまかせようとしていらっしゃるのではなくて、君のほうが自分よりもずっとよく心得ているとお考えになるときには、その日にすぐ、ご自身をも含めてご自分のいっさいのものを、君におまかせになることだろう」

「そう思います」

「それでは、これはどうだ。君のことでは、君のお隣りの人にも、いまのお父さんのばあいと同じ規準があて D はまるのではないだろうか。つまり、その人よりも君のほうが、その家の家政についてよく心得ているとその人が考えたときに、自分の家をおさめることを、君にゆだねることにするだろうか。それともやはり自分で面倒をみるだろうか」

「私にまかせるだろうと思います」

「では、これは？　アテナイの市民たちは、君を十分心得のある人間だとみとめたときに、君に自分たちのことをゆだねないだろうか」

「ゆだねるでしょう」

「ゼウスに誓って、さあそれでは、ペルシア大王はどうだろうか。肉を煮るときに、その汁の中へ入れたいも E のを入れることを、その長男にまかせるだろうか。それとも、食事の支度にかけては、われわれのほうがりっぱに心得ていることを、彼のところへ行ってみせてやれば、たしかにその息子は将来アジアの支配者になる人であ

るにしても、彼よりもわれわれのほうにまかせることになるだろうか」
「それは、われわれのほうにきまっています」
「すると息子には、どんなわずかのものも汁の中へ入れさせず、われわれなら、たとえ塩を一にぎり入れようとしても、かまわずにおくことだろうね」
「それはもちろん」
「では、もし彼の息子が目をわずらっているとすればどうだろう。その当人を医者として彼が考えるのでないかぎりは、はたして自分の目にさわることを許すだろうか。それとも止めるだろうか」

210

「止めるでしょう」
「ところがわれわれなら、医術に通じていると彼がもし考えたときは、たとえ彼の息子の目をあけて中へ灰をふりかけたいと思っても、止めないだろうと思うよ、正しいはからいをしているのだと思ってね」
「おっしゃるとおりです」
「そうすると、彼はその他のどんなことでも、とにかく自分たちよりわれわれのほうが通じていると彼の思うかぎりのことについては、自分や息子よりもわれわれにまかせるのだろうか」
「きっとそうするでしょう。ソクラテスさん」

六

B

「では結局こういうことになるわけだね、リュシス。われわれのわきまえるようになったことがらに関しては、

ギリシア人であれ異国人であれ、男であれ女であれ、誰もがわれわれにいっさいをまかせることになろう。それらのことがらにおいては、われわれは何でもしたいことをし、誰一人として、みずから進んでわれわれのじゃまをしようと考える人はなく、われわれ自身が、それらのことがらにおいては自由人になるとともに、他の人々を支配する者になることだろう。そしてそれらのことがらは、〈われわれのもの〉になるだろう。――われわれはそれらのことから自分の利益を得るだろうから。――だが他方、われわれの心得ておかなかったことがらに関しては、誰一人としてわれわれの思うようにさせてくれる人はなく、他人ばかりか父や母も、また、かりに父母以上の身内がありうるものならそのような者も、だれもかれもが、できるかぎりじゃまをするだろう。そこではわれわれ自身が他の人々のいうことをきかねばならず、われわれにとってそれらのことがらは〈他人のもの〉になるだろう。それらのことからわれわれは何の利益も得られないだろうから。こんなぐあいだと君は思わないかね」

C「思います」

「さてそれではいったい、われわれが役にたたないようなことがらに関して、人の友だちになったり、人に愛されたりするだろうか」

「けっしてそんなことはありません」

「してみると、役にたたない人間であるかぎり、君がお父さんから愛されることもなく、およそ誰でも誰からも愛されないだろう」

リュシス「そういうことになるでしょうね」

D「では君、君が賢くなれば、誰もが君の友だちとなり、誰もが君の身内になるだろう。――君は役にたつ善き

人間になるのだから。——だが、そうならないときは、他の人たちはもちろん、お父さんもお母さんも、他の家の人たちも、君の友ではなくなるだろう。ところでリュシス、人は自分のまだ心得ていないことがらのことで、心高ぶるということができるものだろうか」

「どうしてそんなことができましょう」

「では、君はいま現に先生につかねばならないとすれば、まだ心得ていないわけだね」

「おっしゃるとおりです」

「では君は、まだ心得のないものだとすると、心高ぶったものでもないわけだ」

「ゼウスに誓ってそう思います、ソクラテスさん」

七

E

彼の答を聞いて、私はヒッポタレスのほうを見ました。そしてもうすこしで、しくじるところでした。といいますのは、つい『ヒッポタレス、こんなふうにパイディカ(愛する少年)と話をせねばならないのだよ。こんなふうにへりくだらせ、つつましくさせるので、君のように、のぼせあがらせ甘やかすようなことはしないのだ』と言いたくなったのです。ところが彼を見ると、いまの話だけでも、もうすっかりどぎまぎして苦しそうにしているのです。それで、そうだ彼はそばにいることさえリュシスに知られたくなかったのだ、ということを思いだしました。そこで我にかえって、あわてて口をつぐみました。

そのあいだにメネクセノスがもどってきて、リュシスのとなりの、もとの席へ坐りました。するとリュシスは

いたずらっぽく、メネクセノスには知れないように小さな声で、
「ソクラテスさん、私に話してくださったことをメネクセノスにも言ってやってください」と親しそうに私に話しかけてきました。それで私は、
「そのことなら、君から話してやればよいだろう、リュシス。じっと熱心に聞いていたのだろう」
「それはそうです」
B
「では、この子に何もかも間違いなく言えるように、いっしょけんめいになって思いだしてくれたまえ。それで、もし何かそのなかで忘れたことがあれば、こんど会ったときに、いつでも私にききなさい」
「ええぜひそうします、ソクラテスさん、いいですとも。では、何か他のことを、家へ帰る時間になるまで、彼に話してやってください。私も聞かせていただきますから」
「もちろんそうせねばならない、君もそうしてくれと言うのだし。だけど、メネクセノスがやりこめにきたときに私の助太刀ができるように、気をつけていてくれたまえ。それとも彼が論争好きなことは知らないかね?」
「いいえ、ゼウスに誓ってたいへんなものです。だから彼と話をしていただきたいのですよ」
C
「私が笑いものになるためにかね?」
「とんでもない、彼をこらしめてくださるためにですよ」
「どうしてそんなことが? たいへんなことだよ。この男はすごいのだから。クテシッポスの弟子でね。それに、ごらん、当のクテシッポスが、そばについているのだよ」
「他の人のことなど気にしないで、さあ、彼と話をしてください、ソクラテスさん」

「うんそうしよう」

八

D

さて、こんなことをわれわれがお互いにしゃべっていますと、クテシッポスが、

「どうしてあなたがたは、自分たち二人だけでごちそうになっていて、ぼくたちには話をわけてくださらないのですか」

で、私が、

「いや、もちろんわけてあげるとも。つまり、いま私の言うことで、この子にはわからないことがあってね、だが、メネクセノスなら知っていると思うから、彼にたずねてくれというのだよ」

「それでは、どうしておたずねにならないのですか」

「いや、これからそうするところなのだよ。

E

ではメネクセノス、私のたずねることに答えてくれたまえ。じつはちょうど私には、子供のときから手に入れたいと思っているものがあるのだ。人それぞれに、みな何かそういうものがあるもので、馬を欲しがる人があれば、犬を欲しがる人があり、金の欲しい人、名誉の欲しい人と、人によってそれぞれさまざまだ。私は、そんなものには気がないのだが、友を手に入れるということになると、まったく目がなくて、世界一みごとなうずらや鶏(1)などよりも、まず、よい友だちが自分のものになったらと思うのだよ。それはもう、ゼウスに誓っていうが、馬や犬などよりも、いや、犬に誓っておそらくペルシア大王ダレイオスの財宝を手に入れることよりも、いやダ

レイオス王自身を手に入れることよりも、はるかにずっと友を手に入れたいと思うだろう。それほど私は友だちの好きな人間なのだ。それで、いま君たちを見ていると、君もリュシスも、そんなに若いのに、やすやすと、すばやくそれを手に入れることができて、君は彼を彼はまた君を、そんなにすばやく、ひどく仲のよい友だちにしてしまっているので、びっくりしてしまい、しあわせな人たちだと思うのだ。私のほうは、とても友を手に入れるどころではなく、どのようにして人は、他の人の友だちになるのか、ということさえ知らないありさまなので、他でもないじつにそのことを、君にききたいと思っているのだよ。君は経験者なのだから。

九

B　では答えてくれたまえ。誰かが誰かを愛するばあい、どちらがどちらの友になるのかね。〈愛するほう〉が〈愛されるほう〉の人の友になるのか、あるいは、〈愛されるほう〉が〈愛するほう〉の人の友になるのか。それとも、どちらでもまったくかわりのないことかね」

「まったくかわりのないことだと思います」

「それはどういうこと？　すると、ただ一方から他方を愛するだけで、両方ともお互いの友だちになるのかね」

1　古代ギリシア人、とくにアテナイ人たちの間では、これらの鳥を飼って勝負させることが流行した。飼育家のマニアぶりは、たとえば『法律』Ⅶ. 789Bにもみられる。鶏は、いわゆる闘鶏を行なうのであるが、アテナイでは年に一回、公の大会が催された。うずらに関しては、円の中に、うずらを置き、その頭をはじいて外へよろめいて出るものを負とする遊びが行なわれた(アリストパネス『鳥』一二九七行参照)。

「そう思いますが」
「ではね、自分は愛しているのに、その相手からは愛してもらえないということはないかね」
「あります」
「ではね、さらに、愛しているのに、憎まれることさえあるのではないか。じっさいまた、パイディカ〔愛童〕に愛をしかける人たちが、よくそんな目にあっているようだが。心のかぎりをつくして愛しているのに、相手から愛しかえしてもらえないとか、それどころか、憎まれているとか思っている人たちがあるものだ。君はそう思わないかね」

C「まったくそう思います」
「ところで、そのようなばあいに、一方の人は愛し、他方の人は愛されているのではないかね」
「そうです」
「それではいったい、その二人の中の、どちらがどちらの友なのかね。相手からも愛されようと、また憎まれようと、〈愛するほう〉が〈愛されるほう〉の人の友であるのか、あるいは、〈愛されるほう〉が〈愛するほう〉の人の友となるのか。いや、それともまた、このようなばあいには、両方ともお互いに愛しあうのでなければ、どちらがどちらの友にもならないのかね」

「いちばんあとのが正しいように思えます」

D「そうすると、さっき考えたこととちがってきたわけだ。つまりわれわれは、さっきは一方が愛すれば両方とも友だちだと考えたのだが、こんどは両方とも愛するのでなければ、どちらも友ではないと考えるわけだ」

「そのようです」

「してみると、愛する人にとっては、向こうからも愛しかえしてくれるのでなければ、いかなるものも〈友〉（ピロン＝愛しいもの）(1)ではないことになる」

「そうなるでしょう」

「してみるとまた、馬のほうから愛しかえしてもらえない人々は馬を愛する人ではないことになり、同様にして人は、うずら好きな人でも、また犬好きな人でも、酒好きな人でも、運動競技の好きな人でもなくなり、また、知のほうから愛しかえしてくれなければ、知を愛する人ではないことになる。それとも、彼らはそれぞれ、それらのものを愛してはいるのだが、それらを〈友〉（愛しいもの）として愛しているのではなく、したがって、

E

子どもたち、ひづめが一つの馬たち、猟犬たち、
そして外国の客人、彼らを友とする人は幸だ

と言った詩人(2)は、うそをいっていることになるのかね」

「そうは思いません」

1　ギリシア語の「ピロス」は元来、いとしい、好ましい、親しい、を意味する形容詞であり、そのまま名詞化されて、そのような性質のもの、ということから「友」の意味の名詞にも用いられた。ここの論法はこの語のもつそのような意味のつながりを用いている。なお原文では、この箇所以後全篇にわたって、「友」をより一般化してとりあつかうために、日常用いられる「ピロス」という男性形よりも、中性形の「ピロン」という形の方をおもに用いている。訳の上では区別せずに、いずれも「友」とした。「解説」（二六三ページ）参照。

2　前六世紀始めに活躍したアテナイの政治家、詩人、ソロンの詩（Fr. 13 (Diehl)）。

「では彼のいうことはほんとうだと思うのだね」

「はい」

「してみると、愛する人にとって、自分に愛されるものは、それがこちらを愛しようと、また憎もうと、友（愛(いと)しいもの）である、ということになるようだね、メネクセノス。だからして、たとえば、生まれたばかりの赤

213

ん坊は、まだ愛したりしないし、また、母親や父親に叱られて憎んだりするけれども、こちらを憎んでいるそのときにも、その子は両親にとって他の何よりもいちばん愛しいものなのだ」

「そうだと思います」

「では、この議論からすると、〈愛するほう〉が友なのではなくて、〈愛されるほう〉の人が、そうなのだということになる」

「そのようです」

「そして、〈憎まれるほう〉の人が敵なので、〈憎むほう〉の人はそうでないことになる」

「そうなるでしょう」

「そうすると、ずいぶんたくさんの人々が、敵から愛されたり友から憎まれたりし、したがって敵にとって友

B

であったり、友にとって敵であったりしていることになるだろう、もし〈愛するほう〉ではなく〈愛されるほう〉のものが友であるとすれば。もっとも、敵にとって友で、友にとって敵であるというのは君、まったく不合理なこと、いやむしろ不可能なことだと思うけれどね」

「まったくおっしゃるとおりだと思います、ソクラテスさん」

「それで、もしそれが不可能だとすると、〈愛するもの〉のほうが〈愛されるもの〉のほうの友であるということになるだろう」

「そうなるでしょう」

「すると他方、〈憎むもの〉のほうが、〈憎まれるもの〉のほうの敵であることになる」

「もちろん」

「すると、われわれはまた、さきのばあいとまったく同じことを認めねばならないはめになるだろう。つまり、C 人はしばしば、向こうが愛していないのに、あるいは、憎んでさえいるのに、その人を愛することがあるが、そのときには友でないものの友となったり、さらには敵の友となったりし、他方ときとして、向こうが憎んでいないのに、あるいは愛してさえいるのに、その人を憎むときは、敵でないものの敵となったり、さらには友の敵となったりすることになる、ということだ」

「おそらくそうなるでしょう」

「さて、それではいったいどうしたものだろう、〈愛する人〉も〈愛される人〉も、また〈愛し愛される人〉も、友ではないということになると。さらにそれらの他に、まだ何か、互いに友となるようなものがあると、われわれは言ったものだろうか」

リュシス 「ゼウスに誓って、ソクラテスさん、どうしてよいか私にはよくわかりません」

D 「ねえ、メネクセノス、そもそもわれわれのしらべ方が、根本からまちがっているのだろうか」

すると横から、

(213)

「まちがっているように思います、ソクラテスさん」とリュシス。

そう言ったあとで、すぐ彼は赤くなりました。われわれの話にすっかり気をとられてしまって、思わず口をすべらしたようでした。それまでもずっと、そのように熱心に話をきいていたにちがいありません。

一〇

そこで私は、メネクセノスを休ませたく思いましたし、またリュシスの知を愛する心が嬉しかったもので、こんどは彼と話をしようと思い、そちらへ向きをかえて言いました。

E 「そうだ、リュシス、たしかに君の言うとおりにちがいない。もしわれわれが正しいしらべ方をしていたのなら、いまのように迷い歩くことは、けっしてなかったろうと思うよ。では、もうこれ以上、そちらの方向へは行かないことにしよう。じじつ、いまのしらべ方は、何か険しい道とでもいったものにみえるのでね。それでこんどは、まえにわれわれの行った方向へ、進んでみなければならないように思うのだ。そして、詩人たちの言っていたことを手がかりにして、しらべてみよう。詩人たちは、われわれにとって、知恵の父とも道案内ともいうべき人々なのだから。

214 さて、友だちについて、ちょうど友人どうしになっている人たちについて、彼らののべていることは、たしかにおろそかにすることのできないもので、彼らの言うところでは、友だちとは、神様ご自身が、彼らのお互いを相手のそばへおつれになって、友だちにしてくださるというのだ。そのことを、たしかこんなふうに言っていたと思う。

似る者を、似る者のかたへ、神、つねに導き(1)

B 知り合いとしたもう――と。それとも、こんな文句(もんく)に出あったことはないかね」

「いえ、あります」

「それではまた、まさにそのおなじことを、似たものが似たものにとって、つねに友であることは必然であると、すぐれた賢者たちの文章にのべてあるのに出あったことはないかね。それは、自然や万有について論じたり本を書いたりしている人たち(2)だと思うのだが」

「おっしゃるとおりです」

「ところでいったい、彼らの言っていることは正しいだろうか」

「たぶん正しいでしょう」

「たぶん半分は、いや、ひょっとしたら全部かもしれない、がしかし、われわれにはなっとくがゆかない。と

C いうのは、すくなくとも悪人は悪人にとって、近づいて深く交われば交わるほど、ますますいっそう敵になるよ

---

1 ホメロス『オデュッセイア』第一七巻二一八行。

2 イオニアおよびイタリアの自然哲学者たちをさす。アリストテレス『ニコマコス倫理学』第八巻(友愛論)(1155b7-8)では、自然学者のうち、この「似たものが似たものを求める」とする見解を、エンペドクレス(前五世紀)その他に帰している。またじじつ、エンペドクレスFr. 32(DK)に、そのような内容の主張がみられる。エンペドクレスの自然観の要点は、諸物の、愛による結合と、争いによる分離とによって、自然界の出来事を説明することにあった。

うに思える。害を与えるのだから。だが、害を与えたり与えられたりしながら友だちであるというようなことは、できないことだろう。そうではないかね」

「そうです」

「さあ、そう考えると、悪人たちがお互いに似ているかぎり、いまの説の半分は真実でないということになるだろう」

「おっしゃるとおりです」

D 「そこで、むしろ彼らの言おうとするのは、善き人々は互いに似ていて友だちであり、それにたいして悪しき人々のほうは、よく言われることだが、自分自身に対してさえ、すこしも似ているときがなく、移り気でおちつきがない、ということであるように私には思える。自分自身とさえ似ていず、ちがっているようなものに、どうして何か他のものと似たり友となったりすることができるだろうか。君もそう思わないかね」

「そう思います」

「それでは君、『似たものが似たものの友』と言っている人々は、『善き人だけが善き人だけと友になるので、悪しき人は善き人とも悪しき人とも、けっして真の友情を結ぶことはない』ということを、なぞめかして言っているように私には思える。君にもそう思えるかね」

彼がうなずいたので、

E 「では、これで、友だちとは何であるかということは、わかったことになる。いまの議論が、『善き人々』とわれわれに示してくれているのだから」

「まったくそう思います」

二

「うん、私もそう思う。ただそこにすこしばかりひっかかることがあるのだ。さあそれでは、ゼウスに誓って、いったい私がどんな疑いを持っているのか、見てみることにしよう。〈似ているもの〉が、〈似ているもの〉に対して、似ているというそのことによって友となり、そのようなものが、そのようなものに対して、役にたつものになるというようなことが、はたしてありうるだろうか。いや、こう言ったほうがよいだろう。およそ何であれ似ているものは、何であれ似ているものに対して、相手が自分で自分自身に与えることのできるもの以外の、どのような利益や害を、与えることができるだろうか。また、自分自身からも受けとることのできるもの以外の、どのようなものを、相手から受けとることができるだろうか。このようなものどうしが、互いに相手から求められるようなことが、どうしてありえようか、互いに何ひとつ相手の助けになるものを持っていないのに。そんなことがあるものだろうか」

「いいえけっして」

「ところで、相手から求められていないものが、どうして〈友〉となりえようか」

「けっして」

「それでは、似ている人が似ている人に対して友であるのではなくて、〈善き人〉が〈善き人〉に対して――似ているということによってではなく――善き人であるということで、友であるということになるのだろうか」

B

「それではね、善き人は、善き人であるというそのことで、自分には、自分で十分足りているのではないだろうか」

「たぶんそうでしょう」

「さあ、ところで、十分足りている人は、十分足りているのであるから、何ものも必要としない人なのだ」

「そうです」

「ところで、何ものも必要としない人は、また、何ものをも求めることがないだろう」

「もちろんそうです」

「ところで求めることのないものは、また、愛することもないだろう」

「ええそうです」

「ところで、愛していない人というようなものは友ではない」

「たしかに」

「それでは、そもそもどうして、善き人々が善き人々と友であるというようなことになるのだろうか、――いっしょにいなくても、それぞれ自分だけで自分には十分なので、互いにあこがれ求めあうこともなく、いっしょにいても、自分のほうから相手に対して、してやることが何もないとすると。そもそもこのような人たちどうしが、互いに相手を大切なものと考えあったりするようなことが、ありうるものだろうか」

「そうということになるでしょう」

「そんなことは、けっしてありません」

C 「だが、お互いに相手を大切なものと考えないのなら、そんな人たちどうし、友だちであることはできない」

「そうです」

一三

「それではさあ、リュシス、どのようにして、われわれが、まちがってきたのか、よく考えてくれたまえ。そもそもわれわれは、ぜんぜん、まちがったことを考えてきたのだろうか」

「どうしてそういうことになるのですか」

「というのは、いまちょうど思いだしたのだが、私はまえに、『似たものは似たものにとって、善き人々は善き人々にとって、いちばんの敵である』と或る人が言っているのを聞いたことがある。そのうえ、その人は自分の主張の証人として、ヘシオドスを持ちだしていた。つまり、その詩人ののべているように、

つぼ作りは、つぼ作りをねたむ。歌うたいは歌うたいを、

D 乞食は乞食を[1]

というわけで、その他のものでもすべて、いちばん似ているものどうしが、いちばん相手に対して嫉妬や競争心や敵意をもち、いちばん似ていないものどうしが、いちばん相手に対して友愛(愛)[2]をもつようになるのが必然で

1 ヘシオドス(前七〇〇年ごろの詩人)『仕事と日々』二五行。

2 原語ピリアーは友情、友愛のばあいだけでなく、一般的に「愛」を意味する名詞。「解説」(二六三ページ)参照。

(215)

E

あるというのだ。つまり、貧しい人は富んでいる人と、弱い者は強い者と、相手から助けてもらうために、どうしても友だちにならないわけにゆかないし、病気の者は医者と友になり、また、およそものを知らない人はみな、知っている人をほしがり、その人を愛さないわけにはゆかなくなる、というわけだ。そのうえになお、その人は、さらに壮大に議論を展開して、

似たものが似たものにとり友であることは断じてなく、まさにその正反対である。すなわち、いちばん反対のものどうしが、いちばん友となる。すなわち、いかなるものも、それぞれ自分と反対のものを求めるのであって、似たものを求めるのではない。すなわち、乾いたものは湿ったものを、冷たいものは熱いものを、辛いものは甘いものを、鋭いものは鈍いものを、空虚なものは充ちることを、また充ちたものは欠けることを、というふうに。以下みな同様である。すなわち、反対のものは、その反対のものにとり養分である。すなわち、似たものは似たものからは何の益も受けることがない

216

と言っていた(1)。それで君、それを聞いたときは、たいした人だと思ったね。なかなかりっぱな議論なのだから。君たちは、この人の意見をどう思うかね」

「いまお聞きしたところでは、りっぱなものだと思いますが」

とメネクセノス(2)。

「では、〈反対のもの〉が〈反対のもの〉にとって、いちばんの友であるということにしようかね」

「はい」

「そうかい。へんなことはないかね、メネクセノス？　すると、すぐさま、論駁家(3)というあのおそろしく知恵

のある人たちが、よろこび勇んでわれわれにとびかかってきて、『敵意は友愛と正反対のものではないのか』と問いかけてくることになるだろうか。その人たちに、何と返答したものだろうか。『君たちの言うとおりだ』と言うほかはあるまい」

B

「そうなります」

「『ではそもそもいったい、敵が友と友であったり、友が敵と友であったりするのか』とたずねてくれば？」

「『どちらもありえない』と答えます」

「では、正しいものが不正なものと、節制なものが放縦なものと、また、善きものが悪しきものと、友であるのか」

「そんなことはけっしてないと思います」

「だがしかし、反対であることによって、何かが何かと友になるとするかぎりは、それらのものも友にならね

1 アリストテレス『ニコマコス倫理学』第八巻(友愛論)(1155b4–6)参照。そこでは「反対のものが友」とする自然学者としてヘラクレイトス(前五〇〇年ごろの人)の名があげられ、彼が「対立するものが相手に役だつ」「相違するものから、もっとも美しい音律が生まれる」「すべては争いによって生ずる」という主張をしたとのべられている(Fr. 8(DK))。ただし第一句の原文は「反対するものが協調する」とも解され、彼の主張の中心は、むしろ、反対のものが争いあいつつ、しかもそのままで調和をなすという点にあるとも思われる。なお『饗宴』における医者エリュクシマコスの演説(186D～188D)を参照。

2 ここでリュシスに代わったメネクセノスが、終りまで、主としてソクラテスの話相手となっている。

3 いわゆる反対のための反対論をこととしたソフィスト的な論争家たち。『パイドン』101E、『国家』V. 454A、『テアイテトス』197Aなどにも言及されている。

ばならない」

「たしかにそうなります」

「してみると、〈似ているもの〉どうしも、〈反対のもの〉どうしも、どちらも友ではないことになる」

「そういうことになるようですね」

一三

C 「ではさらに、つぎのことをしらべてみよう。つまり、——友とはじつは、いままでにあげたもののどれでもなくて、むしろ、〈善くも悪くもないもの〉が、ときとして、〈善きもの〉の友になっているのだ——ということに、われわれは気づかないでいるのではないだろうか」

「それはいったい、どういうことですか」

「いや、じつは私にもよくわからないのだ。議論がゆきづまったので、目まいがしているわけなのだが、たしか昔のことわざに、『〈美しいもの〉（カロン）は〈愛(いと)しいもの〉（ピロン）(1)』とあったように思う。じっさい、〈美しいもの〉というと、何か柔らかくすべすべしてつやのあるもののように思われるが、だからしてまた、つかもうとしても、たやすくわれわれの手をすりぬけて、逃げてゆくのだろう。で、私は〈善きもの〉が美しいものである、と言いたいのだがね。君はそう思わないか？」

D 「そう思います」

「さて、ここで私は、心にひらめいたまま、『美しく善きものを友とするものは、善くも悪くもないものであ

る』と告げたいのだ。だが、どういうことを考えて、私がそんなお告げのようなことをのべるのか、聞いてくれたまえ。私の思うのに、ものには、いわば三つの種類があり、一つは〈善いもの〉、つぎは〈悪いもの〉、いま一つは〈善くも悪くもないもの〉、である。君はどう思う？」

「私もそう思います」

「また、善いものが善いものと、悪いものが悪いものと、善いものが悪いものと、友になることはないと思う。E これは、さっきの議論からも許されないことだ。するとあとに残るのは、もし何かが何かと友であるとするかぎり、善くも悪くもないものが、善きものを友とするか、あるいは、やはり自分とおなじようなものを友とするか、である。悪しきものとは、おそらくどんなものも友にはなるまいから」

「そうですとも」

「さらにまた、似たものどうしも友にならないということだった。そうではないかね？」

「そうです」

「では、善くも悪くもないものにとって、自分と同類のものは友ではないことになるだろう」

「そのようです」

217

「すると結局、〈善きもの〉と〈善くも悪くもないもの〉とが友になるだけ、ということになる」

「どうしてもそうなるようです」

1　もちろん、「ピロン」には「友」の意味がある。212D注1参照。

一四

「それでは子供たち、いまわれわれの出した結論が、はたして正しいかどうか見てみよう。たとえば、健康な体というようなものを考えてみると、それは医術その他、外からの助けをすこしも必要としない。自分で十分な状態にあるからだ。したがって健康な人が、その健康のゆえに医者と友になる、というようなことはけっしてない。そうではないか？」

「そうです」

「では、病気の人が、その病気のゆえに、そうするのだと思う」

「もちろんそうです」

「さて、病気とは悪しきものであり、医術のほうは有益な善きものである」

B

「そうです」

「また、身体というものは、それが身体であるというだけでは、おそらく善くも悪くもないものであろう」

「そのとおりです」

「だが身体は、病気のゆえに、医術を歓迎し愛さざるをえないようになるのだ」

「そう思います」

「してみると、〈悪くも善くもないもの〉は、〈悪〉が自分のところに存在するゆえに、〈善きもの〉の友になるということになる」

「そうらしいです」

「むろん、自分の持っている悪によって、それ自身が〈悪しきもの〉になる以前のことだ。なぜなら、悪くなっ C てしまえば、もはやけっして〈善きもの〉を求めたりその友となったりすることはありえない。さっきの議論で、悪しきものが善きものの友になることはありえない、ということだったのだから」

「たしかにそうにちがいありません」

「では、これから私の言うことを、君たち、よく考えてくれたまえ。いいかね、およそ物には、自分のところに存在するものとまったくおなじ性質に、自分もなるというものと、そうならないものとがある。たとえば、人が何かに何か色を塗ってみるとすると、その塗った色が、その塗られた物のところに存在することになるだろう」

「はい」

「それではいったい、そのときに、その塗られた物は、その上にあるものと、同じ色になっているのかね」

「どうもよくわかりません」

D 「いや、こういうことだよ。もし人が、褐色をしているその君の髪の毛に、おしろいを塗りつけたとすれば、そのときそれは白くなっているのだろうか。それとも、そう見えているだけなのだろうか」

「そう見えているだけです」

「だが、その毛のところに白さが存在してはいるのだ」

「そうです」

(217) 「しかし、だからといって、それがすこしでも白くなっているというわけではない。白さが存在していても、ぜんぜん白くもなければ黒くもない」
「そのとおりです」
「だが君、ひとたび老齢がその髪の毛に、それとまったく同じ色をもたらしたときは、さあそのときには、そ E こに存在するものと同じ色になる、つまり白の存在によって白くなってしまっているのだ」
「もちろんそうですとも」
「さて、そこであらためてきくが、何かが何かのところに存在するときには、どんなばあいにも、その存在するものと同じ性質に、受けるがわのものもなるのだろうか、それとも、それはばあいによってちがうので、ある仕方で存在するばあいはそうなり、そうでないばあいはそうならないのだろうか、いったいどちらだろうか」
「それは、ばあいによってちがうというほうです」
「すると、〈悪くも善くもないもの〉も、あるときは悪が存在しても、まだ悪くはなっていず、他方、ときによっては、すでにそのような性質のものになってしまっていることがあるわけだ」
「そうです」
「それでは、悪が存在してもまだ悪くはなっていないばあいには、そういう仕方で悪が存在することは、善を欲求するようにそれをし向けるものであり、他方のばあいは、それを悪いものにして、善に対する欲求をも愛を 218 も、それから奪ってしまうものである。それはもはや、〈悪くも善くもないもの〉ではなくて、〈悪しきもの〉であり、悪しきものは善きものと友ではなかったのだから」

「たしかにそうです」

「したがってまた、すでに知者である者は、神々であれ人間であれ、もはや知を愛することがないのであり、他方また、自分の持っている無知によって、すでに悪しき人間になってしまっている人々も、知を愛することがない、なぜなら、悪しく無知なる人は、誰一人知を愛することがないのであるから、といってよいであろう。[1] するとあとに残るのは、その無知という悪を持ってはいるが、しかし、まだそれによって無知なわからずやになってはいず、自分の知らないことは知らないとまだ考えている人たちである。こうしていまや、一方で、まだ善くも悪くもなっていない人々が知を愛するのにたいし、他方、悪しき人々も、また善き人々も、知を愛することがないということになる。反対のものが反対のものの、似たものが似たものの友になることがないのは、さきの議論でわれわれに明らかになったことなのだから。君たちおぼえていないかね?」

B

「おぼえていますとも」と二人。

「それではリュシスにメネクセノス、こんどこそ、とうとう、友とは何であり、何でないか、ということの答えを、たしかに見つけだしたことになるね。つまり、魂のことであれ、身体のことであれ、他の何であれ、まさにその〈悪くも善くもないもの〉が悪の存在のゆえに、善きものの〈友〉である、とわれわれは主張するのだ」

C

「まったくそのとおりです」と言って二人は同意するのでした。

---

1 『饗宴』204A 参照。

一五

そこで私自身も、狩人(かりうど)が追いかけまわした獲物をやっとつかまえたときのような気分で、すっかり悦にいっていたのです。ところがそのとき、どこからともなく、いまわれわれの認めた結論がまちがいではないかという、このうえなく奇妙な疑いがしのびこんできたのです。すると私は、もうすこしもじっとしておれなくなって言いました。

「おやおや、われわれが金持になったと思ったのは、夢の中でのことらしいよ、リュシスにメネクセノス」

「何ですって？」とメネクセノス。

D

「どうも、いまわれわれのめぐりあった友についての説は、いわば大ぼらふきたちのようなものだったのではないかと思うのだ」

「いったいどうしてですか？」

「つぎのようにして、しらべてみることにしよう。およそ人が友であるときは、誰かに対して友であるのではないか」

「もちろんそうです」

「それでは、何のためにでもなく、また何のゆえにでもなしに、そうであるのか、それとも、何かのために、そして何かのゆえにそうするのか」

「それは、何かのために、そして何かのゆえにそうするのです」

E

「では、人が他の人と友になるときの、その目的になっているものそのものは、そのばあい友であるのか、それとも友でも敵でもないのか」

「どういうことなのか、よくわかりません」

「うん、もっともだ。では、こういえば、おそらくわかるだろう。私のほうも、それによって、自分の言っていることを、もっとよく理解することができると思う。さっきの話にあったように、病人は医者の友である、そうではないかね？」

「そうです」

「では、病気のゆえに健康のために、医者の友であるのではないか」

「そうです」

「ところで、病気とは悪しきものである」

「もちろんです」

「では健康はどうかね。善いものか、悪いものか、またそのどちらでもないのか」

「善いものです」

「さてさっきの話によると、身体は善きものでも悪しきものでもないが、病気のゆえに、つまり悪のゆえに、医術の〈友〉になるのであり、そしてその医術とは善きものである、ということであったと思う。ところが、その医術に対して愛をいだくのは、健康を得るためであり、そしてその健康とは善きものであるのだ。ちがうかね？」

「そうです」

「では、その健康は、友であるのか友でないのか」
「友です」
「病気のほうは敵である」
「まったくそうです」

B

「すると、〈悪くも善くもないもの〉が、〈悪〉であり〈敵〉であるもののゆえに、〈善きもの〉〈友なるもの〉のために、〈善きもの〉の友である、ということになる」
「そのようです」
「してみると、〈友〉とは、友のために、敵のゆえに、友の友であることになる」
「そうなるようです」

一六

「よし、では子供たち、ここまでわれわれは来たのだから、だまされないようによく注意することにしよう。さて、友が友の友ということになって、不可能なことだとわれわれの言う『似たものが似たものの友になる』ことになるが、そのことは私は、問題にしないことにする。ただ、つぎのことはぜひ、いまの議論にだまされないために、しらべてみることにしよう。

C

いまわれわれは、医術は健康のために友である、と主張するのだ」
「そうです」

「ところで、その健康もまた、友であると主張するのではないか？」
「まったくそうです」
「では、それも友だとすると、それがまた、他の何かのために友であるのだ」
「はい」
「その他の何かもまた、さっきの結論にしたがうかぎり、何か〈友〉であるわけだ」
「たしかに」
「それでは、さらにそれもまた、何か別の友のために友であることになるのではないか」
「そうです」
「そうするとわれわれは、どこまでもこの調子で進んでいって、しまいにぶったおれることになるか、さもなければ、もうそれ以上は他の友へとさかのぼってゆかない或る源（みなもと）に達することにならざるをえないのではないか。

D

それはまさに〈最初の（第一の）友〉であって、この友のために、他のすべてのものも、友であるとわれわれは主張している、ということにならざるをえないのではないか」
「そうなると思います」
「つまり私の言いたいのは、かのもの以外の、かのもののために友であるとわれわれの言ったものどもは、すべて、それの影のようなものにすぎないのであるが、われわれはそれらの影にだまされているのではないか、他方、真に友なるものは、かの第一のものではないのか、ということなのだ。さらにそのことを、つぎのように考えてみることにしよう。人が何かを大切にしているときには、たとえば父親が息子を他の何ものよりも大切なも

(219) E

のに考えているばあいなど、息子をすべてであると考えるために、何か他のものも大切なものに思うということはないだろうか。たとえば、息子が毒を飲んだということに気づいたときに、もし酒が息子の命を助けてくれると思えば、酒を大切なものに思うのではないだろうか」

「もちろんです」

「それでは、その酒の入れてある入れ物さえ大切に思うのではないか」

「そうです」

「それではさて、そのばあい、陶器のさかずきや三コテュレー(1)の酒を、すこしも自分の息子より大切には思っていないのではないだろうか。いや、むしろこういうことだろう。つまり、このような心づかいはすべて、こうして何かのために準備されるもろもろのものに対してなされたのではなくて、それらとは別のかのものに対して、(220) つまり、そのためにこそそれらのすべてのものが準備されるその当のものに対して、なされたのである。われわれはよく、金銀を大切なものに思うというけれども、おそらくやはり、それは真実ではなく、われわれがほんとうに、それこそすべてであると思っているものは、じつは別にあるのであって、何かそのようなもののためにこそ、われわれは金銀もその他のものも準備するのである。われわれはこう言ってよいだろうか？」

「よいと思います」

「さて、〈友〉についても、同じようなことが言えるのではないか。つまり、あきらかにわれわれは、われわれに B とって何か或る別の友のために友であると、われわれの主張するようなものどもを、すべて言葉のうえでは〈友〉と呼んでいる。しかしほんとうに〈友〉であるものは、おそらく、それらのものどもに対するもろもろのいわゆる

愛が、結局すべてそれに帰着することになるかのものにほかならないであろう」
「おそらくそうでしょう」
「それでは、そのようなほんとうの友とは、何か或る友のために友なのではないのだ」
「そうです」

一七

「ではこれで、〈友〉とは、何か或る友のために友なのではない、ということにきまったわけだが、ところでさて、善きものが友なのではないかね」
「そう思います」
C
「ところで、善きものとは、悪のゆえに愛されるのではないだろうか。それはこういうことだ。つまり、さきほどのべた〈善きもの〉、〈悪しきもの〉、〈善くも悪くもないもの〉という三つのものの中で、いま、〈悪しきもの〉がどこかへ行ってしまって、あとの二つだけが残されたとしたらどうだろうか。このようにして、身体にせよ魂にせよ、その他何にせよ、それ自身としては〈悪くも善くもないもの〉とわれわれの言うものに対して、〈悪しきもの〉がいっさい手をふれようとしないとすれば、さてそのときに、〈善きもの〉は、われわれにとって何ら役にたつものではなくて、無用のものになってしまっているのだろうか。つまり、もはや何ものもわれわれを害するこ

1　一コテュレーは約〇・二七リットル。三コテュレーの酒とは、いわば五合の酒というところであろうか。

(220) D

とがないとすると、われわれは何の助力も必要としないことになろう。したがって、そのときわれわれは、『われわれは善は悪の薬であり、悪は病気であると考えて、悪のゆえに善を尊重し愛していたのだ』ということに気づくのではないだろうか。病気が存在しないなら、薬の必要は少しもないわけだ。以上のようなわけで、善は、悪のゆえに、悪と善との中間の存在であるわれわれによって愛されるのであって、善だけでは、善自身のために求められるような効用を、すこしももっていないのではないだろうか」

「そのように思われます」

E

「さて、さきにわれわれは、もろもろの友は他の友のために友であると言っていたが、それらもろもろの友のすべてがそれに帰するとわれわれの考えたかの〈友〉は、いまや、それらもろもろの友とはすこしも似ていないものになる。というのは、それらもろもろの友は、友のために友と呼ばれているのにたいして、真に友であるもののほうは、あきらかに、それとはまったく正反対の性質を持っている。つまり、それは、敵のために友であることが、いまやわれわれに明らかになったのであり、もしその敵がいなくなれば、それはもはやわれわれにとって友ではなくなるように思われる」

「すくなくともいまの議論にしたがうかぎりは、そうなると思います」

221

「さてところで、ゼウスに誓って、もし悪が滅びたばあいには、ひもじがることも、のどがかわくことも、その他それに類することは、もはや何ひとつ存在しなくなるのだろうか。それとも、とにかく人間その他の動物が存在するかぎり、ひもじがることは存在しはするが、しかし有害ではなくなるのだろうか。のどのかわきにしても他の欲望にしても、存在しはするが、しかし悪は滅びたのであるから、もはや悪いものではなくなるのだろう

か。いや、そのときになって、はたして何が存在し何が存在しないことになるかというようなことを、いまから問題にするのは、ばかげたことかもしれない。誰がそんなことを知っていよう。しかしすくなくとも、つぎのことをわれわれは知っている。つまり、現在においても、ひもじがっていて害を受けることがあると同時に、益を受けることもあるということだ。そうではないか？」

「まったくそうです」

B 「それでは、のどのかわいているばあいも、その他どんな欲望をもっているばあいも、ときによって或るときには益を、或るときは害をそこから受け、また、或るときはそのどちらも受けない、というのが事実ではないだろうか」

「そうですとも」

「ところで、もろもろの悪が滅んでゆくばあいに、悪ではないものまでも、それらの悪といっしょに滅んでゆかねばならないものだろうか」

「いいえけっして」

「では、善くも悪くもないもろもろの欲望は、悪が滅びたばあいも存在することだろう」

「そのようです」

「ところで、何かを欲しがり求めているときに、その自分の求めているものを愛さないということがありうるだろうか」

「ありえないことだと思いますが」

(221)
C

「してみると、もろもろの悪が滅びたのちも、おそらく何か〈友〉(愛されるもの)が存在することになろう」

「そうです」

「そんなはずはないのだがね。とにかく悪が、何か友なるものの存在する原因であるとするかぎりは、それが滅びたあとで、何かが他の何かにとって友であるということは、ありえないのだが。原因が滅びるときに、それを原因とするものが、なお存在することは不可能だったはずだ」

「おっしゃるとおりです」

「ところで、まえにわれわれは『友は、何かを、しかも何かのゆえに愛する』ということを認めて[1]、しかもそのときは『悪のゆえに、善くも悪くもないものが、善きものを愛する』と考えたのではなかったか」

「そうです」

D

「ところが、あらたにいま、何か別のものが、愛することと愛されることとの原因として現われてきたようだ」

「そのようです」

「それではいったい、いまわれわれの言っていたほうがほんとうで、つまり、〈欲望〉が愛(友情)の原因であり、そして、欲望をもっているものが、自分の欲するものに対して、それも欲するそのときそのときにおいて、友になるのであって、さきほどわれわれが友であると言っていたようなものは、じつはくだらぬ無駄話で、いわば、長ったらしい詩をこしらえあげただけのことになってしまうのだろうか」

「どうもそのようですね」

「しかしね、欲望をもつものは、自分に欠けているものを欲するものだ。ちがうかね？」

222 E

「そうです」

「それでは、欠けたところのあるものが、その自分に欠けているものの友になるのだ」

「そう思います」

「ところで、およそ欠けたところのあるものとは、自分のところから奪いとられたものを、欠いたものになるのだ」

「もちろんです」

「それではどうやら、欲求(恋)も愛も欲望も、ちょうど自分のものであったものに、向けられることになるらしいね、メネクセノスにリュシス」

二人が同意しましたので、

「してみると、君たちは、もしお互いに友であるなら、本性上何らかのかたちで、お互いに相手が〈自分のもの〉(2)であるわけだ」

「ほんとうにそうです」と二人。

「では子供たち、人が他の人を求めたり愛したりするばあいも、もしもその人が、ちょうど魂や、魂の何か品

1　218D参照。

2　ここで「自分のもの」と訳した原語オイケイオンは、「他人のもの」に対する意味で「自分自身のもの」を意味するが、もともと「家のもの」の意味の語で、同族のもの、血縁のもの、の意味から、類縁性をもつもの、の意味ももちうる。このあたりの議論は、そのような語義のひろがりを利用しているので、ばあいに応じて他の訳語を括弧して付けくわえた。

性や性向やタイプなどに関して、愛される相手の人にとって、何らかの仕方で〈自分のもの〉〈血のつながったもの〉であるのでなければ、けっして求めたり恋したり愛したりすることはないだろう」
「まったくそうです」とメネクセノス。
リュシスのほうは黙ってしまいました。
「さて、ところで、じつにこの本性上〈自分のもの〉〈血のつながったもの〉というのを、われわれはどうしても愛せずにはおれない、ということは、すでに明らかになっている」
「そのようです」
「では、みせかけではない本物のエラステース[1]〈恋する人〉は、かならずそのパイディカ〈愛童〉から愛されるということになる」

B

すると、リュシスとメネクセノスのほうは、うなずくのもやっとのことでしたが、ヒッポタレスのほうは、嬉しさにすっかり相好をくずすのでした。

一八

そこで、つぎに私は、いまの議論をしらべてみようと思って言いました。
「さて、〈自分のもの〉〈血縁のもの〉というのが、〈似ているもの〉と、もしいくらかでもちがうものであれば、われわれはいま、友が何であるかについて、何ごとかをのべたことになるだろうと思う。だがもし、〈似ているもの〉と〈自分のもの〉〈血縁のもの〉とが、まったく同じものであるとすれば、さっきの[2]『似ているものは、似てい

C るものにとって、似ていることのゆえに、無用である。そして無用のものを友であると認めるのは、とほうもないことである』という説がでてくるのを、しりぞけることは容易ではあるまい。さて、それでは諸君、われわれはいま、議論にいわば酔っているのだから、ここでひとつ『〈自分のもの〉は〈似ているもの〉とは何か別のものである』という考えを認めることにしたものだろうか」

「そうしましょう」

「それでは、さらに、『善きものは万人にとって〈自分のもの〉であり、悪しきものは〈よそのもの〉である』[3]としようか。それとも、『悪しきものが悪しきものにとって自分のものであり、善きものにとっては善きものが、また善くも悪くもないものにとっては善くも悪くもないものが、それである』としようか」

するとニ人は、あとのばあいのように、それぞれのものには、それぞれのものが、〈自分のもの〉であるように思われる、と言いました。

そこで、私は言いました。

D 「それでは子供たち、いまや、ふたたびわれわれは、友愛について最初にしりぞけた議論におちいってしまっていることになる。つまり、善き人が善き人と友になるばかりでなく、不正な人は不正な人と、悪しき人は悪しき人と友であることになるだろうから」

---

1 204D注1参照。
2 214E～215C参照。
3 同様の表現は『饗宴』205Eに見られる。また『カルミデス』163C～D参照。

「そうなるようです」
「では、もう一方のほうはどうだろう。〈善きもの〉と〈自分のもの〉とは同じものであると、もしわれわれが主張するとすれば、善き人と善き人だけが友であることになるのではないか」
「まったくそうです」
「ところが、このこともまた、すでにわれわれのとりあげてみたことで、そのことでわれわれ自身を、すでに論破したつもりだった。[1] 君たちおぼえていないかね？」
「おぼえています」
E
「それでは、さらにこれから、この議論をどうすることができるだろうか。それとも、あきらかに、もうどうしようもないということになるだろうか。それでは私は、ちょうど法廷で練達した人たちがやるように、いままでのべられたことを、すっかり、もう一度数えなおしてみようと思う。すなわち、もし、〈愛される人々〉も、〈愛する人々〉も、〈似ている人々〉も、〈似ていない人々〉も、〈善き人々〉も、〈自分のものである人々〉〈自分と血のつながる人々〉も、その他およそいままでわれわれののべてきたかぎりのものも、――あんまり多いので、もう私はおぼえていないのだよ――さて、それらのうちのいかなるものも〈友〉ではないとすると、私にはもう何を言ってよいのかわからない」
こう言って、こんどは年上の連中のなかから、誰かをそそのかしてみようと思っていました。するとそのとき、223 神霊か何かでも現われたように、メネクセノスとリュシスの、それぞれのパイダゴーゴス[2]が、その兄弟たちを連れてやってきて、二人を呼んで、家へ帰るようにと言うのでした。もう夕暮だったのです。はじめのうちは、わ

Ｂ

れわれも、まわりに立っていた人たちも、彼らを追いはらおうとしましたが、われわれのことなど、彼らは、いっこう気にかけようとせず、いらだって外国なまりの言葉であいかわらず呼びつづけるし、そればかりか、ヘルメス様のお祭ですこし酒を飲んでいて、どうにもとりつくしまがなさそうに見えましたので、彼らに負けて、その集まりを解きました。しかしながら、私は、いまは立ちさってゆく二人に向って、さらに言いました。

「さあこれで、リュシスとメネクセノスよ、われわれは笑われ者になったのだ、老人であるこの私と君たちは。ここにいる人たちは、帰る道々言うことだろう、われわれは——私も君たちのなかに入れさせてもらって、——お互いに友であると思っているけれども、それなのに、〈友〉とは何であるかということも、まだ見つけだせなかったのだ、と」

1　215B参照。

2　208C注1参照。

『テアゲス』解説

北嶋美雪

一 登場人物と対話設定年代

登場人物

デモドコス(Demodocos) アッティカのアナギュルゥス区の人。公職を退いてのち、農耕にいそしみながら田舎で隠遁生活を送っている老人であることが、本篇 121 B sqq., 127 E などから知られる。年齢に関しては確かなところは明らかでないが、ソクラテスよりは年長と記されている(127 E)。トゥキュディデスの『歴史』に、ペロポネソス戦中、前四二四年、アリステイデスと共に、イオニア地方の都市アンタンドロスを奪取したアテナイの将軍としてデモドコスの名が見られるが(第四巻(七五の一))、本篇の登場人物であるデモドコスは、おそらくこれと同一人であろうと推定されている(Souilhé, p. 155)。なおデモドコスの名は、パラロス、テアゲス兄弟の父親として、『ソクラテスの弁明』のなかに言及されている(33 E)。

ソクラテス(Socrates) 次に述べる本篇の対話設定年代から六〇歳くらいと推定される。プラトンの初期対話篇にしばしば見られるような、青年の教育の問題に関する良き相談相手ないしは助言者、ひいては最善の教師、という面がここでは特に強調されている。

テアゲス(Theages) 父親のデモドコスから、その教育のためには金銭をおしまぬと言われる裕福な家庭の青年として、読み書き、音楽、体育などの基礎教育はすでに一応修得し(122 E)、その上に当時の同様の青年たちが等しく渇望した国家

有数の人物となるための教育、ソクラテスの代弁するテアゲス自身の言葉でいえば「国家社会のことにかけての知者になる」(126C)ための教育を受けたいと願っている青年として登場する。メノンなどと同じく二〇歳くらいであろう。

なおテアゲスという人物は『国家』Ⅳに、「テアゲスの馬銜(はみ)」という諺的な表現とともに、「われわれの仲間テアゲス」として、「彼は哲学を離脱する条件はそろっていたにもかかわらず、ただ病弱であったがため、その養生だけが政治生活から彼を遠ざけて哲学のもとに引きとめていた」と語られ(496B～C)、また『ソクラテスの弁明』にも、ソクラテスによって、自分が青年に害悪を与えたというような事実はないということの証人の一人として引合いに出されている(33E)。本篇におけるテアゲスはこれらの記述ともよく一致し、『テアゲス』の作者はこれらの記述に見られると同一人物であるテアゲスをここに登場させたとみることができよう。

ちなみに『弁明』における記事で、テアゲスはすでに故人として語られているので、このことから前三九九年には彼は若くして世を去っていたことになる。

対話設定年代

本篇の対話がいつ行なわれたかを推定する手掛りは本篇のなかで言及されているいくつかの歴史的事実に求めることができる。いや、むしろ、本篇の対話が実際行なわれたような印象を読者に与えようと意図するもののように、作者は歴史上の出来事を語ることを忘れてはいない、と言ったほうがよいかもしれない。それを列挙するならば、

(一)「最近マケドニアの支配者となった、ペルディッカスの子のアルケラオス」(124D)――アルケラオスが王位にあったのは前四一三―三九九年であるから、対話設定年代の上限は前四一三年であり、また「最近」という表現から、これより数年以内という年代が想定されている。

(二)「シケリアで起きたことに関しても、わたしが遠征軍の潰滅について語ったことを、云々」(129C)――これは前四一五―四一三年のシケリア遠征を指し、それ以後のこととして語られているところから、やはり前四一三年以降のこととなる。

(三)「美しいサニオンは……現在トラシュロスといっしょに、エペソスやイオニアに肉迫攻撃をかけるべく、遠征中の身で

す。したがって彼のことが……ひいては全遠征軍のことが心配でなりません」(129D)――サニオンという人物に関しては明らかでないが、将軍トラシュロスが参加したアテナイ人のエペソス遠征は前四一〇―四〇九年のことであるが、ここではこの遠征がいまだ決着をみていないこととして語られている。

したがって、㈢より、具体的な前四一〇―四〇九年という年代が得られ、㈠、㈡はこれを強力に裏付けるので、本篇の対話は前四一〇／九年に行なわれたという設定がなされていることになる。

二　梗概

序章　ソクラテスはアテナイのアゴラ附近でデモドコスに呼びとめられる。息子のことで相談にのってもらいたいとのこと。デモドコスは既述のように、昔は国の顕職にあったが、現在は田舎に退いて隠遁の生活を送っている老人であるが、息子のテアゲスが「知者」になりたいという切なる願望をいだき、そのためにソフィストに弟子入りさせてほしいと要求しつづけるので、いまや根負けして、止むなくソフィストに息子をつかせるために、アテナイに出てきたのだという。しかしソフィストに息子をまかせることは大きな危険を冒すことなので、このような問題、すなわち青年の教育という問題に関して、打ってつけの相談相手であるソクラテスに出会ったがさいわい、助言をとデモドコスは懇請する。ソクラテスは承知するが、しかしまず最初にテアゲスが望んでいるのはほんとうは何なのか本人に直接確かめてみることからはじめたいと提案する(122Dまで)。

第一部　テアゲスは「知者」になることを切望し、「知識」を獲得したがっているが、彼が願っている「知識」「知恵」はいかなるものか。それは「国家社会におけるすべての人間を支配しうる知恵」であり、自分自身がそのような「一国のすべての国民の支配者となること」をのぞんでいるのである。するとそれは、言いかえると、「独裁君主になること」をのぞむということになるのか、そして彼の切望する知恵も、そのような、独裁支配に関する一

切のことの知恵であり知識なのか。テアゲスは「一国のすべての国民を支配したい」という欲求は動かしがたいとしながらも、しかしそれは「けっして力ずくでではなく、また独裁君主たちのようなやり方ででもなくて、テミストクレスやペリクレスやキモンのようなアテナイにおける有数の政治家たちがしたような仕方で、相手の合意を得て支配することである」ということを明らかにする（122D～126A）。

第二部　「国家社会におけるすべての人間を支配しうる知恵」を獲得し、「国家社会のことにかけての知者」になるためには、それでは誰のもとに行き、誰につけばよいのか。それは必然的にそうした国家社会のこと（政治）の専門家である政治家のもとに行き、師事すべきであるということになるはずであるが、ところが実際には政治家たちは彼ら自身、彼らの専門の術知の教師たりえてはいない。では他の誰のもとに行けばよいのか。テアゲスはほかならぬソクラテス自身に自分の先生になってくれるようにと頼む（126B～127B）。

第三部　デモドコスは息子のこの要請を支持し、ソクラテスがこの願いを聞き入れて、教育を引き受けてくれるならば、これ以上の仕合せはなく、自分としてはそのためなら何物もおしまないと言う。しかしソクラテスは躊躇を示す。自分は「ただひとつほんのちっぽけな学問、すなわち恋に関するそれは別として、ほとんど何も知らない」のであって、若者たちを教育することができると標榜するソフィストたちのように「祝福された、うるわしい学問」は少しも心得てはいないのだから、そういう仕事は適任ではない、と。テアゲスはこれに対してソクラテスと交際することによって裨益された自分の仲間の例を引いて、ソクラテスにその気のないことを言ってなじる。そしてこのことをきっかけにしてソクラテスは、彼にしばしば現われる「ダイモーンの合図」について、いくつかのエピソードを語り、特に最後のアリステイデスのエピソードによって、教育の問題におけるこの「ダイモーンの合図」のかかわりを明白に示すことになる。この「合図」が彼との交際を許し、その交際によって裨益を与えられる者もいるが、裨益を与えられない者もある。またそもそも交際を許さない者もある。すなわちテアゲスののぞむソクラテ

スとの交わりは、ソクラテス自身の意志によって決定できず、神意にかかっているのである(127B～130E)。

結び　それなら実際に交際してみて、それを許すか許さないか、「ダイモーンの合図」をためしてみましょう、というのがテアゲスの最後の提案であり、ソクラテスもこれを了承することで対話は終る(130E～131A)。

三　内容上の問題点

(1)　当対話篇の主題

錯綜したところのある叙述を若干整理した以上の本篇のあらすじを辿ってみて、ここで主題とされているのは何かと改めて問うてみると、われわれはトラシュロスによって与えられている「知恵について」――ギリシア語の原題は「ピロソピアー(知を愛し求めること、哲学)について」――という副題は、必ずしも内容にそくした主題ではないことに気づく。

なるほどテアゲスの求めているのは「知恵」であり、その「知恵」を授けてくれることを期待する先生に弟子入りする、あるいはさせるという行動に移る前に、そしてそのことの当否を論ずる前に、まずは何よりもその「知恵」の何たるかを明らかにしようというソクラテスの提言はいかにも「プラトン的」である。してみればここで当然期待されるのは、「知恵とは何か」のあらゆる面からの入念な検討であろう。しかし当対話篇で示されるのは「知恵」そのものについて、それの何たるかを問い、その本質をきわめようとする、プラトンの多くの対話篇で行なわれるような徹底的な探究というようなものではない。テアゲスが求めている知恵は、これこれかくかくようのもの、つまり煎じつめれば「国家社会のことにかけての知恵」であることが明らかにされるだけである。これが本篇の半分を占める第一部の終りまでになされていることであり、これが一切である。もし主題が「知恵について」ということであれば、本来ならソクラテス的探求の出発点に置かれるべき「国家社会のことにかけての知恵」が、これだけ

の対話のあとでようやく発見され、発見されるや手つかずのまま放置されるというのも奇妙なことだと言わなければならない。じっさい第二部においては問題はすでにその先にある問題、つまりそのような「知恵」を得るには誰につけばよいかという事柄に移ってしまっていて、そのようなものとしての「知恵」について何の吟味もなされていないし、いかなる反省も加えられてはいないのである。

かくてこの「知恵」は、プラトンの多くの対話篇においてそれぞれのテーマがあるような意味で本篇の主題でないのは明らかであるし、本篇自体にそくして考察してみても、テアゲスの求める「知恵」は誰によって与えられるか(第二部)、またいかに与えられるか(第三部)という仕方で関連は辿りうるものの、しかしあくまでも主題と見立てるには無理があるように思われる。

では本篇の主題は改めて何か、作者の意図はどこにあるのか。それは必ずしも明瞭ではないが、ただプラトンのいくつかの対話篇が鮮明な形で伝えている、そしてそのいくぶんかは本篇でも察知されるような、前五世紀後半のアテナイの思想状況のなかで、特に若い青年たちとの接触においてソクラテスの及ぼした影響力、ごく一般的な言葉でいえば、ソクラテスの「教育」の性格とその特殊性を明らかにしようとした作者の意図は見てとれる。したがってその主題も「ソクラテスの教育とは何か」とでもいうべきものと見ることができるわけであるが、それは特に第三部の、わけても最後のアリステイデスについてのエピソードに到ってはじめて本格的に語られるものなので、全篇を貫く主題かどうかに関してなお議論の余地はあるだろう。しかしすくなくとも「知恵」とするよりは多くの点でより適切であると思われる。

(2) ダイモーンの合図

本篇の主題として前節の終りで指摘された「ソクラテスの教育」の性格とその特殊性をもう少しくわしく見る前

に、それと密接に関係し、それを最も強力に規定している「ダイモーンの合図」について、ここで若干の考察をしておくことにしよう。ソクラテスは言う、

ぼくには、子供の時からはじまって、神の定めによっていつもぼくにつき従っている、何かダイモーンからの合図といったものが、あるのだよ。それはひとつの声であって、それが現われる時はいつも、ぼくが何かをしようとしていると、それをしないようにとぼくに合図をするのであって、何かをなせと勧めることはどんな場合にもないのだ。また友人の誰かがぼくに助言を求めていて、この声が現われるような場合もこれと同じことで、それはさし止めるのであって、何かを行なうことを許さないのだ(128D)。

われわれはこれとそっくりな言葉を『ソクラテスの弁明』から聞くことができる。そこで彼は自分が国家社会のこと(政治)に関与しない理由として、

わたしには、何か神からの知らせとか、鬼神(ダイモーン)からの合図とかいったようなものが、よく起るのです。……これはわたしには、子供の時から始まったもので、一種の声となってあらわれるのでして、それがあらわれる時は、いつでも、わたしが何かをしようとしている時に、それをわたしにさし止めるのでして、何かをなせとすすめることは、どんな場合にもないのです。そしてまさにこのものが、わたしに対して国家社会(ポリス)のことをするのに、反対しているわけなのです(31C~D)。(田中美知太郎訳)

この一節と、死刑の判決後にふたたび語られる件り(40A~C)とでもってプラトンの報告する、ソクラテスの「ダイモーンの合図」の働きと性格はほぼ尽くされているといってよく、『国家』VIの、これが政治参加を禁じたという記述(496C)にも、『エウテュデモス』272Eや『パイドロス』242B~Cに見られるような、いまの『弁明』の言葉でいうと、日常的な「ごく些細なこと」(40A)つまり、体育場の脱衣室で席を立とうとする時とか、川を渡ろうとする時に現われて、これをさし止める「ダイモーンの合図」の記述にも、『弁明』に述べられていることの例

証以上に新しい点は見当らない。これらのほかにいま一つ『テアイテトス』151Aがあるが、ここでは『テアゲス』におけると同様に青年との交際という場面でソクラテスにこの「合図」が現われる点は、われわれの見地からは注目を引き、しかもそれは『テアゲス』と同じくリュシマコスの子のアリステイデスに関連する記事だけにきわめて興味をそそられるが、ただここでも『弁明』に語られる「合図」の働きと性格はまったく変っていない。また同様の関連が見られる『アルキビアデスI』103A～Bの場合も例外ではない。すなわちこれらすべてを通じてみてプラトンの伝えるソクラテスの「ダイモーンの合図」は首尾一貫しているのである。

これに対して本篇第三部に「ダイモーンの合図」に関して語られるすべてのエピソードに例外なく認められるいくつかの際だった特色がある。その主な特色は二つあるが、まず第一は、この「合図」または「声」が反対ないしさし止めるのは、他の対話篇ではソクラテス自身の行動に対してであるのに比して、『テアゲス』では彼と親しい他の人の行動にも——というよりは、あげられている例ではことごとく他人の行動に——その影響力は及ぶという点である。この点はクセノポンの記す、ソクラテスの「ダイモーンの合図」と一致するものである。すなわち彼の場合、「ソクラテスは、ダイモーンの合図に従って、彼の仲間に、これをなし、これをなしてはならぬと警告した」(『ソクラテスの思い出』第一巻(一の四)。なお同(四の一五)、第四巻(三の一二、八の一)参照)とあり、この二つの点、すなわち「ダイモーンの合図」の力が他人にまで及ぶということと、それから禁止するだけでなく勧告するという点は、プラトンとの齟齬が問題とされるものである。このうちあとのほうのこと、すなわち禁止と同時に勧告する点に関しては、われわれの『テアゲス』では、「何かをなせと勧めることはどんな場合にもない」(128D)と明言され、クセノポンとの共通点はないかのように見える。たしかに何かをなせと積極的に勧めることはないとしても、しかし仔細に見てみると、「ダイモーンの合図」の及ぼす影響力を語って、「それは多くの人たちに対して反対する……しかし他方、ぼくと交わりを結ぶことをそれが妨げない者たちも、たくさんいるにはいる」(129E)とまず

消極的な作用の面があげられ――これは既述の『テアイテトス』の箇所(151A)と表現の上で酷似している[*]――、ついで「しかし、このダイモーンの合図の力がぼくとの交わりを助けるような人たちもいる……すなわち彼らはたちまち急速な進歩を遂げるのだ」(129E)というように、それの積極的な力を暗示し、それを評価する面がうかがえる。これが、『テアイテトス』の著者が同じ問題の同じ脈絡に立ちながらも、けっして見せることのない、『テアゲス』の「合図」の特色の第二点である。

＊ 「……ぼくにいつも現われる例のダイモーンの合図が、そのある者とは交わりを結ぶことを妨げ、他のある者とは交わりを結ぶことを許すのだ。そして後者の場合はふたたび進歩を遂げる」

(3) 「ソクラテスの教育」

つづいて、先に本篇の主題とみなした「ソクラテスの教育」の性格とその特殊性という問題に入ろう。『テアゲス』の作者によってソクラテスの行う教育はどのようなものと考えられているか、その点をまず確認することからはじめたい。それは指摘したように本篇第三部に端的に現われているものである。「ダイモーンの合図の力は、ぼくといっしょに過す人たちとの交わりにまで全面的に作用が及ぶ」(129E)と言われ、その力がソクラテスとの交わりを助け、彼と交わりを結んでいた間は驚くべき進歩を遂げたが、離れてしまったらそれが跡形もなく消失してしまったような人間の一例としてアリステイデスがあげられ、その言葉として、ソクラテスは次のような報告をする。「じっさい私は、……ついぞこれまでに何ひとつとしてあなたから教えていただいたということはありませんでした。にもかかわらずあなたといっしょにいるといつも、私は進歩を遂げたのです。……何といっても私の進歩が最大かつ最もいちじるしかったのは、あなたのおそばに坐り、あなたの体をつかまえ、あなたにじかに触っていた時のことでした」(130D～E)。

すなわち「ソクラテスの教育」は、教師が弟子に学問知識を教えるというような、一方から他方への知識の伝達という形でなされるのではない。神的な意志、「ダイモーンの合図」によって、教師と弟子の関係は決定され、神意によってそのような関係が許されるならば、その親密な交際、特に直接的な接触という仕方で、師の影響力を受け、弟子は進歩向上する、しかしこの点もすべて神的な意志の決定にかかっている、というようなものである。

さてここで気づかれるのは、『テアイテトス』におけるソクラテスの産婆術についての記述との微妙な符合であろう。

> 僕は知恵を生めない者なのだ。……これにはしかし次のような仔細がある。僕は取上げの役の方をしなければならんように神が定め給うているのだ。そして生むことはしないようにこれを封じてしまわれたのだ。だから実際のところ、僕自身ちっとも知恵のある者なんかではないし、また僕には、僕自身の精神から出生したというもので、そんな知恵のある発見は何もない次第なんだ。ところが、僕と一緒になる者、僕と交わりを結ぶ者はというと、はじめこそ全然無知であると見える者もないではないが、しかしすべては、この交わりが進むにつれて、その人々に神がそれを許し給うならば、その者自身の見るところによっても、また他人に思われるところによっても、驚くばかりの進歩をすることは疑いないのだ。それがしかも、これは明白のことなんだが、何ひとつ僕のところからいまだかつて学んだことがあったためではなく、自分で自分自身のところから多くの見事なものを発見し出産してのことなのだ。もっともその際の取上げは神の御業であって、僕もまたそれには微力をつくしているのである(150C～D)。(田中美知太郎訳)

この文章を読んで両対話篇の対応を考えない者はいないと思われるくらいに類似している。が、しかしさらにここで気づくのは、『テアゲス』の場合に、「進歩」ということが再三言われながら、何における進歩か、明白にされていないということである。『テアイテトス』ではこれは明らかに「知」における進歩であって、この点が『テアゲ

ス』のほうではきわめて曖昧である。なるほど「学ぶ」とか「教わる」という言葉、あるいは「議論において何びとにも引けをとらない」(130C)というような表現は知恵や知識を示唆するし、また何よりもテアゲスの求めるのが「国家社会のことにかけての知恵」であってみれば、暗々裡に前提されているのはまさにこうした知恵であるはずであるが、しかしこのような知恵は、ソクラテスとの「直接的接触」によって、たとえ神の助けがあったとしても、得られる性質のものなのだろうか。

さらにもう一つ「国家社会のことにかけての知恵」はプラトンでは初期対話篇のすべてを通じて、たえず、「徳」との結びつきが見られる(『弁明』20B sqq.、『プロタゴラス』313A sqq., 319A sqq.、『メノン』71E, 91A sqq., 93A sqq. など)。ソクラテスの最大の役割は、魂をできるだけすぐれたものにすることにあったのであるから、青年の教育が問題とされる本篇のようなところで、「よりよくする」「よりよくなる」という「徳」の観点が、ほとんど欠落しているのはうなずけない。というのも、「直接的接触」はともかく、師との親しい交わりによって、「進歩」する点があるとしたら、まさに「徳」という点においてであろうから。127Dのソクラテスの言葉に見られる「彼ができるだけすぐれた人間になる」「すぐれた市民になる」、あるいは128Cのテアゲスの、自分の仲間のある者はソクラテスについたら「すぐれた人間になった」というような言葉、さらに頻繁に使われている「裨益する」「役に立つ」というような表現は、他の対話篇ではこの「徳」を示すのに十分なものであるが、本篇ではこれらはいずれもただ単に教育ということの説明以上のものではないのである。

以上のように『テアゲス』における「教育」は、「知」と「徳」という重大な観点からのアプローチを欠くがゆえに、「ソクラテスの教育」は上に述べたような、きわめて特殊な性格を帯びたものになっている。このような、いわば神秘的な秘儀のようなものがはたして実際のソクラテスの「教育」であったであろうか。

四　作者と執筆年代

この対話篇がプラトンの真作として受け入れられているのが見られ、また実際に文献の上で『テアゲス』の名が見られるのは、一世紀のトラシュロスにおいてはじめてである(Diog. L. III. 59)。このことはプラトンの時代から少くとも一世紀までの間に、『テアゲス』はプラトン自身も含めて誰かによって書かれたこと、そしてトラシュロスの時代にはプラトンの真作と信じられていたことを物語るけれども、ほんとうにプラトンの作なのかをさぐる手掛りは、外的証拠がほかに皆無である以上、われわれとしては『テアゲス』という作品自体に求める以外にはない。

これまで指摘した問題点、特に内容上の問題に関するいろいろな疑点は、この『テアゲス』という作品の作者がプラトンかどうか多分に疑わしめるものであった。近年ではこれを偽作とみる者が大半を占めるけれども、しかしプラトンの作でないと断定を下すことはできないわけであるから、フリードレンダー(P. Friedländer, *Plato*, 2, tr. from the German by H. Meyerhoff, 1964 (German ed., 1957), pp. 144 sqq.)のようになお真作説をとなえる向きもないわけではない。が私としては以下に述べる理由でやはり偽作と見なしたい。それはまず第一に、本篇で重要な意味をもつ「ダイモーンの合図」が先に述べたような意味でプラトンの他の対話篇と首尾一貫性を欠くこと。隠れた個人が想定されるとしても、「シケリア事件」の場合のような、事件と「合図」の関係はいかにも奇異に感じられること。次に、教育の問題を語りながら、この種の対話篇では共通に見られる「徳」とそれから「知」的な観点が欠如していること、第三に、「主題」がもうひとつ曖昧であること。論理の運びにプラトンに見られる整然さが欠けていること。構成上の起承転結がはっきりせず、錯綜していること、などが主なものである。

これに加えて、全体として、『テアゲス』の作者は『テアイテトス』の産婆術と「ダイモーンの合図」があわせ語られる一節(150B sqq.)を読んで、この一節から引出したものを「主題」として選んで、作者なりの展開をこの『テ

アゲス』で行なったと思われる形跡があるが、[*] これは若い時のプラトンが本篇のような考え方をもっていて、のちに『テアイテトス』のような形で結実させたというふうに逆の推理の筋道を辿ることはほとんど不可能であること、さらに本篇随所に散在し、その一つ一つが初期から中期にわたるプラトンのいろいろの対話篇を連想させる断片的知識（次ページの注および訳文当該箇所の注参照）は、文字通り断片的で、これはプラトン自身がまだ若い時にいだいていた基本的ないくつかのテーマが未熟なままにここ『テアゲス』に提示されているというよりはむしろ、プラトンのそれらの作品を読んで、それをこのような形に構成した者の存在を感じさせること、以上のようなことを合わせて偽作とする根拠としたい。

ではプラトンの作でないとすると、彼以外の誰によって、いつ書かれたのか。この問題は大まかなところ二つの仮説が提出されている。一つはプラトンの時代に、プラトンの熱心な読者によって書かれたというもので、アカデメイアの誰か一人の弟子が想定される。もう一つはソクラテスの神秘的な側面を強調しようと望んだ前二世紀のプラトンの一読者によって書かれたとするものである。この点に関するくわしい考察はもはやここでは不可能なので、私としては前者に近い線で考えたい――本篇に見られるかぎりでのソクラテスの神秘化は必ずしも後代を要しないであろうから――ということだけを記すにとどめるが、しかしこう考えるにしても実際にはいくつかの難点があるのは事実である。例えば、きわめて具体的な点に問題をしぼっていうと、本文中に現在のこと、あるいは過去のことにしても、その直後のこととして語られている歴史的諸事実は、対話設定年代のみならず、当対話篇の執筆年代の推定にも十分役立つもののように思われる。すなわちこれらの出来事に比較的近い時期に執筆年代も想定するのがふつうであり、自然である。ところが『饗宴』『国家』『パイドロス』、さらには『テアイテトス』をもこの作者が読んでいるというこれまでの推測が正しいなら、『テアイテトス』はプラトン六〇歳頃、前三六八／七年頃の作とされるから、これらの出来事よりすでに四〇年のへだたりがある、というようなものである。これはプラトンの

時代にプラトンの熱心な一読者によって書かれたという推定に矛盾するものではないけれども、そして何世紀かののちの時代の作とするよりは難点は少いものの、問題は不透明なままにとどまるであろう。

＊　このことはしかし『テアイテトス』をもって本篇の唯一の典拠とすることを意味するものではない。『テアゲス』がほとんどそれの模倣であるとみなしうる箇所は、他に『弁明』19E（本篇128A）、『アルキビアデスⅠ』125B〜D（本篇123D〜124A）などがあるし、『饗宴』175D〜E, 177D、『国家』VI. 496B〜C、『パイドロス』242B〜Cなどはモチーフの上での有力な典拠と思われる。

主な使用文献

F. Ast, *Platonis opera*, VIII, Lipsiae, 1825.

Stallbaum-Fritzsche, *Platonis opera omnia*, VI, 2, ed. G. Stallbaum, Gothae, 1835, ed. ii, rec., prolegom. et comment., instruxit A. R. Fritzsche, Lipsiae, 1885.

W. R. M. Lamb, *Charmides, Alcibiades I and II, Hipparchus, The Lover, Theages, Minos, Epinomis* (The Loeb Classical Library), London & Cambridge (Massachusetts), 1927 (1964).

J. Souilhé, *Platon, Œuvres complètes* (Budé), XIII, 2e part., Paris, 1930.

主な邦訳

岡田正三訳『プラトーン全集Ⅲ』所収（全国書房）、昭和二四年、改訳版昭和四四年。

千葉茂美訳『プラトン全集４』所収（角川書店）、昭和四七年。

『カルミデス』解説

山野耕治

一 総説、登場人物、対話設定年代、梗概

『カルミデス』という対話篇は、他の対話篇『リュシス』『エウテュプロン』『ラケス』との共通点も多いが、しかし本篇中のとりわけ「知の知」を取り扱った部分には多くの困難(e. g. 'metaphysical subtlety', P. Shorey)があるということで、プラトンの著作についての真偽論争の渦中にあった一九世紀には、アスト(Ast)、ゾーヘル(Socher)、シャルシュミット(Schaarschmidt)、トロースト(Troost)等のように、プラトンの真作であることを疑う学者も多かった。しかし、その疑いも同じ世紀のシュタルバウム(Stallbaum)、リッター(Ritter)、ヘルマン(Hermann)、シュタインハルト(Steinhart)、ムンク(Munk)、ズーゼミール(Susemihl)、シュピールマン(Spielmann)、アルベルティ(Alberti)、ゲオルギー(Georgii)、後期ツェラー(Zeller)等によりほぼ論駁しつくされ、現今では一般に真作であることが認められている。

のみならず、この短かい対話篇では、対話だけでなく、対話人物や周囲の情況についての描写が実際の対話の余韻を如実に伝えるいわば小説的な魅力や情感にみちあふれ、そうした雰囲気のうちで、知恵と青年を愛せずにはいられなかったソクラテスの教育者としての姿がみごとに浮彫りにされていて、けだしプラトン作品中の「つややか

で新鮮な」(イェーガー)傑作と言えよう。しかも、主要人物として登場するカルミデスとクリティアスがプラトンの身内の人たちであることは、特別の内的必然的な意味を含んでいるものと考えねばならないだろう。

われわれはまず、この対話篇の登場人物と対話設定年代と対話展開のあらすじを見た上で(一)、思想内容上の主要な問題点及びそれと主要人物との関連を検討し(二)、最後にそれにもとづいて、『カルミデス』がプラトンの著作のなかで占める位置と執筆時期を確かめる(三)ことにしたい。

登場人物

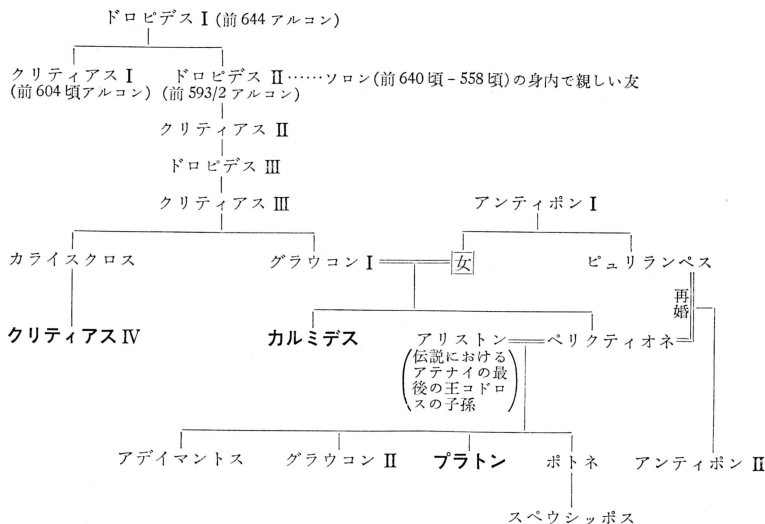
ソクラテス(Socrates)　後に述べるような対話設定年代によって、三七歳頃と想定することができる。

カイレポン(Chairephon)　プラトンの『ソクラテスの弁明』(20E sqq.)によると、ソクラテスに心酔する古くからの親しい友人で、ソクラテスを刑死に導いた事件の発端は、このカイレポンのもたらしたアポロンの神託にあることが示されている。民主派の仲間で、クリティアス(後述)の率いる三〇人独裁政権に抵抗して国外に亡命し、アテナイに民主制が回復するまでその仲間と行動をともにした。

クリティアス(Critias)　プラトンの母ペリクティオネやカルミデス(後述)のいとこにあたる。その先祖ドロピデスは、アテナイ民主政治の基礎を築いた有名な立法者ソロンの身内で、親しい友だった(『ティマイオス』20D)。本篇(157E)で言及される同名のクリティアス(次ページの家系図ではクリティアスⅢ)の孫。

かれの年代は、死亡の年(前四〇三年)が知られているだけで、その他は確実には分からないが、プラトンの母のいとこだから、プラトンの生年(前四二七年頃)より約三〇年前後は前にさかのぼることになるだろう。いまかれの生涯を前四六〇頃—四〇三年とすると、後述の対話設定年代によって、二八歳頃と想定できる。

実際人物としても、クリティアスは、前四〇四年のアテナイ敗戦の直後、スパルタの武力を背景に、三〇人少数党派の独裁政権を樹立したが、翌年、ペイライエウス港のムニュキアでの民主派との市街戦で命を落としている。

家系図

クリティアスは、当時のアテナイにおける最も尖鋭なインテリの一人で、そのすぐれた詩作や散文の断片がおよそ七五(Fr. 88(DK))今日に伝えられているが、そのうちの法律や宗教や道徳を否定した大胆な言葉(Fr. 88B25(DK))や、スパルタの国制風俗をたたえたもの(Fr. 88B6-9(DK))は、かれ自身のうちに危険で反民主的な傾向があることを考えさせる。このクリティアスがソクラテスの教えをうけた(クセノポン『ソクラテスの思い出』第一巻(二の一二以下)、ピロストラトス『ソフィスト伝』五〇一)という事実は、おそらく晩年のソクラテスの立場を困難にしたのではないかと疑われる。しかし、プラトンはソクラテスとクリティアスとのこの接触の事実をひたかくしにすることではなくて、むしろはっきりさせることこそがソクラテスのための弁明になると確信して、クリティアスを本篇に登場させているものと考えられる。

カルミデス(Charmides)　プラトンの母ペリクティオネの兄弟で、プラトンの叔父にあたる。後述のように本篇の対話設定年代を前四三二年頃として、このときカルミデスが一五歳くらいとすると、生年は前四四七年頃となり、プラトンより二〇歳くらい年長、クリティアスよりは一三歳くらい年下ということになる。プラトンの『饗宴』(222B)、『プロタゴラス』(315A)、クセノポンの『ソクラテスの思い出』(第三巻(六の一、七の一

―九)）などのなかに姿を見せている。

実際人物としても、三〇人独裁政権のクリティアス一党に加担し、前四〇三年クリティアスと運命をともにする。かかる人物が、克己節制（思慮の健全さ）の一つの典型として本篇でプラトンにより提供されていることに驚く読者もあろう。そこで、カルミデスの克己節制（思慮の健全さ）は、その青年時代だけに限られていたとする学者もある。しかし、トゥキュディデス（『歴史』第八巻（六八の一―二））がアンティポンの肖像を描くに際して、四〇〇人寡頭政権の主謀者としてはたしたその役割にもかかわらず、かれのアレテー（徳、精神の卓越性）をほめていることをわれわれは思い出すべきであろう。

対話設定年代

本篇の対話が行なわれている年代は、冒頭（153A）で、ソクラテスがポテイダイアの包囲戦から帰還したばかりの時点に設定されているから、前四三二年頃と考えられる。

『カルミデス』における対話展開のあらすじは、つぎのとおりである。

〔本篇は『国家』や『リュシス』と同様に、全体をソクラテスが回想的に翌日物語る、いわゆる間接的対話形式で書かれている。〕

ソクラテスはタウレアスの相撲場（すもうば）で、友人たちにポテイダイアでの戦況を報告し、その話が一段落して、こんどはソクラテスが、自分の一番関心をもっていること、つまり知恵の探究と青年たちの近況について質問する。美少年カルミデスがクリティアスの紹介で、ソクラテスの隣りに坐り、さっそくクリティアスとソクラテスの対話がはじまる。対話のきっかけはカルミデスの頭痛で、ソクラテスはトラキアから持ち帰った療法による治療を約束する。それには唱（とな）えごとと組合わせになった薬草を用いるが、唱えごと（＝美しい言論）ぬきだと薬草にはききめはない。つまり、身体を治療する前にまず精神の健康が心がけられねばならないが、精神の健康とは克己節制（思慮の健全

さ)にほかならない。そこで、クリティアスはカルミデスが姿かたちばかりか、克己節制(思慮の健全さ)によっても、同じ年ごろの青年たちより傑出していることを保証する。ソクラテスは、するとカルミデスには克己節制(思慮の健全さ)とは何であるか、についてもなにか思わくがあるはずだとして、カルミデスにその説明を求める(159Aまで)。

カルミデスは克己節制(思慮の健全さ)とは「一種のもの静かさ」だと答えるが、ソクラテスは、どんな行為においても速い方がもの静かなのよりも美事(みごと)だという異論を立ててその答を却(しりぞ)ける。そこで、カルミデスは「恥を知る心」が克己節制(思慮の健全さ)の特性だとするが、ソクラテスはホメロスの詩句を引用してそれを否定する。こんどはカルミデスは、ほかの人から聞いた説明、つまり「自分のことだけをすることである」という定義を引きあいに出す。ソクラテスはこの定義のぬしはクリティアスだろうとにらみ、この定義に対していくつかの疑念を表明する(159B〜162B)。

(ここでクリティアスが対話の相手となる。)その疑念をはらすために、クリティアスは「する」と「作る」を峻別して「する」に高い価値をおき、「自分自身の事柄」を善いこととよび、善いことをする、つまり「自分のことだけをする」ことが克己節制(思慮の健全さ)だとする。それに対してソクラテスは、ひとが自分のしたことの成果を十分には分っていないのに、善いことをするような場合を持ち出す(162C〜164C)。

そのヒントに従い、クリティアスはこんどは、克己節制(思慮の健全さ)とは自己自身についての知〔自知〕だと言明し、さらにソクラテスにこの知の対象を問いつめられて、ほかのいろいろな知についての知であるばかりか、それ自身についての知〔知の知〕だと答える(164C〜166E)。

それに対してまずソクラテスは、克己節制(思慮の健全さ)は無知(無知識)についての知でもあるということになり、自他について、何を知り何を知らないかを区別できるということを確認する(166E〜167A)。

つぎにソクラテスは、そのような克己節制(思慮の健全さ)の利益を明らかにするため、与えられた定義の正しさを吟味する。正しさに関して、かれはまず二通りの疑念を表明する。一つは精神の諸機能に関するものだが、それらはいずれもそれ自身を対象にしてはいない。たとえば視覚は、視覚自身ではなくて色彩を見る。いま一つは、「より大」とか「より小」のような関係概念に関するもので、それらはいつも他の対象にかかわり、それ自身にはかかわっていない。さもないと、それ自身より大きくてより小さいというようなことになってしまうからである(167B~169B)。

しかし、利益に関しては、それが知の知であるということは確認でき、ただ単に知っている、とは言えるが、何を知り何を知らないかを知ることであるとは言えないという点を挙げて、ソクラテスはその定義の欠点を示す。もしそれが何を知り知らないかを知っていることになれば、ひとが克己節制(思慮の健全さ)からうける利益は大きい。なぜなら、そうなれば、どの職業においても適材適所で、全体の福利、幸福が保証されることになる。それに反し、単なる知の知はわれわれに真の幸福を得させることはできないだろう。知の知はわれわれの学習をもっと容易にし、他人の仕事を吟味する能力をも高めるのかという問いさえも、ただちにそのままは是認されない(169B~172C)。

しかし、知の知が、単に知っているという事実を知っているだけではなくて、その時その時の知の内容までも知っているということをかりに容認しても、幸福の保証にはならない。また、専門知そのものについての正しい判断も幸福の保証にはならない。それに同意して、クリティアスは、幸福を保証するのは「善悪についての知」だけであり、単なる知の知、したがって克己節制(思慮の健全さ)はそれを保証しないという意見をのべる(172C~175A)。

ソクラテスは議論のしめくくりに当り、克己節制(思慮の健全さ)の上述の諸定義を利益と一致させようとする試みはすべて失敗したと語る。とはいえ、定評によれば、克己節制(思慮の健全さ)はやはり有益さと切りはなせないものである。この失敗の責任はくだらない探究者たる自分にあり、それはカルミデスには悲しいことだとソクラテ

スは考える。しかし、カルミデスはソクラテスの探究能力に全幅の信頼をおき、以後ソクラテスの唱えごとに身をささげたいと宣言する(175A～176D)。

二　内容上の主要問題点及びそれと登場人物との関連

(1)「克己節制(思慮の健全さ)」(ソープロシュネー)

本篇の論題は、ギリシア人によって四つの「元徳」の一つと解されていた「ソープロシュネー」の定義である。原語「ソープロシュネー」の意味するところは、プラトンの『国家』(IV. 430E)などの説明によっても、「克己節制」を適訳とするような倫理的、意志的な一面をもつが、それだけではつくせない他の意味がある。原語(動詞形)の文字通りの意味は「健全なる(ソー)思慮(プロネイン)」ということで、本篇中でも、原語に含まれる、その知的ニュアンスは十分に意識されている。〔訳者はそういった原語のもつ広い意味内容を簡潔に示す訳語を見出せず、「克己節制(思慮の健全さ)」という訳語をやむなくえらぶことにした。〕

しかし、具体的に何が「ソープロシュネー」とみなされていたかを、それぞれの時代や国家社会のあり方に即して、あらかじめ考察しておく必要があるだろう。本篇でこの徳の典型としてカルミデスが択ばれていること(157D)から、とくに青年としての徳という面を強調する向きもあるが、それはまた、神人、老若、男女、貴賤を問わず、その分をわきまえた振舞をするものの徳を示すのに使われ、たとえばホメロスでは不死なる神のもつ「わきまえ」「良識」、エウリピデスでは女性の「つつましさ」、アイスキュロスでは臣下の「わきまえ」というようなことを意味し、デモクリトスでは老年の徳とされている。さらに興味あるのは、トゥキュディデスの伝えているスパルタ王アルキダモスの演説で、そこではまさにスパルタの徳としての「ソープロシュネー」が見られるが、上述のごとく、本篇に登場するクリティアスにはスパルタの政治体制をほめた文章があることをわれわれは思い起すべきであろ

う。

これこそが本来的には、自覚的節制（ソープロシュネー）たるの意味をもつものなのである。なぜなら、ひとりわれわれだけが、この特質あるが故に、好境にあってもみだりに驕らず、逆運に屈することも他の人間よりは少ないのである。……われわれがよく戦い、よく計るのは、いつもよく秩序を守るからであって、恥を知るということには、秩序を守る節制が最も多く分有されていて、勇気はその恥を知る心から最も多く得られるから、それがわれわれをよき戦士にするのである（トゥキュディデス『歴史』第一巻（八四）、田中美知太郎訳）。

このアルキダモスの演説中の「よく秩序を守る」は、カルミデスの最初の定義「なにをするにも、秩序を守りかつもの静かに行なうことである」（159B）と関連しており、また「恥を知るということ」「恥を知る心」は、カルミデスの第二の定義「人間に恥を知らしめ、羞ずかしがらせるものです。要するに、克己節制（思慮の健全さ）とはまさしく恥を知る心のことです」と共通しているのは興味あることと言わねばなるまい。さらに、この演説中の「みだりに驕らず」からも連想できるように、「ソープロシュネー」は死すべき人間の分際のわきまえ、無常の認知を意味しており、ネーゲルスバッハ（Nägelsbach）も指摘しているように、「ソープロシュネー」と「エウセベイア」（敬虔）との相関を示す例も少なくない（ソポクレス『アイアス』一二七行以下、『エレクトラ』三〇七行、エウリピデス『バッコスの信女』一一五〇行などを参照）。要するに、「ソープロシュネー」の基本義は、健全なる思慮、正気ということであり、思慮を失うとか、我を忘れるとかいうことの反対だと解されねばならない。これは死すべき人間が自己の分限をさとることに通じ、反面においては、神の尊厳の認識として、なにか宗教的な意味をもつものなのである。

（2）「なんじみずからを知れ」（グノーティ・サウトン）

本篇において(164D～165A)、デルポイのアポロン宮に掲げられた「なんじみずからを知れ」という言葉が、参詣者に対するアポロンの挨拶であって、それは思慮がいつも健全であることを祈るという意味なのだと言われているのも、「ソープロシュネー」の右のような文字通りの意味によるものであろう。「ソープロシュネー」(克己節制、思慮の健全さ)と「グノーティ・サウトン」(自知)とのこのような結びつきは、すでにヘラクレイトスの「自己自身を知ることと克己節制(思慮の健全さ)とは、すべての人間が共有するところのものである」(Fr. 22B116(DK))といった言葉からも予想されるところである。クセノポンの『ソクラテスの思い出』(第四巻(二の二四―三〇))でも、ソクラテスが「自分の力量を知ること」の必要を説くのに、この「グノーティ・サウトン」を用いているが、もしこの「なんじみずからを知れ」が、ソクラテスの哲学の中核的な意味をもつとすれば、それはやはり最も大切な事柄についての、われわれ自身の無知についての知でなければならないだろう。

（3） 知の知

本篇での探究は、「ソープロシュネー」の実践的な面にまったく言及していないわけではないが(163D～E)、この徳の若干の表面的特徴をあっさり片づけたあと、ただちにこの徳の知的な面において尖鋭化する。「自分のことだけをすること」(161B)という概念規定は、「自知」(164D)というより広い説明へ導き、さらに「自知」は「知の知」(166C)の概念に置きかえられる。ドイツの学者ボーニッツ(Bonitz)は、この探究を「ソープロシュネー」の定義とただ形式的に連関させられているだけの「脱線」「オードブル」であると主張して、論戦の火ぶたを切った。しかし、たとえ見かけはばらばらでも、各対話篇の内奥にある共通の関連を見透し、かつ箇々の対話篇間の有機的関係を探究することをわれわれは忘れてはならない。その意味では、明らかに本篇の主部分を構成している「自知」についての詳論を、「ソープロシュネー」の概念規定のためにはたしているその役割の重要さを顧慮することとなし

に、プラトンが挿入したりするはずはないのである。

ソクラテスが「ソープロシュネー」を「ソピアー」(知)に還元させていることは、クセノポンの『ソクラテスの思い出』(第三巻(九の四))やプラトンの『プロタゴラス』などからも知られる。のみならず、他の対話篇(『アルキビアデスI』133C、『恋がたき』138A、『ティマイオス』72A)のなかでも、自明のことのようにして、「自知」はすなわち克己節制(思慮の健全さ)なのだと言われている。

しかし、「自知」を「知の知」に置きかえる方は、そんなに自明のことではないように考えられる。ところが、本篇(169E)では、「知の知」があれば、ひとは自己自身を知ることになるのであって、それは美があることによってひとは美しくなり、速さをもつことによってひとが速くなるようなものだとさえ言われているのである。

たしかに、「自知」の概念をつきつめて考えてみると、知る自己と知られる自己とが同一であるということは、知るはたらきが直接に知るはたらきそのものを知る場合のみに可能であり、その他の場合には、知るものと知られるものとは別であり、知るものは知られるものを知ってはいても、知る自己自身を知るのではないから、それは自己による自己の知ではなくて、他による他の知であると言わねばならない。もし厳密な意味の「自知」を求めるなら、われわれはそれを「知の知」と考えざるをえないであろう。本篇においても、「知の知」の可能性はソクラテスによりくりかえし認められ(169D, 172C, 175B)、多くの疑いにもかかわらず、なんらかの点で有効とされている。しかも、この自己探究は「知の知」としての意識性だけに止まらず、「不知の知」「無知の自覚」に至らねばならない。しかし、「知らないと知る」のは直接の意識ではない。知らねばならない当の事柄なしに、「知らないと知る」ことは成立しない。「無知」は、つねに何かについての無知である。ソクラテスの問答による吟味では、ついに答えることができないということにおいて、われわれは自分が「知らないと知る」わけで、不知が何の不知であるかは、問いのうちに示されている。「不知の知」「無知の自覚」は空虚な形式ではなく、大切な内容をもち、本篇

での暗示(174B〜D)によれば、それは「善悪の知」の欠如ということになるのである。
「知の知」は「善悪の知」に修正還元されることにより、行為一般の最高目的の学的認識として特色づけられる。「善の知」はすべての専門知にそれぞれ固有の価値を与え、人生の幸福に寄与させる。この思想は、他の対話篇、たとえば『エウテュデモス』(290B sqq.)において、幾何、天文、算術の専門家は存在の新しい領域を狩猟し、また発見獲得するが、その獲物はこれをディアレクティコス(哲学的問答家)に委さねばならないと言われていることにも見られるし、『ゴルギアス』(511E)でも、船員たちは、その技術によって乗客を無事に送りとどけてから、上陸して海辺の自分の船のわきを散歩しているが、その態度は、むしろ控え目だ。それは、よく考えてみると、自分は航海をともにした船客たちを海に溺れないようにしてやったが、しかしそれによって、はたして彼らのうち、だれを益し、だれを害したことになるのかは不明だと知っているからなのだ。と言われていて、この思想が簡潔に表現されている。
したがって「知の知」に関するこのくだりは、クリティアスとの対話のはじめ(163C〜D)の「善いことをすること」にまつわる一種の不確かさに新たな照明を与え、それがもつ捨石としての意味の確認を当然われわれに命じることになるだろう。そして、「善悪の知」は、まだ先駆的であり、成熟した形においてではないにしろ、主著『国家』の主要テーマたる「善のイデア」をすでに明確に指示していると言えるのではなかろうか。事実、本篇は「善の知」以外の「いくつかのつながりによっても、『国家』と結びついている」(イェーガー)わけで、「自分のことだけをする」という概念がはじめて提出されるのも本篇においてであり、『国家』での適材適所の分業原理はまさしくこの概念に基礎づけられ(IV. 433A sqq.)、また、一国の優秀な分子が他の分子を支配することに関する国民の同意が、すなわち国家における思慮の健全、節制の徳であり(IV. 432A)、精神の三部分間の一種の秩序(IV. 430E)、友愛協調(IV. 442C)が個人におけるそれであるとされているからである。

三 『カルミデス』の思想的位置と執筆年代

『カルミデス』がプラトンの諸著作のなかで占める思想的位置について考える場合、明瞭なことは、右にのべたように、「善の知」の「知」が徳——本篇の場合では「克己節制（思慮の健全さ）」の徳——の根底に要請されているという事実である。そして、プラトンの初期の諸徳探究の段階においてはいつも、「知」は他の諸徳の根底にはたらくもの、前提とされているが、しかし「知」だけをとりだして、これを特に直接の探究対象としたような対話篇はないと言ってよかろう。「知」が直接的に問題にされるためにはやはり、「教える」「学ぶ」をめぐって「知」を問題とする、いわゆる「プロトレプティコス・ロゴス（哲学のすすめ）」をふくむ『エウテュデモス』、「徳は教えられうるか」という論題から出発して、「教えられうるもの」「知」の可能根拠を問題とする『メノン』、さらには「知」の本質、意味、諸段階を包括的に明らかにする『国家』『テアイテトス』『ティマイオス』等の、青年期以後の諸著作を待たなければならないのである。

しかも、思想内容の面とはまったく別箇に追究された一九世紀後半の文体統計諸研究の成果によると、『カルミデス』が文体から見て、『ソクラテスの弁明』『クリトン』『ラケス』『リュシス』『エウテュプロン』といった一連の作品群と共通していることが明らかになっている。

要するに、思想内容、文体、いずれの線からも、この対話篇は、若き日のプラトンがソクラテスを主役とし、箇々の徳目の哲学的究明を目ざしていたころの、いわゆる「小ソクラテス的対話篇」という最初期著作系列の一つに属することを示している。

この訳・注・解説において参考にした主要な文献（英・独・仏の各種訳書および専門雑誌掲載論文は省略）はつぎ

の通りである。

Heindorf. *Platonis dialogi quatuor. Lysis Charmides Hippias Maior Phaedrus*, annotatione perpetua illustravit L. Fr. Heindorf, Berolini, 1802.

Bekker. *Platonis scripta graece omnia*, rec. I. Bekker, annotationibus Heindorfi, etc., II, Londini, 1826.

Stallbaum. *Platonis Lachetem, Charmidem, Alcibiadem Utrumque* (*Opera omnia*, XX, 1) ed. G. Stallbaum, Gothae, 1834.

H. Bonitz. *Platonische Studien*, Berlin, 1886.

M. Pohlenz. *Aus Platos Werdezeit. Philologische Untersuchungen*, Berlin, 1913.

H. von Arnim. *Platos Jugenddialoge und die Entstehungszeit des Phaidros*, Leipzig und Berlin, 1914.

O. Apelt. *Platons Dialoge Charmides, Lysis, Menexenos*, übersetzt und erläutert von O. Apelt, Leipzig, 1922^{2}.

L. J. Boersma. *Wijsgeerige Studie over Plato's Charmides*, Utrecht, 1929.

W. Jaeger. *Paideia. Die Formung des griechischen Menschen*, I, II, Berlin, 1936.

T. G. Tuckey. *Plato's "Charmides"*, Cambridge, 1951.

P. Friedländer. *Platon*, II, Berlin, 1964^{3}.

E. Martens. *Das selbstbezügliche Wissen in Platons "Charmides"*, München, 1973.

主な邦訳

木村鷹太郎訳『プラトーン全集』巻一所収（冨山房）、明治三六年。

岡田正三訳『プラトーン全集Ⅲ』所収（全国書房）、昭和二二年、改訳昭和四四年。

斉藤忍随訳『世界人生論全集 1』所収（筑摩書房）、昭和三八年。
松永雄二訳 田中美知太郎編『プラトン名著集』所収（新潮社）、昭和三八年。
千葉茂美訳『プラトン全集 4』所収（角川書店）、昭和四七年。

『ラケス』解説

生島幹三

一　作品の形式と構成、登場人物と対話設定年代

作品の形式　この対話篇は、いつか行なわれた対話の状況が、後になって報告者の口から語られるというような形式をとらず、対話者たちが直接登場して語り合う単純なドラマ形式をとっている。

対話の場面設定と構成　対話の行なわれる場所は、アテナイのどこかの体育場であると思われる。リュシマコスとメレシアスの二老人は、青年となった息子の教育に心をくだいている。重武装して戦う術を学ばせることを人からすすめられて、その教師の模範演技を、いま息子たちと見たのであった。そこで、相談相手として同行してもらった当時の著名人ニキアスおよびラケスに対し、またそこに居あわせたソクラテスに対し、この術を学ばせることの是非について助言を求める。学ばせるべしとするニキアス、それに反対するラケス、のそれぞれの意見が表明されたあと、自分の意見を求められたソクラテスは、ことがらについて真に心得のある者の意見にこそ、われわれは従うべきであり、自分はその資格をもっていないと宣言し、したがってニキアス、ラケスそれぞれの資格審査が、これから行なわれるべきであると提案する。

ところで、いまここでは結局「いかにすれば青年たちがすぐれた人間になるか」「いかにすれば青年たちの魂に

徳が生じるか」についての助言が求められているわけである。しかし、そのような助言のできる人は、まず「〈徳〉とは何であるか」を知っていなければならない。そして自分の「知って」いることはまた「言う」こともできるはずである。――このように主張したあとソクラテスは、ただしさしあたりは、徳全体ではなく、その一部分をとりあげることにしよう、そして、いまは重武装術との関連で、徳の中でも〈勇気〉について「勇気とは何であるか」を言ってみることにしよう、と提案する。こうしてまずラケスに対し、つぎにニキアスに対し、その答を求める。しかしソクラテスの吟味によって、両人の提出する答は、それぞれアポリアー(行きづまり)に陥らされてしまう。そこでソクラテスは、われわれすべてが当の問題について無知であり、青年たち以上に、まだこれから学ばねばならないと指摘して、この対話は終えられる。

登場人物

ソクラテス(Socrates)

ニキアス(Nicias)　前五世紀後半ペロポネソス戦争期アテナイの代表的将軍の一人で、また保守貴族派を代表する政治家。富裕で教養があり、温和で慎重な性格の持主。ペロポネソス戦争を、一〇年続いたあと一時終結させるために、スパルタとの交渉に中心的役割を演じた(前四二三年、一年間休戦条約成立。前四二一年、平和条約成立)(トゥキュディデス『歴史』第四、五巻)。しかしまもなくこのいわゆる「ニキアスの平和」も双方から破られた。前四一五年アテナイ民会がシケリア大遠征を議決したおり、その無謀を説いて反対したニキアスは、逆に司令官として派遣された。彼の慎重な性格が災して勝機を逸し、ついに前四一三年日蝕に会って占い師の言に従い、最後の撤退の時期を延期したため全軍の全滅を招き、彼も投降後処刑され、アテナイは大打撃をこうむった(『歴史』第七、八巻)。

ラケス(Laches)　ニキアスとは対照的に、全くの軍人として、この作品に描かれている。ペロポネソス戦争中、前四二七年から二、三年、アテナイがシケリアへ派遣した船隊の司令官として活動(『歴史』第三巻)。プラトンの『ラケス』『饗宴』に

よれば、前四二四年のデリオン戦にソクラテスと従軍していたことが知られる。またニキアスとともに「ニキアスの平和」の締結のために尽力した(『歴史』第四、五巻)。戦争再開後は前四一八年、アテナイがペロポネソス半島に出兵したおり、その指揮官に任ぜられ、マンティネイアの大会戦でスパルタ軍に大敗して戦死した(『歴史』第五巻)。

リュシマコス(Lysimachos)　前五世紀初期のアテナイの大政治家で将軍であったアリステイデスの子。しかし彼自身は『ラケス』の始めに自ら語るように、著名人にはならなかったようで、さらに『メノン』(93E～94E)では、メレシアスとともども、偉人もその徳を子に伝えることのできない実例の中に名をあげられている。

メレシアス(Melesias)　前五世紀中頃のアテナイ政界で貴族派の指導者の一人として活躍したトゥキュディデス(同名の歴史家とは別人)の子。彼自身は無名の人であったらしく、プラトンの『ラケス』『メノン』で、右のリュシマコスと同様のとりあつかいをされている。彼について『メノン』ではさらに「アテナイ随一の相撲の名手にはなったが」と付言されている。なお、リュシマコス、メレシアスは、ともにソクラテスの同区人で、ソクラテスの亡父ソプロニスコスと親交のあったことが、『ラケス』(180E)でリュシマコスの口からのべられている。

リュシマコスの息子(アリステイデス)　**メレシアスの息子**(トゥキュディデス)　どちらの青年も、それぞれの祖父の名を継いでいて、自分の経験にこりた父親たちが、その教育に心をくだいていることが『ラケス』でのべられている。この作品中では、平生家で彼らが話題にしてほめたたえているソクラテスとは、この人のことかとリュシマコスに問われて、返事する箇所(181A)以外では発言していない。

対話設定年代

ラケスの口から、デリオン戦(前四二四年)でソクラテスと従軍してその勇気に感心したことが、生々しく語られている。したがって、その後まもない頃に、この対話は設定されていると解してよいであろう。この戦の年に、ソクラテスは四五歳である。彼より年長とされる(181D)ニキアスとラケスも、それほど年はちがわなかったようで、まだ五〇歳前の壮年であったとみてよいであろう。(なお、前四二七年生れの作者プラトンは、当時まだ幼児であったことになる。)また、戦の翌年、前四二三年から、ちょうどこのニキアス、ラケスの尽力により、一時平和が回復されている。その頃の対話と考えてもよい

であろう。

二　作品の主題と議論の梗概

主題　一の「対話の場面設定と構成」のところでのべたような事情で、議論の主題は「勇気とは何か」を明らかにすることにある。また古代以来（後一世紀のトラシュロスの編集したプラトン全集にも見られるように）この作品には「勇気について」という副題が付けられてきている。

議論の梗概　「〈勇気〉とは何か」に対するラケス、ニキアスの解答の試みと、それに対するソクラテスの吟味。

(一)　ラケスの解答(1)——戦列に踏みとどまって敵を防ぎ逃げようとしない人は勇気のある人である。

ソクラテスの吟味——それとは逆の行動をしていても、勇気のある人であるばあいがある。要するに、それは勇気のある人々のさまざまなばあいの一例にすぎない。しかしいま求められているものは「勇気のすべてのばあいに共通に存在している、その〈勇気〉とは何か」である。

(二)　ラケスの解答(2)——〈勇気〉とは一種の忍耐心(καρτερία)である。

ソクラテスの吟味——〈勇気〉は美しいものである。忍耐心のうち、〈思慮ある忍耐心〉は美しく善きものである。しかし逆の〈無思慮な忍耐心〉のほうが、思慮あるそれよりも、忍耐心としては、より大きい。そこで忍耐心を勇気と考えるかぎりは、そのほうがよりいっそう勇気であるとせざるをえない。しかしそれは、有害で醜いものであり、したがって勇気ではありえない。

(三)　ニキアスの解答——(「知者が、その自分の知っていることがらに関して、善き(すぐれた)人である」というソクラテスの持論に沿って考えるべきである。ところで勇者もまた、よき人であり、したがって知者である。)〈勇気〉は一種の〈知〉、つまり「恐ろしいものと恐ろしくないものとについての知」である。

さらにラケスからの反論に対する応酬の中で、ニキアスはつぎのように付言する。なお、これらもソクラテス的見地にたった考えといえよう。(イ)一般の専門的技術知は、それぞれの技術に関するかぎりで、やはり「恐ろしいものと恐ろしくないものの知」をもつが、〈勇気〉のほうのは、より高次の、真の意味でのそれである。(ロ)それは「どのようなできごとが起るか」の知(予言者の知もこのようなもの)ではなく、ことがらの真の意味での善悪を知る知である。(ハ)また、無知であるゆえに恐ろしいものを恐れない者は、単なる〈恐れ知らず〉(ἄφοβος)〈大胆なもの〉(θρασύς)であり、〈勇気あるもの〉とは別のものである。

ソクラテスの吟味——「恐ろしいもの恐ろしくないもの」とは予期される(未来の)善と悪に他ならない。ところでいかなる知も、自分のとりあつかう対象に関しては、現在のことも過去のことも未来のことも、その一つの知が知っているものである。したがって、善と悪に関しても、同じ一つの知が、未来のことだけでなく、現在過去のことも、知っているはずである。すると〈勇気〉は、単に「恐ろしいものと恐ろしくないものの知」であるだけでなく、結局端的に〈善悪の知〉に他ならないことになる。ところで、この〈善悪の知〉をもつ者は、節制、正義、敬虔等のいずれにおいても欠けるところはない。すると、この知は、徳の一部分としての〈勇気〉ではなく、〈徳〉全体であることになる。しかし、求められていたのは徳全体ではなく、その一部分たる〈勇気〉であったから、問は答えられなかったことになる。

こうして、以上提出されたいくつかの解答の試みは、ソクラテスの吟味により、すべてアポリアーに陥ったことになって、この議論は終る。

三　作品の性格と意図、残される問題点、執筆年代

作品の性格と意図　この作品は、倫理的諸問題について、対話者を吟味して無知の自覚に至らしめるという、いわ

ゆるソクラテス的吟味の行なわれているさまを描いた作品の、典型的一例であると言えよう。しかしまた対話者の提示する答が批判吟味されてゆく過程の中に、ソクラテスないしプラトンの積極的な見解や観点も示され、またソクラテスの問答法の特徴も示されている。しかしそれらをいままたくりかえしのべる要はないであろう。

ただこの作品も、プラトンの初期ソクラテス対話篇の例にもれず、アポリアーに陥ったままで終えられている。つまり最後に、〈勇気〉が善悪の知(しかも窮極的な意味での「善悪の知」)であるとすれば、それは徳の一部分ではなく、徳の全体になってしまうという難点が指摘されて終えられている。

このような結末をつけていることを、どう解すべきであろうか。勇気を善悪の知とすることの矛盾、徳を知とすることとの矛盾を指摘することによって、プラトンないしソクラテスが、自分の知徳合一説を批判しているのであるとか、さらには、プラトンがソクラテスの説を批判しようとしているのであると、この作品の意図を解釈することも可能ではあろう。しかしやはりむしろ、勇気を単なる徳の一部分と解した前提の誤りが示されて、勇気も善悪の知に帰着するものであり、他の諸徳と結局一つのものであることが、示されていると解すべきであろう。

これより後の作品と思われる『プロタゴラス』をみると、『ラケス』の議論が少し形を変えて再現されている箇所(329C〜334C, 349A〜360E)がある。そこでは勇気だけでなく、正義、分別、敬虔、知恵の五つの徳目が、けっして別々のものではなく、一つの徳、つまり〈知恵〉に帰着することが、『ラケス』よりも積極的な形で主張されている。しかも、他の徳目とちがって知としてとりあつかわれることに疑問を感じられ易い〈勇気〉については、とくに詳細に論じられ、〈勇気〉は、やはり「予期される悪としての恐ろしいものと、恐ろしくないものに関する知恵」とされている。この『プロタゴラス』にあるような観点からみるならば、他の諸徳目をあつかった初期対話篇、例えば分別をあつかった『カルミデス』、敬虔をあつかった『エウテュプロン』などでも、それぞれの特殊性をもちながら、『ラケス』とだいたい類似した順序をたどって吟味が行なわれ、最後はアポリアーに終りつつ、同じ結論が志

向されていると認められるのである。そして『ラケス』はそれらの中でも、筋の曲折が少く、結論も察知し易く、もっとも簡明なものと言えよう。

残される問題点（徳と知の結びつきについて）　徳が一つに帰着するとしても、各徳目のもつ特殊性は、いかに位置づけられ説明されるべきかという問題は残るであろう。その意味では、勇気が問われているにもかかわらず徳一般が答えられたという『ラケス』の結びのアポリアーは、まだ解かれていないことになる。そこで諸徳目を、「善悪の知」としての〈徳〉のもつ各様相（アスペクト）（例えば勇気は、善悪の知の、恐ろしいものと恐ろしくないものの知としての様相）というような表現で表わしてみることができるかもしれない。しかしそのばあいにも、そのような各様相の特殊性を規定しているもの、いわば一つの知に帰着せしめられている諸徳目の元の素性のようなものが残っていて、さらに説明を求めるであろう。そしてプラトンの後の諸作品においては、魂の構造についての解明が行なわれ、徳と知の結びつきについても、さらにさまざまな説明が試みられている。それらについては、『パイドン』（68～69, 82A～B）『メノン』（88A～89A）さらに『国家』（とくにⅣ）を参照されるべきであろう。とくに『国家』では、〈勇気〉は魂の中では、魂の三部分の中の〈気概的部分〉（テューモエイデス）の徳とされる。そして、「恐ろしいもの、恐ろしくないもの」について自分の理性の示す〈知恵〉を苦痛快楽のうちにあって保持しとおすこと、が〈勇気〉であるとされる（442C. また429A～430Cを参照）。つまり、勇気その他の徳が「善悪の知」に帰着するという『ラケス』『プロタゴラス』で示された見解は、一貫してプラトンの徳の考えの頂点をなしている。（もっとも、『国家』では「善の〈イデア〉の知」という考えが明確にされている点に留意すべきであるが。）しかし他方でまた、ラケスで排除されたかにみえる「恐ろしいものと恐ろしくないものの知」にも、〈忍耐心〉にも、また素質的な意味での「恐れ知らず」（ἄφοβον）「気概」（θυμός）のようなものにも、やはり、〈勇気〉との関連で、それぞれの場所が与えられているのをみることができよう。

執筆年代　この作品の執筆された年や他著作との相対的な先後関係について、はっきり断定するための手がかり

ソクラテス対話篇と呼ばれるプラトンの初期作品の中でも、ごく初期のものの一つと考えることができるであろう。

ている。他方イデア論や魂に関する理論など、理論的な発展や深化はまだみられないものである。そこでいわゆる

徳目に関して）追究している問答のさまを再現しようとした形の短篇であり、しかも結論は否定的な形で終えられ

は何も与えられていない。ただ、以上にみたように、この作品は、生前のソクラテスが倫理的問題を（それも或る

後記

翻訳、解説の作成に当っては、諸近代語訳、注釈書をはじめ、諸研究書を参照したが、とりあげて特記するものもないように思うので省略する。なお、現在まで公にされた『ラケス』の最近の日本語訳としては、つぎのものがある。筆者自身の前訳に対しては、今回改訳に当って、気づくかぎりその誤りを訂正するとともに、より原文に近づけた訳文にするなど、全体にわたって手を加えた。

岡田正三訳『プラトーン全集Ⅲ』所収（全国書房）、昭和二二年、（改訳版）昭和四四年。

生島幹三訳　世界文学大系『プラトン』所収（筑摩書房）、昭和三四年。

世界古典文学全集『プラトンⅠ』所収（筑摩書房）、昭和三九年。

『リュシス』解説

生島幹三

一　作品の形式と構成、登場人物と対話設定年代

語り手　この作品は、ソクラテスが語り手として登場して、かつて自分の行なったある日の対話のことを報告するという形式で書かれている。つまり、この巻所収の例で言うと『カルミデス』と同形式である。

対話の場面設定と構成　さて、その対話の行なわれた場所は、アテナイの或る体育場である。そのそばを通りかかったソクラテスは、知り合いの青年ヒッポタレスとクテシッポスに呼びとめられ、その中へ誘いこまれる。そうしてヒッポタレスの恋する美少年リュシス、およびその親友でクテシッポスのいとこメネクセノス、の二少年を相手に対話を行なう。ヒッポタレスから、パイディカのとりあつかい方の手本を示すことを求められたからである。——このような状況設定も『カルミデス』と似ていて、また同様に美しく描かれている——。さて、少年たちとの議論がすべてアポリアーに帰着したのち、ソクラテスはさらに青年たちをも議論にひきこもうと考える。そこへ二少年それぞれのパイダゴーゴス（お伴の召使）が来て、もはや夕暮だからと二人を連れ去り、集りは閉じられる。以上のように設定されている。

登場人物

ソクラテス(Socrates)
ソクラテスと対話する四人に関しては、いずれもプラトン著作の中以外に、彼らについて知る手がかりが、われわれに与えられていない。

クテシッポス(Ctesippos) 『エウテュデモス』に登場し、「若いために生意気であることを除けば、性質のいたってすぐれた青年」(273A)とソクラテスに評されている。

メネクセノス(Menexenos) 彼自身の名で呼ばれる『メネクセノス』に、青年に成長した姿で登場している。なお、クテシッポスとメネクセノスは、『パイドン』(59B)によると、ソクラテスの臨終の場に居あわせた人々の中に、その名をあげられていて、ソクラテスと親しい間柄にあったことが察せられる。

ヒッポタレス(Hippothales)と**リュシス**(Lysis) この『リュシス』以外にはその名がみられない。
いずれにせよ、四人ともアテナイの一流の名家の子弟であったと考えられる。
年齢的には、二青年(一五歳から一八歳の間ぐらい)も二少年も、それぞれ互いに同年ぐらいであろう。ただリュシスはメネクセノスよりやや幼く描かれ、また恋の初心者ヒッポタレスのほうをクテシッポスよりも若くとることもできよう。

対話設定年代

この作品中でのソクラテスの年齢については、終(223B)に「老人である私」と語られている。その他には『カルミデス』や『ラケス』とちがって、設定年代を推定する手がかりになる事件などは何も示されていず、また他の四人の生歿年を教えてくれるような資料が他から得られるわけでもない。したがって、それ以上に詳しく彼の年齢を定めることはできず、また、この対話も、ソクラテスの老年のある日に設定されていると解しておく他はない。

二　執筆年代、作品の主題、作品の意図と性格

執筆年代　プラトンがいつごろこの作品を書いたかに関しても、確実な手がかりは、作品の中にも外にもわれわれに与えられていない。しかし、文体や構成や思想の展開度などから判断して、プラトンの初期著作の中でも早い時期のもの、『カルミデス』や『ラケス』と同じ年代の作品としておくのが妥当であろう。

作品の主題　この作品の中で行なわれる議論の主題は、「友とは何であるか」ということである。これはソクラテスが、ここで話相手にした二少年の互いの少年らしい友情のさまを見て、選ぶことになっている(212A)。したがって、古代以来の(紀元後一世紀のトラシュロスの編集したプラトン全集にも付けられている)「友愛(ピリアー)について」というこの作品への副題は、適当であるといえよう。ただ前述のような場面の設定から、美少年を恋する年長者のエロースの問題が、ここでの対話の外枠を作っていて、少年たちと語るソクラテスの言葉の中でも、話の経過に聞き耳をたてている青年ヒッポタレスにあてて、暗にエロースの問題に言及されるところがある(210D, 222A)。また元来ギリシア語のピリアー(φιλία)は、狭義では友愛友情を意味するものの、広義では愛一般を意味するから、元来愛欲を意味する強烈な愛エロースはむろんのこと、欲求一般さえその中に含められる可能性をもっている。動詞のピレイン(φιλεῖν)にしても同様であって、さらに無生物その他事物や事柄のもつ傾向性習性を表現するのにも用いられる。また「友」という語ピロス(φίλος)も、元来それらと同根の形容詞で、「愛(いと)しい、好ましい、親(した)しい」を意味する。(なお、この形容詞は、普通このように、受動的な意味の語、つまり愛される側のものを形容する語であるが、またときには、何かを「愛好している」という能動的な意味で、愛する側のものを形容するために用いられる可能性ももっている。)それを名詞化して「友」の意味で用いられるときも、やはり元の広い意味をもち続けている。とくにそれが男性形ピロスから中性形のピロン(φίλον)(いずれも単数主格形で示しておく)に変えられるとき

は(この訳文では便宜上、どちらの形も「友」と訳す)、さらに一般化されて、要するに「愛しいもの、好ましいもの」の意味になる。この作品中の議論でも、むしろこの「ピロン(友)とは何であるか」という一般的な形で問がなされてゆく。以上のような事情から、この論題は、そこにいろいろな要素のものが、伸縮自在にとりこまれて自由に論じられる余地をもっている。そこでこの作品も、単なる友愛論友情論の枠を遠くはみだしてゆくのである。

作品の意図と性格　さてこの作品の議論は何をめざしたものであろうか。互いに仲のよい友だちになっている以上、君たちはとうぜん「友とは何か」を心得ているはずであるから、教えてほしいともちかけて、少年二人とこの論題を吟味した末に、すべての答の試みをアポリアー(行きづまり)に導き、結局少年たちもソクラテス自身も、このことを少しも理解していなかったことになる、と話を結んでいるのであるから、他のいわゆるソクラテス的対話一般と同じ性格をもっていると言えよう。つまり日常自明に思われているものが、じつはけっして単純なものではないということを指摘して、相手の無知の自覚を促すという目的をはたしているわけである。

他方またそれは、いまのべたような言葉の意味の広がりを背景として、ピロン(友)というもののもつ種々相を明らかにしているともいえようし、また人間の愛憎の諸側面にふれているところもあるといえよう。しかし他の初期著作もそうであるが、ここでもやはり、単なる否定的結論に終るだけでなく、また一般的な愛の検討ではなく、問題に対する独特のソクラテス・プラトン的見解が表示されているとみてよいであろう。ときには彼らの思想の諸モチーフが、高らかにかなでられてさえいる。また一見平凡な友愛の話題から出発して、いつの間にか、窮極的なものへの愛というとほうもない高みへ問題をもちこんでしまうというソクラテス的対話の面目をも示している。後の諸作品(たとえば『饗宴』『パイドロス』また『国家』)の中でそれぞれの形で詳しく展開されるように、ソクラテス・プラトンにとって、愛は結局つねに愛知とよき生に結びつけて考えられるのである。また年長者の少年に対するエロースも、その関係の中でのみ問題にされるのである。

結局この対話の目的も、この愛知とよき生へ人をいざなおうとするソクラテスの中心的課題に帰着するといえよう。なお、この作品に対しては、古来、さきの副題とともに、作品の性格標示語として、「助産術的」という語が添えられている。

なお、この作品では、ソクラテスは少年二人だけを議論の相手にしている。つまりこれは青年ヒッポタレスの依頼どおり、パイディカに対する対話の手本を示すものであった。そこで、相手といっしょに「友とは何か」を吟味するといっても、普通のように、ソクラテスの問に相手から答が提出されて、それをソクラテスが吟味するといういわゆる他者の吟味の形にならず、一方的にソクラテスの方で自ら答をつぎつぎに提案しては、また自らつぎつぎにそれを論破し去るのである。少年たちは彼の一々の言葉に諾否を与える役をはたすだけである。しかもその論法は極めてソフィスティックである。いわば老練のソクラテスが二人の少年だけを相手に、ロゴスを自由自在にあやつってたわむれ楽しんでいる趣がある。そのさまを簡潔で軽妙瀟洒な筆で描いているところに、この作品の大きな魅力があるともいえるであろう。

〔付　記〕　議論の構造と解釈に関する私見

議論全体は、内容的にみて、つぎのように区分してみることができるであろう。

導入部（207D～210D）（メネクセノスが座をはなれている間に行なわれるリュシス相手の予備的対話）

ここでの結論――

人は知者として心得のあることがらに関しては自由に行動することができ、他人のこともまかされて支配者となる。賢くなり役にたつ善き人であれば、誰もがその人と友になる。

主部　（座にもどってきたメネクセノスを相手に――途中リュシスに相手を交代させる部分もある――行なう対話）

第一部(212A～213D)

「愛するものが友か」「愛されるものが友か」「愛し愛されるものが友か」が検討され、いずれも否定される。

第二部(213E～216B)

A(213E～215D)「似ているものどうしが友か」が検討され、否定される。

B(215D～216B)「反対のものどうしが友か」が検討され、否定される。

なお、以上の第二部で、「善きものどうし」も「悪しきものどうし」も「善きものと悪しきものと」も友とはならないことが示される。

第三部(216C～221D)

「善くも悪くもないものが善きものを友とするのか」

A(216C～217A) この説の提示。

B(217A～221D) この説の検討。

(i)(217A～218D) 善くも悪くもないものが善きものを友とするのは、自分のところにある「悪のゆえに」である。

(ii)(218D～219B) そして、それは何か別の「善(友)のために」である。

(iii)(219C～220B) このような目的としての友(善)の系列を溯ってゆくと一番始源の第一の友に達する。この窮極の「第一の友」こそ真の友である。

(iv)(220C～221D) この説の否定。

第四部(221D～222D)

A(221D～222B)「欲望をもつものが自分の欲するものに対して、そのときそのときに友となる」という説が検討される。ついで「オイケイオン(自分のもの、血のつながったもの)が友である」説が提示される。

B(222B～222D)「オイケイオンが友」説が吟味され否定される。

以上のように、ここで提案された解答の試みは、すべて同等にアポリアーに陥らされた形になっている。しかし、やはりこの著作での著者の積極的見解は、第三部の説にあり、そして〈第一の友〉つまり窮極の善こそ、真の友であるとする見解に、この作品のクライマックスがあると解してよいであろう。(この第一の友に、後の『国家』で展開されることになる善のイデアの姿を予見することも許されるであろう。)私見を言えば、「友とは何か」という問題も、結局導入部で提示されたような善(益)・悪(害)の見地から検討しようとするのが、この作品での本意ではなかっただろうか。そこでまず第一部の案の見地が却けられ、第二部の案も根本的なものではないとして吟味されて、第三部の案が提出されるわけであろう。善きものどうしも、悪しきものどうしも、善きものと悪しきものの間でも、また、善くも悪くもないものどうしも、相手を益することはありえないのである。他方第四部の始めの「欲望をもつものが自分の欲するものに対して友となる」という説を、それ自身として考えるならば、欲望も広義の愛であり、結局第一部の説の見地に帰着すると言えはしないだろうか。

最後に「オイケイオン(自分のもの、血のつながったもの、親縁性のあるもの)が友である」という説が提出されて、その吟味が第四部Bでなされている。つまり、まずこの意味の曖昧な〈オイケイオン〉という語が、もし〈似ているもの〉というほどの意味であるとすれば、この説は第二部のA説に帰着する。他方「万人にとって、〈善きもの〉が〈オイケイオン〉(自分のもの)である」という見解を採用して、〈善きもの〉が〈友〉であるとすれば、結局そのときは〈善きもの〉と〈善きもの〉とが友という考えになり、これも第二部のA説の中で否定された見解である、と論じられている。いま私見を言えば、〈オイケイオン〉を〈善きもの〉と考えて、それを〈友〉と解するにしても、〈自分のもの〉(自分のもつべきもの)として〈善きもの〉を友とする万人の側も、〈善きもの〉でなければならないわけではないであろうから、むしろ万人を〈善くも悪くもないもの〉と解して、この説を第三部の説へ帰着させることも可能ではないだろうか。

ただ、〈自分のもの〉ないし〈似ているもの〉を〈友〉とする考えを、もっと積極的にとらえる態度も、第四部Aには暗示されていると解することができるように思われる。そして後の『饗宴』や『パイドロス』などで、その立場が展開されることになると解釈することも許されるであろう。つまり、〈善きもの〉は、奪われたり失ったりした元々〈自分自身のもの〉(オイケイオン)である——あるいは——〈善きもの〉は、元来〈善きもの〉であったわれわれと〈親縁性をもつもの〉(オイケイオン)で

ある、と解することによって、このような〈善きもの〉をわれわれは愛求せざるをえないと説明するわけである。(しかし、それも結局、とらえ方表現の仕方こそちがっても、この作品の第三部の主張の内容と、基本的には同じ見解になると思われる。「善くも悪くもないものが、自分のところにある悪のゆえに善を友として愛求する」ということよりも、「元来善きものが、自分のところから奪われた善をとりかえそうとすること」のほうが積極的なとらえ方であるかもしれないが。)なお、後の『国家』(IX. 590D～591A)には、理想国家の中で人々が、互いに似たものになり、友となるという見解も見出されることを、付言しておきたい。

後記

翻訳、解説の作成に当っては、諸近代語訳書をはじめ、諸研究書を参照したが、とくに何かをとりあげて特記することもないように思うので省略する。最後に、現在まで公にされた『リュシス』の最近の日本語訳を列記する。筆者自身の訳も、すでに二度出ているわけであるが、今回、自分の前訳の誤りを気づくかぎり訂正するとともに、より原文に近づけた文にするなど、全体にわたって手を加えた。

岡田正三訳『プラトーン全集III』所収(全国書房)、昭和二二年、(改訳版)昭和四四年。
三井浩訳 三井浩他訳『「リュシス」「パイドロス」「酒宴」』所収(玉川大学世界教育宝典)、昭和三四年。
山本光雄訳『世界人生論全集1』所収(筑摩書房)、昭和三八年。
生島幹三訳 田中美知太郎編『プラトン名著集』所収(新潮社)、昭和三八年。
生島幹三改訳 田中美知太郎編『世界の名著 プラトンI』所収(中央公論社)、昭和四一年。

222C～D
欲望　221A～E
——が愛の原因　221D
——と善悪　220E～221B
善くも悪くもないもの
——どうしは友でない　216E, (222C～D)
——が善きものを友とする　216C～217A；〔悪が存在するゆえに〕217A～218C, (220C～D, 221C)；〔まだ悪くならないとき〕217B～218B；〔他の善きもの(友)のために〕218D～219B；〔第一の友のために〕219C～220B　→最初の友

ラ 行

論駁家　216A

身体　218B, 220C
　——の病気，健康と医者(医術)　217A～B, 219A, C

タ　行

第一の友　→最初の友
知
　——を愛する心(愛知)　213D
　——を愛する人(愛知者)　212D
　——を愛する〔知らないことを知らないと考える人が〕　218A～B
　——を愛さない〔知者も無知な人も〕　218A～B
知者　→知
　——は知を愛さない　218A
敵
　憎まれるものが——　213A
　憎むものが——　213B
　悪人どうしは——　214C
　似たものどうしは——　215C
　——にとって友(友にとって——)　213A～C
　——が友と友ではありえない　216B
　——のゆえに，善きもの(友)の友　219A～B, 220E
友(ピロス，ピロン)〔本篇の主題〕　→解説〔付記〕の表参照
　最初の(第一の)——と，もろもろの——　→最初の友
　——だちのものは共有のもの　207C

ナ　行

憎む
　——のに愛される(憎まれない)　213C
　愛するのに，——まれる(愛されない)　212B～C, 213A, C
　——まれるものが敵　213A
　——ものが敵　213B
似ているもの
　——どうし　〔友である〕214A～B；〔友でない〕214E～215A, E, (218E, 222C, E)；〔敵である〕215C～E

ハ　行

パイダゴーゴス　208C, 223A
パイディカ(愛童)　204D, 205A, E, 206C, 210E, 212B, 222A
　〔——のとりあつかい方〕　205E～206B, 210E
反対のもの
　——どうし　〔友である〕215D～216A；〔友でない〕216A～B, (218B, 222E)
病気　217A, 218E～219A, 220D　→身体

マ　行

無知　218A
　——と愛知　218A～B

ヤ　行

役にたたない
　似ているものどうしは——　214E, 222B～C
　悪がなければ善は——　220C
役にたつ
　——ものは友になる　210C～D, (215A, 222C)
善きもの(善き人，善)
　——どうし　〔友である〕214C～E；〔友でない〕214E～215C, (216D, 222C～E)；〔敵である〕215C～D
　——は悪しきものと友でない　214C～D, (216B, D)
　——は自分で十分　215A
　——と善くも悪くもないもの　→善くも悪くもないもの
　——と欲望　→欲望
　——は(万人にとり)自分のもの

『リュシス』索引

数字とABCDEは，ステファヌス版全集のページ数と，各ページ内の段落づけである．本全集訳文の上欄に示された数字とBCDE(Aは数字の位置)は，おおよそこれに対応している．固有名詞(人名・地名その他)は原則として「総索引」に一括して収める．

ア 行

愛する
　一方が——とき，どちらも友か　212B～C
　互いに——とき，友か　212C～213A, (C)
　愛されるものが友か　213A, (C)(222E)
　——ものが友か　213B～C, (222E)
　——のに愛されない(憎まれる)　212B, 212D～213A, C
愛知，愛知者　→知
悪しきもの(悪しき人，悪)
　——どうしは友でない(敵である)　214C～D, (216D, 222D)
　——は善きもの(人)と友でない　214D, 216D, 217B～C, 218A
　すでに——は善きものと友にならぬ　217B～218B
　——は自分自身とも似ていない(友でない)　214D
　——は何ものとも友でない　214D, 216E
　——と善くも悪くもないもの　→善くも悪くもないもの
　——と欲望　→欲望
　——は(万人にとり)よそのもの　222C
医者，医術　209E～210A, 215D, 217A～B, 218E～219A, C　→身体
愛しいもの　212D～213A, 216C
美しいもの　216C～D
奪いとられたもの　221E　→欠けているもの
エラステース(恋する人)　205A～B, 222A　→パイディカ

カ 行

欠けているもの　221D～E
体　→身体
健康　217A, 218E～219A, C　→身体

サ 行

最初の(第一の，ほんとうの)友　219C～220E
　——と，もろもろの友　219C～220B, E
自然
　——や万有につき論ずる人たち　214B, (215C～216A)
自分のもの(オイケイオン)(自分自身のもの，血縁のもの，血のつながったもの)　221E～222E
　愛は——に向かう，友は互いに——　221E～222A
　——が友か　222B～E
　——が似ているものなら　222B
　——が似ているものでなければ　222C
　善きものが(万人にとり)——なら　222C
白さ　217D～E

味〕198A～199E　→恐ろしいものと恐ろしくないもの
——と恐れ知らず(大胆，向こうみず)　197B～C
徳の一部分としての——　190C～D, 198A, 199E
——のある(勇敢な)，——のあるもの(人)(勇敢なもの，勇者)　182C, 184B, 190E～197C
行きづまり状態(アポリアー)　194C, 196B, 200E
予言術　→占い師

ラ 行

ラケダイモン人　182E～183B, 191C
りっぱでよき人　186C, 187A

C, E, 200C～E
ソフィスト　186C, 197D

タ 行

体育家　184E, (185B)
大胆(な)，向こうみず(な)　182C, 184B
——は勇気と同じではない　197B～C
魂
——の世話，学びごと　185E～186A
——がよきものになる　186A, 190B
——に徳が生じる　190B
——の一種の忍耐づよさ　192B →忍耐心
ダモン〔音楽教師〕　180D, 197D, 200A～B
知　→知識
知っているなら言うこともできる　190C
それが何であるか(そのもの自身)の——　189E～190C
各人は知っていることに関して，よき人である　194D
勇気(勇者)は——(知者)である　194D
知識(知)
正しい判断は——による　184E
同じものについては，同一の——があつかう　198D～199B
恐ろしいものと恐ろしくないものとの——　→恐ろしいものと恐ろしくないもの
善と悪の——　→善と悪の知識
デリオン
——からの退却　181B, (189B)
徳　184C, 189B; 188C, 190B
——の全体と，その一部分としての勇気　190C～D, 198A, 199E
——の諸部分(勇気，節制，正義，敬虔 etc.)　198A, 199D
——の全体としての善悪の知　199D～E
ドリア調　188D, 193E

ナ 行

農夫(農作術)　195B, 198E
忍耐心(忍耐づよさ)
勇気は一種の——　192B,194A〔ラケスの勇気の定義〕
——と思慮(技)，無思慮　192C～193D〔ソクラテスの吟味〕

ハ 行

速さ　→迅速
悲劇作家　183A
プロディコス　197D

マ 行

学びごと(術)(μάθημα)　181E～183A, 184B～C, 185E
青年たちの——と，いつも従事すること　179D～180A, C, 186D, 190E
無思慮
——な忍耐心　192D～193D
無知
——と恐れ知らず　197B

ヤ 行

勇気〔本篇の主題〕　190D～200D
——とは何か〔ソクラテスの提題〕　190D～E
——のある人とは　〔ラケスの第一の解答〕190E;〔ソクラテスの吟味〕191A～E
——とは一種の忍耐心　〔ラケスの第二の解答〕192B;〔ソクラテスの吟味〕192C～193D　→忍耐心
——とは「恐ろしいものと恐ろしくないものとの知識」　〔ニキアスの解答〕195A;〔ソクラテスの吟

『ラケス』索引

数字とABCDEは，ステファヌス版全集のページ数と，各ページ内の段落づけである．本全集訳文の上欄に示された数字とBCDE(Aは数字の位置)は，おおよそこれに対応している．固有名詞(人名・地名その他)は原則として「総索引」に一括して収める．

ア 行

医者，医術　192E, 195B～D, 196A, D, 198D

いつも従事すること(ἐπιτήδευμα)　182C, 183A, C, 185B

　青年たちの――　→学びごと

占い師，予言術　195E～196A, D, 198E～199A

臆病(臆病な)　184B, 191E

恐れ知らず

　――は勇気ではない　197B

恐ろしいものと恐ろしくないもの

　――の知，知者〔ニキアスの勇気，勇者の定義〕195A～196A, 196D～197C；〔ソクラテスの吟味〕198A～199E

　――の知と他の技術知　195B～196A, D

　――とは，予期される(未来の)悪と悪くないもの(善)　198B～199B

音階(調)　188D

カ 行

神さま　196A, 199D

技術(技，術)　185E, 186C, 193B～C, 195B

　――者(――家，――をもっている人)　185A～E, 195B, D

　――と忍耐心　192E～193C

　諸――(――者)と，恐ろしいものと恐ろしくないものの知識(知者)

　→恐ろしいものと恐ろしくないもの

国務，国務に携る人　180B, 187A, 197D

言葉と行動

　――が協和音をなす　188D, 193E

サ 行

思慮

　――あるもの　197C

　最大の――　197E

　――をともなった(――ある)忍耐心　192C～193D

視力，聴力　190A～B

重武装術(重甲術)　178A, 179E, 181C, 182D, 185C, 190D；〔ニキアスの評価〕181E～182D；〔ラケスの評価〕182D～184C

　――の教師　183A～B；〔ステシレオス〕(178A, 179E) 183C～184A

助言者〔の資格〕　185A, D, 186A～B, 189D～190C

将軍の術　182C, 198E

迅速(速さ)〔の定義〕　192A～B

先慮　197B

善と悪の知識

　すべてのばあいの――　199C～D

ソクラテス

　――の吟味(対話)　187E～188B

　――の父(ソプロニスコス)　180D～E, 181B, 187D～E

　――と青年の教育　180C～E, 186

サ 行

視覚　167C, 168D
自己自身を知ること　164Dsqq., 169Dsqq.
自分自身の事柄＝善いもの　163D
自分のことだけをすること　161Bsqq.
将棋　174B
白い墨糸　154B
審議　160A
姿かたち　154D～E, 158B
頭痛　155Bsqq.
相撲場　153A, 155D
「する」　163Asqq.
政治の技術　170B
精神の鋭さ　160A
善悪についての知　174B～C
船長　173B
想起　159E

タ 行

体操競技　159D
正しさ　170B
たましいとからだ　156E
知　168Asqq.
知恵の探究　153D
知(について)の知　166E, 168Asqq.
聴覚　167E, 168D
「作る」　163Asqq.
「抵当の近くに身の破滅」　165A
デルポイの銘文　164Esqq.
「度をすごすなかれ」　165A
唱えごと　155Esqq., 175Esqq.
トラキア人〔の医術師〕　156Dsqq., 175E

ナ 行

謎　161C, 162A～B
「なんじみずからを知れ」　164D～165A
二倍のもの　168C

ハ 行

恥を知る心　160Esqq.
バシレの神殿　153A
機織(はたおり)(術)　161E, 165E, 174C
「はたらく」　163Bsqq.
パンクラティオン　159C
半分と二倍　168C
他人(ひと)のことをする人　163A
他人のものを作る　163A, 164A
——人　163A
秤量の技術　166B
船を操縦する技術　174C

マ 行

美事な〔ことがら〕　159Csqq.
無知(無知識)　166Esqq.
名辞　163D
もの静かさ　159Bsqq.
ものわかりのよさ　159E

ヤ 行

夢のような話　173A
善いもの(善いこと，善)　163Dsqq., 166D, 174Bsqq.
養生法　156C
欲望　167E
予言術　173C
「よそごと」　163C
読み書きの先生　159C, 160A, 161D

ラ 行

立法者　175B
恋愛　167E

『カルミデス』索引

数字とABCDEは，ステファヌス版全集のページ数と，各ページ内の段落づけである．本全集訳文の上欄に示された数字とBCDE(Aは数字の位置)は，おおよそこれに対応している．固有名詞(人名・地名その他)は原則として「総索引」に一括して収める．

ア 行

熱さ　168E
いいように行る(うまく行く)　172A, 173D
意志　167E
医者(医術師)　155B, 156Bsqq., 170Esqq., 173B
　ザルモクシスの流れをくむトラキア人の――　156Dsqq., 175E
医術(医療)　156Bsqq., 161E, 165C, 170B～C, Esqq., 174C, E
色彩　167D
動き　168E
美しく資質のすぐれた人物(善美の人)　154E, 157E
占い師　174A
大きさ　168E
多さ　168E
音の調子に関すること　170C
思わく　159A, 168A
音楽の技術　170C

カ 行

快楽　167E
過失　171Dsqq.
家政　171E, 172D
金物細工　173E
感覚　159A, 167D
記憶　159E
幾何の技術　165E
キタラ　159C
気転がきく　160A
恐怖　167E
極北人　158B
ギリシア語　159A
軍司令官　173B
軍隊を指揮する技術　174C
計算〔の技術〕　165Esqq., 174B
健康　165C, 170B, 174B, Esqq.
建築　161E
　――術　165D, 170C
拳闘　159C
幸福(いいダイモーンがついていること)　172A, 173D～E, 176A
国政　171E, 172D
克己節制(思慮の健全さ，健全な思慮)　157Asqq.
　＝もの静かさ　159Bsqq.
　＝美事なことがら　159C
　＝恥を知る心　160Esqq.
　＝自分のことだけをすること　161Bsqq.
　＝自己自身を知ること　164Dsqq.
　＝知　165C
　＝ほかのいろいろな知についての知であるばかりか，それみずからについての知〔知の知〕　166C
　＝知(について)の知　166E
　＝何を知り何を知らないかを知ること　167A, 169D
　＝善悪についての知　174B
　――の利益　164Csqq., 167B, 169B, 171Dsqq., 172Dsqq., 174Dsqq.

「独裁支配に関すること一切をわきまえている」者(知者)　125E
つく，つかせる　→弟子入り
ティマルコス　→ダイモーンの合図
弟子入り〔する，させる〕(弟子〔にする，にとる〕，つく，つかせる，師事〔する，させる〕，交わり，交際〔する〕，いっしょにいる，いっしょになる)　122A, 122E～123B, 125A～E, 126C, 127A～C, 128A, C, 129E～131A
独裁君主(独裁者，僭主)　124E～126A
「――は知者との交わりによって知恵あり」　125B, D
――を養成する先生　125A
独裁支配　124E

ハ 行

裨益〔する，される〕(役に立つ，利益)　126D, 127D, 129E～130A, E

マ 行

交わり　→弟子入り

ヤ 行

役に立つ　→裨益
遣る〔教育を受けるために誰々のもとに――，行く〕　125A, 126B～C, 126E～127A

『テアゲス』索引

数字とABCDEは，ステファヌス版全集のページ数と，各ページ内の段落づけである．本全集訳文の上欄に示された数字とBCDE(Aは数字の位置)は，おおよそこれに対応している．固有名詞(人名・地名その他)は原則として「総索引」に一括して収める．

ア 行

合図　→ダイモーンの合図
アリステイデス　→ダイモーンの合図
いっしょに過す(いっしょにいる)　128B, 129E～130A
エペソス遠征　129D

カ 行

神
　──からの知らせ　131A
　──の定め　128D
　──になる　126A
カルミデス　→ダイモーンの合図
教育〔を受ける，をほどこす〕〔全篇の主題〕　122B, E, 127E, 130E
　読み書き，琴の演奏，相撲その他の競技などの──　122E
恋に関するちっぽけな学問　128B
交際〔する〕　→弟子入り
声　→ダイモーンの合図
国家社会のこと　→政治

サ 行

定め　→神
サニオン　→ダイモーンの合図
シケリアで起きたこと(＝シケリア事件)　→ダイモーンの合図
師事　→弟子入り
政治(国家社会のこと)　126A, C, 127A
　──家(──の専門家，国家社会のことにかけての知者，──にかけて有能な人たち，──にかけてひとかどの立派な人物)　126A, C～D, 127A, E
僭主　→独裁君主
ソフィスト(知者，若者を教育することができると標榜する人たち)　121D, 122A, 127E～128A

タ 行

ダイモーン〔から〕の合図(神からの知らせ)　128D～E, 129B, D～E, 131A
　アリステイデスのエピソード　129E～130E
　カルミデスのエピソード　128D～129A
　サニオンのエピソード(＝エペソス遠征)　129D
　シケリア事件　129C
　ティマルコスのエピソード　129A～C
　──の声　128D～E, 129B～C
知恵(ソピアー，知識，エピステーメー)　123A～124B, 125A～E, 126D, 128A
　国家社会のうちにあるすべての人間を制馭・支配する──(＝政治術)　123E～124A, 125E
知者(知恵ある者，ソポス)　121D, 122E, 123B～C, 125B～D, 126A～C
　国家社会のこと(政治)にかけての──　126C

プラトン全集 7　　　第6回配本(全15巻　別巻1)

1975年3月5日　発行

¥2200

訳者　北嶋美雪(きたじまみゆき)・山野耕治(やまのこうじ)・生島幹三(いくしまかんぞう)

発行者　岩波雄二郎

東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします　　精興社印刷・牧製本